

FRANCE SHOUIN NAPOLEON BUNKO

紅くりす

画 梨加夫

世界で一番危険な男

ただいま実験中！

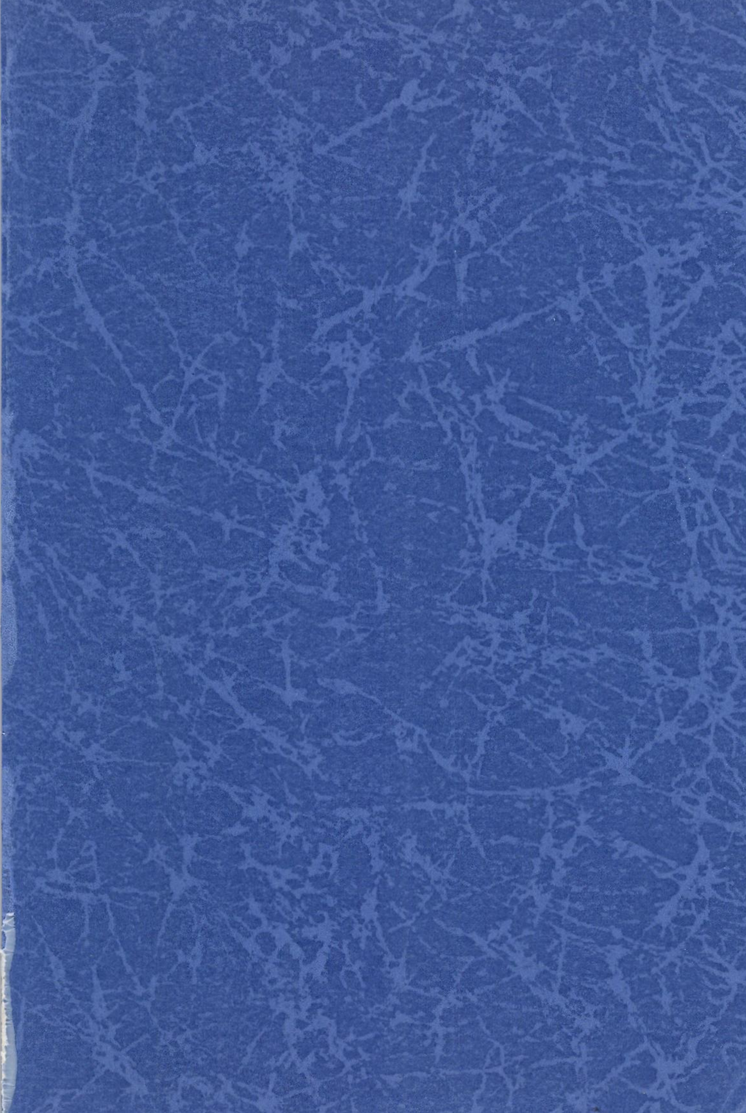
イケナイ

フランス書院

ナポレオン文庫

Sekai de Ichiban Kiken na Otoko

Tadaima Ikenai Jikkenchuu!



世界で一番危険な男

ただいまイケナイ実験中！

紅くりす

画 梨加夫

フランス書院  ナポレオン文庫

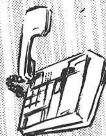
世界で一番危険な男

ただいまイケナイ実験中!

●もくじ



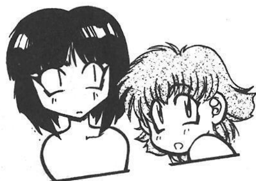










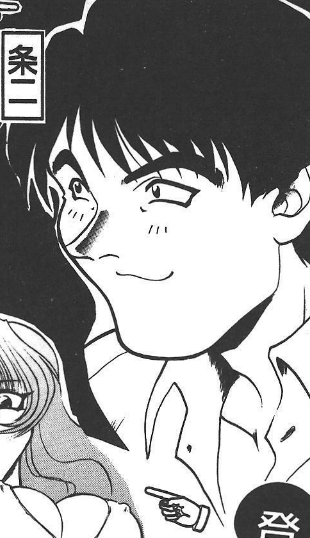


挿画＝紅くりす



登場人物





条二
猿顔のサラリーマン。
謎の男にさらわれて!?…





晴海
条二の同僚
イケイケOL。





三平太
条二の秘密を
さぐる科学者。



麻衣子
三平太の娘。父の
研究に協力している。





進
条二の弟。
気弱な童貞クン。



律子
条二の従姉妹。







桃代
進の幼なじみ。



世界で一番危険な男

ただいまイケナイ実験中！

まえがき　くりすからのお願い♡

ねぇねぇ、人生って不思議だな、って思ったことはない？
くりすはねぇ、今、自分のことをとっても不思議に感じているの。
だって、以前はHな小説なんてぜーったい書けないって信じてたのに、今じゃ、もぉ、アソコがヌルヌル……じゃなくて、Hなお話をたっくさん書いちゃってるのよね。まさか、こんなにたくさんエッチな小説を書けるなんて、想像もしてなかったわ。
このナポレオン文庫は、くりすの何冊目の本になるのかしら？
最近じゃ、ナポレオン文庫だけじゃなく、新聞の連載小説とかも書いてたりして、すっかり本物っぽい官能作家さんになってしまいました。や～ん、恥ずかしすぎるぅ。
ホントにホントに、人生ってわかんないよね。自分の思い通りにならないんだもん。

あ。思い通りにならない、といえば、くりすって、いつもあなたの言うことばかり聞いてると思わない？
だから、今日のくりすは悪い子になることに決めちゃう！
ワガママで生意気で、あなたの言うことなんか、ぜーんぜん聞かない悪い子になるの。
だから、ディープキスもおフェラも、絶対しなーい。でも、エッチはどうしようかな？
して欲しい？　えへへ、どうしようかしら。
じゃあねぇ、くりすの言うことを聞いてくれたら、してもいいよ♡
まず最初にわたしのお洋服を脱がせて。今日は白地に大きな黄色いバラの花をいっぱいちりばめたフェミニンなワンピースなの。すごく薄い素材だから、そっと脱がせてね。
ランジェリーはDカップのブラとおそろいのレースでできたパンティよ。あなたと会う時は必ずガーターベルトをつけてるって、知ってた？　ガーターでストッキングをとめたままパンティを脱ぐと、アソコだけが剝きだしになっちゃって、すごくHっぽいよね。
でも、まだ触っちゃダメよ。今日はくりすの言う通りにしてくれなくちゃ、イヤ。
んーとね、ブラをはずして、お胸に触って。あなたの大きな手のひらで包みこんで、やさしくモミモミってするの。ひゃあ、乳首がコロコロに尖ってきちゃった。
あーん。こんな恥ずかしい姿をあなたにじっくり見つめられてバストを揉まれると、胸

がドキドキして身体中が熱くなってくるわ。まだアソコを撫でてもいないのに、エッチなお花のずっと奥のほうから熱い蜜が溢れてきちゃう。ひょっとして濡れてるかも⁉
ねぇねぇ、わたしの大事なところがどんなふうになってるか、見てみたい？
じゃあ、見る前に太腿のつけ根に指を入れてみて。
や～ん、くりすの膝小僧をつかんで左右にひろげなさい、なんて命令してないでしょ。やだやだ。そんなに熱い視線でアソコをじいっと見つめないでぇ。そんなふうに花びらをひろげたりしたら、アソコの中がすっかり丸見えになっちゃ……きゃ～、そんなにクリ×リスを転がしちゃダメぇ！
んもぅ、今日はくりすの言うことを聞いてくれなくちゃ、イヤ！　まだエッチなことはしちゃダメなの！　だって、今日は、くりすが書いた世界で一番危険な男のお話を読んでから、ふたりでエッチを楽しみたいんだもん。
このお話は、最近、くりすの人生が不思議な力に導かれてセクシー&ハッピーになってきたのをヒントにしたの。主人公の**佐久間条二**（さくまじょうじ）クンは絶倫で、信じられないくらい巨大で太いペニスを持ってたおかげで、人生がメチャメチャになってしまうの。自分の人生なのに、自分じゃどうにもできなくなっちゃうのよ。おもしろいから読んでね。
全部読み終わったら、ケダモノみたいにたっぷりしてして。くりすからのお願い♡♡♡

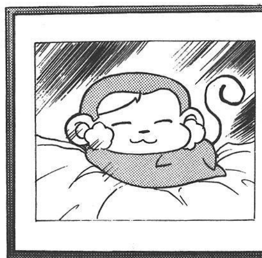
第1章　朝から生エッチ!?

佐久間家には大人らしい大人はひとりもいない。
この家を建てた夫婦が数年前に交通事故で亡くなったせいだ。
おかげで長男の**条二**（じょうじ）は高校在学中から今日までの間、世帯主、父親、母親、そして兄の4役をひとりでこなしていた。
今朝の条二は美人だった母親のかわりを務め、弟の**進**（すすむ）と自分のためにキッチンでハムエッグを焼いている。周囲には厚切りパンが焼ける香ばしい匂いが漂い、コーヒーメーカーはポコポコと音をたてている。
「ひいいっ、痺（しび）れるっ。もっとマ×コをかきまぜて！　ぶっといチ×ポを奥まで突っこんでよおっ！」

朝食をつくる条二の目の前で、気の強そうな美人が小麦色の太腿をパックリ割りひろげ、はしたない言葉を連発してよがりまくっている。
「もっとしてえっ！　見てるだけじゃイヤ、壊れるくらいあたしを犯してよぉっ」
女の子は3人の男たちに犯されていた。豊かな乳房を自分の両手でわしづかみに揉みしだき、汗まみれでキラキラ光る裸身をひくつかせている。大きく開かれた唇からはよだれが溢れ、その目は条二のほうへ向けられていた。
「ひいいーっ、もっとぉーっ！　イキそうなのぉっ！　お願いよぉっ、そんなとこで見てないであたしを犯して！　もっとメチャクチャにしてぇーっ！」
ヴァギナを犯していた男はブルッと尻を震わせて中出しをし、つづけて女の子の顔の上にまたがって萎えたチ×ポをフェラチオさせようとする。からっぽになった膣には別の男が元気な剛棒を挿入していく。
「うぐーっ！」
条二は、3つの穴を同時に犯され、恍惚となって下半身をくねらせる女の子の痴態を見つめながら、焼きたてのパンにバターを塗った。コーヒーをカップに注いでハムエッグにフォークを突き刺す。
「に、にーちゃん！」

見ると、リビングの入り口に進が真っ赤な顔で立っていた。
「朝っぱらからアダルトビデオなんか見るのはやめてくれって言ってるだろ。そんなにボリュームを大きくしてると、近所に聞こえちゃうじゃないか！」
毎朝ＡＶを見ながら食事を取るのが条二の日課なのに、進はいつも兄の邪魔をする。
条二は渋々リモコンで音量をしぼった。だが、ビデオは絶対に消そうとはしない。
「ったく。いーじゃねぇかよ。この女、オレの会社の晴海(はるみ)によく似てるんだよ」
晴海というのは、条二の会社にいる美人ＯＬ**小宮晴海**(こみやはるみ)のことだ。
晴海は25歳の条二と同期入社だが、短大卒なので歳はまだ23歳だ。身長は１６１センチで、日に灼けた小麦色の肌にスリムな身体つきをしている。脚はすんなりと長く、ふくらはぎから細く引きしまった足首まできれいなラインがすごく魅力的だった。おでこが広い逆三角形の美貌はあまりにも整いすぎて勝ち気に見られることが多く、背中のなかほどまである褐色のロングヘアにふんわりしたパーマをかけてやさしそうなイメージを持たせている。
条二の言う通り、たしかにブラウン管の中でよがっている女の子は晴海によく似ていた。目もとのきついところや顔のパーツの配置がそっくりだ。
「晴海のやつも、実はこの女みたいにすげぇドスケベで、男たちに寄ってたかってレイプ

されてるとこを視姦されるのが大好きなインバイだったりして」
条二はテーブルに頬づえをつき、ニヤニヤしながらＡＶを見つづける。
「やだなぁ。条二兄ちゃんって、どうしてこんなにエッチなんだろ？」
進はブツブツ言いながら顔を洗ってキッチンへ戻ってくる。ＡＶを鑑賞している条二の真ん前に座ろうとして、「どけろ」と一喝された。
ふたりの容貌は似ているようで似ていない。
兄の条二は父親似の猿顔で筋骨たくましく、小学生の頃からペキン原人やネアンデルタールなど原始人系のあだ名をつけられることが多かった。しかし進はミスユニバースで地区最終予選まで残ったという美人かつグラマーな母親に似たきゃしゃな美少年だった。
条二の粗野で荒削りな容姿と進の繊細で美麗な風貌はとても対照的で、血を分けた兄弟だと言っても信じてもらえない時もある。
「イクイクイクうーっ！　スペルマいっぱいかけてぇ。あっああーん、もっとーっ！」
女遊びに慣れていて絶倫の条二は、こんなよがり声など聞き飽きていたが、高校1年生で純情な童貞クンの進には、若い女の嬌声はあまりにも刺激が強すぎる。
「朝っぱらからあんな声を聞かされたんじゃ、食欲なくなっちゃうよ」
「おっはよ〜。あー、いい匂い。食欲そそられちゃうわぁ」

大きなあくびをしながらリビングに入ってきたのは、母方のイトコの戸部律子だった。21歳になったばかりの律子は、会社の出張で一週間前からこの街にきていて、佐久間家にずっと泊まりこんでいる。切れ長の目の黒い瞳を眠そうにショボショボさせてキッチンに入ってくる。寝相が悪いのか、パジャマの上着はクシャクシャで、裾の下からズボンがわりのボクサーパンツがのぞいていた。

「あ、悪い。おまえもいたんだっけ」

「失礼ねぇ……ちょっと、それって、あたしの朝食は自分でつくれってこと？」

律子はさらさらしたストレートボブをかきあげ、両手を腰に当てて前かがみになって条二の顔を覗きこむ。その弾みに胸のボタンがひとつはずれて、窮屈そうに並んでいる白い巨乳の谷間が見えた。

条二の双眼は生つばゴックンもののセクシーショットを見逃さなかった。

「ムチムチもち肌娘。95センチEカップ特上」

「やっ！　もう、ジョージのバカっ！」

律子は真っ赤に頬を染めて胸の谷間を隠し、条二の頭をげんこでパカッと殴りつけた。プリプリしながら冷蔵庫を物色しにかかる。一番下の野菜貯蔵室を覗きこむと、今度はボクサーパンツをはいたおいしそうな太腿が丸見えになって、側にいる進は目のやり場に困

ってしまった。
「律子姉ちゃん、ボクのぶん、食べていいよ」
「あら、どうしたの。食べないの？」
「うん。ボク、食欲なくって」
「わははは。こいつ、AVの毒気に当たったってやがんだぜ。まぁ、童貞だからしょうがないといえばしょうがないけどな」
「兄ちゃん！　ボクのこと、童貞童貞って言わないでよ！」
「だって本当のことじゃないか。進は童貞、桃代(ももよ)は処女。オレは絶倫、リッコはさせマン……」
「なんですってぇ!?　もーいっぺん言ってみなさい。タダじゃすまないわよ」
「兄ちゃん、桃代が処女だって本当なの？」
律子は真っ赤になって大声でわめきだし、進はポカンとして兄に問いかえす。
桃代というのは進と同い年の幼なじみで佐久間家の隣の家に住んでいる。ふたりは幼稚園から高校まで同じ学校に通っているのだが、桃代は進とちがって寝起きが悪く、中学に入った頃から進が毎日のように迎えにいって起こしていた。時々、桃代の母親に頼まれて彼女の部屋まで直接起こしにいく時もある。

桃代は身長165センチで、腰のあたりまである茶色のロングヘアがご自慢だった。目もとパッチリ口もとキリリの美形な上にさっぱりした性格なので、男子たちからも人気があり、学校ではアイドル気取りで振る舞っている。しかし、幼なじみの進とふたりきりになると美少女の殻を脱ぎ捨てて高校1年生の生意気な女の子になる。

そんな桃代を前にすると、進は、桃代が自分を好きだから素直に振る舞うのか、それとも進のことを、毎朝起こしにきてくれる忠実な下僕（しもべ）もしくは単なる男友達だと思っているのか、判断がつかなくなってくる。

「ジョージ、あんた、もしまたあたしのことを『させマン』なんて呼んだら、今度は絶対勘弁しないからね！」

律子はもうカンカンに怒って、条二の背中を握った拳でボカスカ殴りつける。

「わー！　やめろやめろ」

「兄ちゃんってば、桃代は本当に処女なの？」

「あーうるさいうるさい。おっ。もうこんな時間じゃないか。進、ちゃんと戸締まりしていけよ。ほんじゃ、ま。いってきまーす」

条二はしつこく襲撃してくる律子の腕を振りほどいて汚れた食器をシンクに片づけ、逃げるようにキッチンから飛びだしていく。

「ジョージったら！」
「り、律子姉ちゃん」
「なによっ？」
律子は怖い表情で進をキッとにらみつける。進は真っ赤になって視線をそらした。
「あの……。オッパイ、見えてるよ」
条二を懲らしめた時にパジャマのボタンが全部弾けてしまったらしく、律子の白い巨乳は完全に丸出しになっていた。

☆

午前9時。
条二が会社のデスクで報告書をまとめていると、晴海が困ったような顔つきで声をかけてきた。
「佐久間くん、システムの立ちあげがどうしてもできないの。ハードディスクの読みこみまではいくんだけど、メニュー画面が出てこないのよ。ちょっと見てくれない？」
「しょうがないなぁ」
条二は晴海のあとについて隣のコンピュータ室へ入っていく。
晴海がいつも使っているパソコンはコンピュータ室の一番奥にあった。ところが、条二

がモニターを見てみると、いつも通り初期画面が浮かびあがっている。
「なんだよ、ちゃんと動いてるじゃないか」
回転イスに座ったままで振りかえると、晴海は真剣な表情で条二を見降ろしている。
「嘘をついてごめんね。あたし、佐久間くんに聞いて欲しいことがあって、ここまできてもらったの」
「人生相談なら街角の占い師にでもしろよ」
「そんなんじゃないけど……ちょっと近いかな?」
晴海は条二の顔から視線をそらし、ゆるくカールした髪の先を指先に絡みつける。
「システムが動くんなら、オレはもう戻るぜ」
「待って!」
晴海は立ちあがろうとする条二の両肩をつかんでイスに押し戻した。真剣な表情で彼の瞳を真っ直ぐ見つめる。
「あのね、あたし、入社試験の会場で初めて会った時から、佐久間くんのことを、なんだか原始人みたいだなぁって思ってたの」
その瞬間、条二は「は?」と聞きかえしたまま、ヒューマンタイプハニワのようにあんぐり口を開けた顔で固まってしまった。

「だって、佐久間くんって背がすごく高いし、骨格ががっしりしてるし、筋肉もたっぷりついてるでしょ。それに、顔なんか、どっちかっていうと荒削りって感じで……言いかたを変えれば『彫りが深い』ってことになると思うんだけど、色黒でたくましくて猿顔っぽいでしょ。だから、原始人みたいだな、って思ってるのよ、あたし」

条二は眉間にしわを寄せて問いかえす。

「小宮、今おまえが言ったことって、褒め言葉なんだよな？」

「え？　ええ、そうよ」

「あんまり褒められたような気がしないんだけど、サンキューって言っておくよ。じゃあな、達者で暮らせよ」

コンピュータ室を出ていこうとする条二の腕を、晴海がとっさにつかんで引きとめる。

「待って！　あのね、あたしが言いたかったのは、あたしは原始人みたいな人が好きだ、ってことなの。……つまり、あたしのこと、佐久間くんの恋人にしてくれない？」

条二を見つめる晴海の顔がみるみるうちに赤くなっていく。

「あの……。えっと、恋人を前提としてつき合って欲しい、ってゆーか、恋人になりたいからあたしとつき合ってみて、ってゆーか……。あーん、うまく言えないっ」

条二は晴海のあわてぶりがおかしくて、ついプッと吹きだしてしまった。晴海を見つめ

たまま、わは、わは、わははは……と笑いだす。真剣な表情の晴海を見ているうちに、女子社員の数人が晴海の美貌に嫉妬して、「小宮晴海はオカマだ」という噂を流していることを思いだしたのだ。その噂は今では男子社員の間にもひろまっている。
「なによっ。どーして笑うの？　あたし、真剣なのよ。佐久間くんのこと、ずっと前からいいなと思ってたんだから」
条二はなおも笑いながら晴海に聞きかえした。
「おまえさぁ、オレたちの間で『小宮晴海はオカマだ』って噂になってるのを知らないのか？」
「なんですって!?　ちょっと、どこのどいつがそんなでたらめ言ってるのよ？」
「どいつもこいつも言ってるぜ。本当なのか？」
「そんなことあるわけないでしょ。あたしは正真正銘の女よ。女でなきゃ、佐久間くんに告白したりしないわよ」
「そうは言うけど、世の中には男が好きなオカマってのもいるよな」
ニヤニヤ笑う条二を見つめる晴海の双眼に、涙がぶあっと盛りあがってくる。
「いーわよ。そこまで言うなら証拠を見せるわ。それならいいでしょ？」
女子社員の制服はマリンブルーと濃紺のコンビで、ジャケットとベスト、ミニのタイト

スカートの3点セットになっている。オフィスではほとんどの女子社員がジャケットなしで仕事をしていた。

晴海は条二のまん前に立って、ベストのボタンをはずしていく。好きな男の前で自分から服を脱いでいくという羞恥が、彼女の頬を赤く染めあげる。

条二は無言のまま晴海を見つめていた。

晴海は条二の視線を痛いほど意識しながら、白いブラウスの胸もとを開く。その下から淡いブルーのキャミソールと同色のブラジャーの肩ひもが出現する。

「ねえ、ここまでしても、わかってくれないの？」

なじるような目で見あげる晴海に、条二はうなずいてみせた。

「プレゼントの中身は外見だけじゃわからない。パッケージを全部取ってみないとな」

晴海は褐色の瞳に涙を浮かべてキャミソールを脱いだ。思った通り、ブラジャーはアイスブルーでこんもりと盛りあがった乳房をすっぽり包みこんでいる。つづけてスカートのファスナーをはずした。

(普段なんとも思っていなかった女が、自分の目の前で裸になろうとしている。それもまだ朝早い会社の中で)

普通では考えられないできごとに、条二は興奮を覚えた。トランクスに包まれた極太ペ

ニスが、ムクムクと根元から充血してくる。
「早くしないと、誰かがくるかもしれないぞ」
条二は晴海をわざとせかした。
晴海は両手でつかんでいたスカートをパサリと床へ落とした。キャミソールとおそろいのフレアパンティの股間を片手で隠すようにして、恥ずかしそうに条二の顔を見る。
「全部脱がなきゃダメ？」
「少なくともパンティは脱いでもらわないと、オカマかどうか判断できないな」
「イジワル」
小さな声で言って、フレアパンティに両手をかける。コンピュータ室のドアに鍵をかけ忘れたのを気にしながら、ランジェリーをゆっくりずり降ろしていく。太腿の途中まで降ろして、もう一度条二を見た。
「これでいい？」
「まだまだ。毛を見ただけじゃ、わかんないだろ？」
晴海は首筋まで真っ赤に染めて薄い唇を尖らせた。ヤケになって、パンティを一気に両脚から抜き取る。
「ひどい人ね。あたしをこんな格好にして」

「オレが望んだことじゃない」

「イジワル！」

晴海はブラジャーだけをつけた姿で1歩前へ出た。そして、条二が座る回転イスの肘かけに右脚をスッと乗せる。条二の目と鼻の先に女の秘部がつきつけられた。

「ほら、見てよ。あたしはオカマなんかじゃないわ。これでわかったでしょ？」

晴海のアソコはさくらんぼのような色をしていて、周囲をふちどる恥毛は褐色だった。花弁は大きく、貝のようにピタリと合わさっている。男の視線を恥じらうように、小さなアヌスがキュッとすぼまった。

条二は直角に曲げられた晴海の内腿に手をあてがって、いきなり顔を谷間へうずめる。そして、尖らせた舌の先で肉厚の花びらを左右へかきわけて、包皮から顔をのぞかせているクリ×リスをチロチロと嬲（なぶ）りはじめる。

「あっ！　なにするのよ!?　やめて！」

晴海は声を荒らげて太腿のつけ根にある条二の頭を両手でつかんだ。だが、髪を引っぱるわけにもいかず、そのままで裸身を硬直させてしまう。条二はミルクコーヒーの色をした美女の内腿を撫であげ、膣口へ指を1本挿入する。晴海の蜜壺はかすかに濡れていた。

「あたし、そんなつもりで服を脱いだんじゃないのよ。やめてったら！」

晴海の悲鳴を聞くと、条二はクンニリングスを中断して彼女に言った。
「バカだな。こんなにスケベなものを生で見せつけられたりしたら、普通の男なら最後まで犯らずにはいられなくなるんだぞ。小宮はそんなことも知らないのか？」
「だけどあたし、そんなつもりじゃなかったのに……」
「オレの恋人になりたいんだろ？」
「そうよ。そうだけど……」
晴海はどっちつかずな返事をして、肘かけに片脚をあげたままの姿勢を取りつづける。
「だったら少しの間、おとなしくしろよ」
条二は晴海の細い足首をつかんで、またもや秘裂を舐めあげた。わざとピチャピチャと恥ずかしい音をたてて、秘唇をしゃぶりあげる。舌先がクリ×リスに触れるたびに、晴海の内腿の肉は小さくわななないた。
「くっ。いやぁん」
晴海は条二の頭を両手でつかみ、喉をのけぞらせてみだらな声をあげた。敏感な肉芽を刺激されるたびに悦楽の電流が身体の奥を貫く。プリンとした形のいいヒップは自然と左右に揺れだして、アソコが燃えるように熱くなってくる。その熱は下腹から全身へとひろがり、小麦色の肌からは汗が吹きだしてくる。

「くああっ。こ、こんなトコで、いや〜ん」
「小宮、おまえ、まだ処女なのか？」
「ちがうわ。ちがうけど……ああん。イヤイヤぁ」
晴海は切なげに息を弾ませて下半身をくねらせる。膣口を舌先でくじられ、クリ×リスを指腹でやさしく転がされると、お腹の奥が震えてきて腰が抜けそうになってくる。肘かけに乗せた右脚が男根を誘うように少しずつ外側へ開きだし、晴海の可愛いオマ×コは透明な蜜をジュクジュクと溢れさせはじめた。
「さ、佐久間くぅん」
せっぱ詰まった声を聞いて、条二は舌の動きを中断した。見ると晴海は目を潤ませて見降ろしている。
「そんなことされたら、あたし、もう我慢できなくなっちゃう」
「じゃあ、どうすりゃいいんだよ？」
「知ってるくせに」
晴海は床にひざまずいて条二のベルトのバックルをはずした。ズボンのチャックを降ろすとトランクスの股間はモッコリとふくらんでいる。ゴクッとつばを呑みこんで、条二の顔を熱っぽい瞳で見あげた。

「入れる前に舐めたほうがいい？」

と聞かれて、条二は渋い顔になった。社内の誰かにセックスを目撃されて信用を失いたくなければイタズラはもうやめたほうがいい。そうは思うのだが、股間の息子はもはや元気にそそり勃っている。

「小宮、おまえ、ここがどこだかわかってるのか？」

「会社のコンピュータ室」

まだカケラほど残っていた理性が、晴海の頰をいっそう赤く火照らせる。

「つーことは、いつ誰がここへ入ってくるかはお釈迦様でもわからないってわけだ」

「それもそうね。それじゃ、早くしなくっちゃ」

晴海はすっかりその気になっていて、慌てて条二のトランクスへ手をかけた。前開きのアウトボタンをはずしたが、ペニスは勃起している上にあまりにも長すぎて、外へ引きずりだせない。泣きそうな顔で唇を尖らせる。

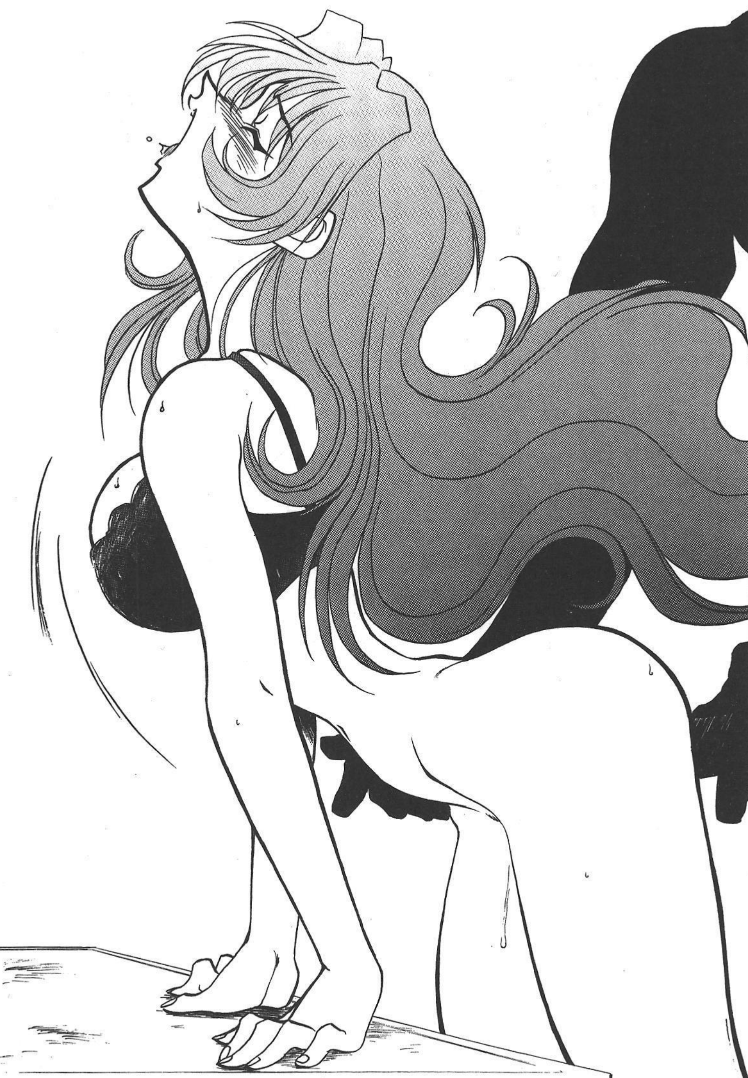
「やだぁ、佐久間くんのコレ、長すぎて引っぱりだせないわ」

「本当にここでセックスしたいんだな？」

「ええ。最後までして」

条二は立ちあがってトランクスを太腿の途中までずり降ろした。すると赤ん坊の腕と見

まちがえそうなほど太くて長いペニスがブルンと震えてそびえ勃つ。長さ20センチ、太さ4センチの巨根は裏スジを見せつけるようにヘソまで硬く反りかえった。
「すごい！」
晴海は条二の怒張を見ると、アングリと口を開けたまま絶句してしまった。息が弾んできて、ヘナヘナと座りこんでしまいそうになる。
「後ろを向いてケツを差しだせよ」
「えーっ⁉　バックからするの？」
条二は涼しい顔でうなずいてみせた。
「ああ。今すぐするか、それともあきらめるか、二者択一の問題だな」
晴海は茹であがったタコのように全身を真っ赤に染めて、「して」とだけ言った。条二に背中を向けて両脚を肩幅に開き、デスクに両手をついて身体を支える。
「気絶しても知らないからな。覚悟しろよ」
条二は低く通る声で宣言して晴海のお尻に挑んでいく。大きな黒糖まんじゅうを横にふたつ並べたような丸い尻たぶをつかみ、蜜で濡れそぼるスリットを亀頭でこすりあげる。
「くううん。じらしちゃイヤぁ。早く入れてぇ」
晴海は条二の巨根を秘唇で咥えこもうと、自分から肉の張ったおいしそうなヒップを突



きあげてみせる。
　条二は細くくびれたウエストを片手でつかんで太竿の位置を修正した。ヒクヒクしている秘孔に大きな亀頭をあてがって、ゆっくりと腰を進めていった。晴海の秘め貝は本人同様、柔軟な態度を見せて、巨大なペニスを少しずつ呑みこんでいく。
「あっ！　う……はぁっ。入ってくるぅ」
　晴海は息を荒く弾ませて、デスクについた両手に力を入れた。条二の人並み以上に大きな剛直は、肉厚の秘唇をこすりながら熱く潤う膣壁をえぐるように奥へ奥へと進んでいく。一番奥深い部分に亀頭が当たったのを感じて、晴海は思わず悲鳴をあげた。
「ひうっ！　それ以上入れないでぇ」
「なんだ、もう行き止まりか」
　条二は子宮の入り口を勃起の先端で確認すると、その位置でいったん腰をストップさせた。彼のペニスは長すぎて、あまり奥まで挿入すると、かえって女が痛がるからだ。
　3分の2ほど入れたところで、女の腰の平らな部分に片手を当てて、ゆっくりと抽送を開始する。それでも晴海は苦しげな声をあげて身悶えた。
「ひっ、おああっ。う、動かさないでぇぇ」
　天狗（テング）の鼻のように反りかえった極太棒がヴァギナを出入りするたびに、水っぽいニチッ

ニチュッという音がたつ。ブラジャーの中へ強引に手を入れると晴海の乳首はプクッと硬くしこっていた。条二はこんもりと盛りあがった乳房をしぼるように揉みあげる。

(こんなところを他の社員に見られたら、減給ぐらいではすまないかもしれない)

そうは思うのだが、条二も晴海もすっかり獣欲に駆られている。社内で、それも鍵のかかっていない部屋でのセックスは、ふたりにとってあまりにも危険で甘美で刺激的だった。

「ふ……ひぃいん。あっ、あ、や〜ん」

無人のコンピュータ室に晴海のよがり声が反響する。晴海はカクカクと震える両脚を一生懸命ふんばって、美尻を上下左右に振りたてる。

「あん、お……あああん。痺れちゃうぅ」

「小宮よぉ。おまえ、ずいぶんとケツを振るのが上手だな」

「そ、そんなことなっ……あああん。やっ。アソコがジンジン……は、くううっ」

晴海のヴァギナはねっとりした肉ヒダを太竿全体に絡めるように締めつけてくる。

条二は時々視線をあげてドアの覗き窓を確認した。今のところはまだ誰にもバレてはいないようだ。

「デカい声を出すなよ。外まで聞こえて他のやつらに気づかれるぞ」

「だ、だって。ああん。いやぁん。奥にっ、ひいぃん」

身体がバラバラになりそうなほどの激しい快感に翻弄されて、晴海はあえぎながら美麗なヒップを突きあげる。大声を出すとまずいことは言われなくてもわかっているのに、硬くて太いもので花奥を突きあげられるとどうしてもみだらな声が出てしまう。
「飛んじゃう。あっ。ひぃぃ〜ん」
とうとう晴海は切なげな声をあげて絶頂へ達した。太幹を包みこむヴァギナ全体がその反動で一気に収縮する。
「クソっっ」
思いがけない反撃を受けて、条二は剛棒を女陰へ突き立てたまま放出してしまいそうになった。下っ腹に力を入れてこらえなければ、中出しまちがいなしだ。
「小宮ぁ、おまえ、イクならイクで、はっきり言え……」
ところがその瞬間、条二の目の前でコンピュータ室のドアが外からバーンと開いた。
「佐久間条二はいるか!?」
白衣を着た男が条二の名前を叫びながら飛びこんでくる。同時にカメラのフラッシュが光って室内が明るく染まる。
「きゃーっ!」
「うわあーっ!」

ギクッとした弾みで沸騰した雄汁が尿道口からドプドプッと溢れだした。晴海のオマ×コへ挿入したままの巨根がゆっくりと萎えていく。

ふたりの目の前に防護服を着こんだ男がノソノソと入ってきて、背中にしょった放射能探知機の探査棒を床に向かって這わせはじめる。グローブのような手袋をはめた手で背後に向かってOKサインを出すと、新たな男たちがドッとなだれこんできた。

「なんだよ、おまえら⁉」

「いやーっ」

晴海は両手で顔をおおってデスクの下に隠れようとしたが、狭間には条二の剛直が刺さっていて、前かがみになることしかできない。

白衣姿の男は全部で8人いた。それぞれ録音スイッチの入ったテープレコーダー、あるいはカメラやビデオを構えている。男たちはまだ結合したままのふたりを取り囲んでいた。最初に飛びこんできた白衣姿の中年男が条二に右の人差し指を突きつけた。

「佐久間条二はおまえだな？　おとなしくしろ！」

一瞬、条二の脳裏に、ハローワークの求人コーナーに立っている自分の姿がくっきりと浮かびあがった。コンピュータ室でエッチをしている現場に踏みこまれたからには、退職にならなくても減給あるいは左遷になるか、ヘタをすれば晴海と職場結婚しないわけには

いかなくなるだろう。
瞬間的にそこまで考えたが、よく見ると、男たちは社内の人間ではないようだ。
「おまえら、誰だ？」
条二は泣きじゃくる晴海の秘部から男根を抜き取った。男たちを見まわしながら、愛液まみれの息子をトランクスの中へしまいこもうとする。ちらっと視線を走らせると、部屋の外に乱闘服に身を固めた機動隊がいるのが見えた。まるで条二を、人質を取って立てこもっている凶悪犯かなにかのように、部屋ごと包囲している。
「動くな！　抵抗すると容赦しないぞ」
条二の目の前に黒光りするピストルの銃口が向けられた。
「待てよ。おまえら、いったい何者なんだ？　なんでオレを……」
「黙れ！」
「ひぃいん。佐久間くぅ〜ん」
白衣の男は条二の足もとにうずくまっている晴海をちらりと見て、ピストルを突きつけたまま、背後の仲間に振りかえる。
「おい、コンドームをつけずに挿入して、ヴァギナへ直接射精したようだ。この女をすぐに運びだせ」

その合図を受けて、別の男たちが室内へなだれこんでくる。背広姿の男たちが床の上の晴海のまわりに群がった。
「おまえら何者なんだ⁉　いったいなんだってんだよ？」
奇妙な男たちの乱入で条二の頭脳回路の一部がプチッと切れたらしく、猿系の荒削りな顔が怒りで真っ赤に染まる。身長182センチと上背があり、たくましい体つきをしているので、ちょっと怒鳴っただけでもかなりの威圧感を男たちに与えた。
「お、おとなしくしろ」
「怪我はさせるな。絶対に無傷のままで連れ帰るんだ」
男たちは口々に叫んで条二を取り囲む。
「うるせぇ！　どこの誰だか知らねぇが、オレは風呂とウ×コとエッチの邪魔をされるのが、でーっきれーなんだ。とっとと出ていけ！」
条二は荒っぽい声で怒鳴りつけ、同時に手近にあったパソコンを男たちの足もとへ投げつけた。
「うおっ！　こいつ、抵抗する気だぞ」
「取り押さえろ！」
「秘技、ちゃぶ台返し！」


自主規制

条二は大声で叫んだと同時に、やにわにスチールデスクの端をつかんで一気にひっくり返した。デスクの上にあったワープロと電話機が派手な音をたてて床の上に散乱する。つづけて手近にあった回転イスや会社の備品を手当たりしだいに投げつける。
「それ以上暴れると、ただではすまないぞ」
「るせえ！　こうなりゃヤケだ」
条二が物を投げるたびにコンピュータ室の壁に穴が開き、床には筆記用具や壊れたディスプレイの破片が散乱して、見るも無残な有様になっていく。
「やだ、なにするの!?　佐久間くん、助けてぇ。いやあーっ！」
男のひとりが必死に抵抗する晴海の鳩尾（みぞおち）へ当て身を食らわせて気絶させた。ぐったりと倒れこむ彼女の身体を両脇から抱えあげてコンピュータ室から運びだそうとする。
「待てっ、小宮をどうするつもりだ」
条二が大声で叫んで男たちの背中に飛びかかろうとした刹那（せつな）、彼を狙っていた黒い銃口が轟音とともに火を噴いた。
「うっ！」
条二のワイシャツの胸に小さな穴が開いて、彼の体はゆっくりと床へ倒れていった。

第2章　研究室で監禁レイプ

晴海（はるみ）は、金属がこすれ合うようなカチャカチャという音で目を覚ました。

「気がついたかね？」

耳障（みみざわ）りな声とともに、白衣を着た40歳前後の男が顔を覗きこんでくる。

「ここは？」

「わたしの研究室だ」

「研究室？」

よく見ると室内の壁や天井は真っ白に塗られている。家具や調度品はなく、部屋の隅（すみ）に白いスチール戸棚と机が置かれていて、机の横には白衣姿の別の男が立っていた。男の年令は25歳前後だろうか。

「さて、被験者の意識が戻ったところで、検査を開始しようか」
　起きあがろうとしたが、いつの間にか病院で見かける診察台のようなものに寝かされていた。四肢をひろげてベルトで拘束されているため、上半身を起こすことすらできない。
「なぜこんなことをしたのよ？　あなたは誰なの？」
「質問をするのはわたしで、答えるのがきみの役目だ。さて、きみの名は小宮晴海、23歳。そうだね？」
「失礼ね。人に名前を聞く時は、まず自分から名乗るものよ」
「これは失礼。わたしの名は**山本三平太**（やまもとさんぺいた）。世界的に有名な古代人類研究学者だ」
　白衣の男はそう名乗り、晴海の身体にかけられていた白い布をゆっくり剝ぎ取った。するとその下から日に灼けた小麦色の裸身が現われる。
「やだ、なにするのよ？　ちょっと、佐久間くんはどこいったの？」
「彼なら別の部屋にいる。さて、それではまず最初に身体測定をするとしよう。中島（なかじま）くん、ビデオの準備はいいかね？」
「ええ、できてます」
　部屋の隅にいた若い男は小型のビデオカメラを肉厚の肩にかついだ。中島はかなりの巨体でグローブのような手をしている。そのため、カメラはまるでタバコの箱のように彼の

手の中へすっぽりとおさまっていた。
「待って、なにをする気なの？」
「被験者のデータ採取と実験を録画するのだ。わかるかね？」
晴海は真っ青になった。両手を拘束する幅広のベルトをはずそうとして腕に力をこめるが、びくともしない。
「そんなのイヤ！　なんだってこんなことをするのよ、このスケベオヤジ！」
全身で抵抗する晴海に、三平太は不敵な笑みを浮かべてみせる。
「暴れても無駄だ。わたしの探究心と古代人にかける情熱は誰にも負けない。この実験が終わるまで生きていたければ、おとなしくすることだ」
耳障りな声で説明して、これ見よがしによく切れそうなメスを目の前でちらつかせる。メスは天井から降りそそぐ光を浴びてキラリと光った。
「まず、身体のサイズだな。会社の資料によると、身長は１６１センチ。体重は48キロ。スリーサイズはどうかね？……晴海くん、言っておくが、わたしの質問には素直に答えたほうがきみのためになると思うよ」
ムスッとしつつも「95、58、90」と答える。ところが、男はその数値を聞くと眉を逆立てて反論した。

「嘘をつくのはやめたまえ！」
「嘘だと思うなら測ってみればいいでしょ」
「そうか、そうやって自分のいましめを解かせるつもりだな。だが、そうはいかないぞ。わたしにたてつくような女にはこうしてやる」
三平太は晴海の乳首を両方とも指先でつまみあげて、ゆっくり転がしはじめる。
「あっ……やめて」
小さな抵抗の声をあげて、顔をそむけた。けれども、敏感な突起を男の指でいじられるといやでも息が弾んでくる。さくらんぼ色の可愛い乳首はすぐに硬くしこってしまった。
「ちょっといじっただけなのに、乳首が勃ってきたぞ。なんだかんだと言ってはいても、身体だけは素直だな」
晴海は羞恥で頬を赤らめて言いかえす。
「やめてって言ってるでしょ！」
「まだそんな口をきくのか。それではこうしてやる」
男が白衣のポケットから取りだしたのは銀色の洗濯バサミだった。それで丸くふくらんだ乳首をひとつずつ挟みこむ。
「ああーっ！　痛いっ。やめてぇ、そんなことしないで！」

乳首を襲う鋭い痛みに、背中をのけぞらせて悲鳴をあげた。ギザギザになった刃先が柔肉にがっぷり食いこんでくる。
「これをはずして欲しかったら、正直にスリーサイズを言ってみろ」
「は、88、60、90ですぅ」
「ブラジャーのカップは？」
「Eよ」
「本当かな？」
三平太は乳首に食いこむ洗濯バサミを乱暴に引っぱりあげる。
「ひぃぃーっ！　び、Bです。Bカップなのぉ」
「最初から素直に答えればいいものを」
「はずしてぇ。乳首もげちゃううぅ」
晴海はあまりの激痛に涙をポロポロこぼしながら哀願した。けれども、三平太はまったく気にせず正確なデータを書類の空白に書きこんでいく。
「さて、次は秘部のチェックといこう。中島くん、きちんと撮影するんだぞ」
中島はうなずいてテープの残量を確認する。三平太は晴海の脚を片方つかんで、足首に絡みついているベルトをはずした。

「なにをするの？」
「さっき言ったことを忘れたのかね？　質問するのはわたしで、きみには答えることしか許されていないのだぞ」
晴海は褐色の瞳を涙で潤ませて横を向いた。
診察台の両側には金属の棒のようなものが突きでていた。三平太は晴海の太腿を片方ずつ曲げてその棒に固定してしまった。まるでおむつを取り替えている赤ん坊のような格好を取らされて、晴海の秘裂が男たちに丸見えになる。
「こんな格好いやあ！」
大声で叫び、背中を反らせる。
「お願い、もうやめてぇ」
「おお！　ずいぶんきれいなオマ×コをしているな。では、サイズを測るとするか」
三平太は、白衣のポケットから透明なプラスチックの定規を取りだした。泣きじゃくる女の太腿の間に頭を突っこむようにして定規を恥部へあてがい、目盛りにじっと目をこらす。
「恥毛は褐色でやや直毛ぎみだ。大陰唇は縦が12センチで、幅は2センチ。小陰唇は縦が7センチで幅が1・5センチか。色はきれいなピンク色で肉づきがよく、ビラビラしてい

るな。小陰唇がオマ×コから飛びだすくらい肥大しているところをみると、オナニーぐせがあるかもしれないぞ」
「そんなのウソよ！」
「中島、ここはアップで撮影しておいてくれ」
指示を受けた中島がカメラを晴海のオマ×コへと近づける。
「うっ、ううっ……」
晴海は小さくすすり泣いた。条二のことも心配だが、それ以上に自分の立場がすごく不安で、涙をすするとその弾みで乳房と下腹がけいれんするように震えた。
「うん？　秘孔がすぼまったぞ。どうかしたのかね？」
三平太は晴海の泣き顔を覗きこんで意地悪く問いかける。
「そうか、わかったぞ。会社でセックスをしてイキきっていないのだな？」
「ちがいます！」
「ううむ。どうしてきみはわたしの質問に素直に答えようとしないのだ」
「こんなひどいことをする人に、素直になれるわけがないでしょ！」
晴海はついヒステリックに言いかえしてしまった。
「そうか、それでは早く実験を終わらせることにしよう」

　三平太は白衣のポケットに片手を入れて、中から紫色のローターを取りだした。それを晴海によく見えるように高く掲げて、コードの先端についているスイッチを入れる。ローターはブーンと小さくうなりながら振動しはじめた。
「これがなにか知っているかね？……いや、この質問には下の口で答えてもらうことにしよう」
　三平太は晴海の返事を待たずにローターをピンク色の秘花へ近づけていく。肉厚の秘唇を指先でかきわけて、薄皮に包まれたクリ×リス、小さな尿道口、そして膣口を剝きだしにする。オマ×コが完全に露出すると、ゴクッとつばを呑みこんだ。
「ああ、やめて。そんなことしないで」
　小さなオトナのオモチャが晴海の恥ずかしい場所へ軽く押しつけられた。
「くあっ！　あ、ダメ、そんな……」
　晴海は小麦色の裸身をブルッと震わせてあえいだ。三平太は指先に挟んだローターの先で包皮を剝くようにしてクリ×リスを露出させる。みだらな器具はひときわ敏感な肉芽を震わせ、晴海の体奥へ心地よい波を送りこんでいく。
「く、くううっ……ああん。ダメぇ」
「わたしは下の口で答えろと言ったのだぞ。上の口は静かにしていたまえ」

三平太はそう言ってポケットからピンポン玉を取りだした。ピンポン玉にはいくつもの穴が開いていて、長いゴムの輪が真ん中を貫通している。晴海の頭を持ちあげてゴム輪をかけて、ピンポン玉を朱唇へ押しこんだ。

「どうだ、これで声など出せまい」

ゴム輪つきのピンポン玉でさるぐつわをかまされてしまった形の晴海は、うめき声は出せても、はっきりした言葉は発することができない。

「うう……」

三平太はまたもや肉真珠へローターを押しつける。内腿がブルルッとわななき、荒く弾む息のせいで腹部と乳房が激しく上下に揺れた。

「ここに触れると気持ちいいだろう？　そら、これはどうだ」

ピンク色の秘孔をえぐるようにローターを押しつけ、かすかに湿っている秘肉にこすりつける。

晴海の裸身はじっとりと汗をかきはじめた。三平太が執拗に秘め貝をいじっていると、陰口からトロリと透明な蜜が溢れてきた。

「うん？　どうやら発情してきたようだな。奥のほうからスケベな汁が出てきたぞ」

晴海はイヤイヤと頭を左右に振ってみせた。しかし、女の本能は晴海の理性を裏切って

みだらな責めに反応してしまう。
「それでは、もうひとつ別の穴にこいつを入れてみるとしよう。まずはたっぷり濡らしてやらないとな」
三平太は膣口から溢れている淫蜜を指ですくって、スイッチをＯＦＦにしたローターの先端へまんべんなくこすりつけた。紫色のシリコンがベトベトになると今度は晴海の菊門へ指を這わせる。
「んぐっ！」
晴海は恥ずかしい場所を覗きこまれ、そのうえ指で愛撫されて背筋をゾクッと震わせた。今まで誰も触れたことのない肉のすぼまりの表面を男の指の感触が動いていく。三平太の指技はたくみで、微妙すぎてもどかしくなるような快感が下腹へとひろがっていく。
「むぅっ。んっ。ふぅぅっ」
「どうやらこっちのほうもイケるようだな。そら、食わせてやるぞ」
三平太はニヤリと笑って晴海のアヌスを指でくつろげ、ローターを埋めこんでいく。
「うぅーっ！」
晴海は、四肢を拘束された不自由な身体で必死に身悶える。だが、愛液まみれのローターはあっけないほど簡単に菊門へ挿入されてしまった。

三平太は1歩後ろへさがって美しい女の割れ目をしげしげと覗きこんだ。
「ほほう。こうして見ると、まるで尻から細いシッポが生えているように見えるな。中島くん、そうは思わないかね？」
「そうですね。ローターのコードがケツの穴から飛びだしてるのが、シッポみたいだ」
中島は晴海の菊門をレンズの目でたっぷりと視姦する。大きくひろげられた太腿の間にカメラを寄せられて、晴海はイヤイヤと頭を左右に振った。
「うん？　入れるだけではダメ、と言っているのかね？　それではこうしてやろう」
三平太は勝手な解釈をしてローターのスイッチをONにする。その刹那、晴海の小麦色の裸身がまるで感電したかのようにビクビクッと跳ねた。
「むぐぅーっ！」
晴海はピンポン玉でふさがれた口の中で悲鳴をあげて、背中をのけぞらせた。ローターの振動は晴海の直腸を直撃し、まるでオトナのオモチャでヴァギナを犯されているのと同じような快感が身体中にひろがっていく。充血して敏感になっている膣口や肉芽がヒクヒク動いて、みだらな痴態を男たちに見せつけてしまう。
「うぐうっ、うーっ」
晴海は菊門を犯す異物を押しだそうと下腹へ力を入れかけたが、ローターと一緒に大便



が出てしまいそうでお尻の穴を必死にすぼめた。すると今度は膣がキューッと収縮して、誘い水が秘孔からトロリと溢れだす。
「やれやれ、オマ×コ全体がスケベなよだれでぐしょぐしょになってきたぞ。ずいぶんとローターがお気に入りのようだな。普通は、この責め具が気に入らなければ排泄してしまうものだが、こいつの場合は奥まですっぽり呑みこんだままで、吐きだそうとすらしないじゃないか。この件に関して中島くんはどう思うかね？」
「そうですね。膣口もパクパク口を開けたり閉じたりしてペニスをおねだりしているし、かなりの好き者のようだ」
晴海は自分の人格を無視しきったふたりの会話を聞いて、褐色の瞳に屈辱の涙を浮かべた。アヌスをローターで犯されることより、その責めに反応してみだらな姿をさらしてしまうことが死にたくなるほど恥ずかしい。それなのに菊門に挿入された小道具がもたらす小刻みな振動は薄い肉の膜を通してヴァギナやクリ×リスへも影響を及ぼし、ただでさえ燃えあがっている欲望の炎をいっそうかきたてていく。
「ううっ、うーっ」
あまりにも深く濃い快楽によがり声をもらすと、ピンポン玉を咥（くわ）えこんだ朱唇の端からよだれが溢れて顎へと伝い落ちる。

「ほんの少し責めただけだというのに、上の口も下の口もぐしょ濡れになってしまったな。中島くん、テープを入れ替えてくれんかね？」
「博士、テープならまだ残量が1時間以上ありますが」
「いや、いいんだ。これから予定外の実験をすることに決めたから、予備のテープに取り替えてくれたまえ」
「わかりました」
中島がテープを入れ替えている間に、三平太は診察台の下へ手を入れて金具をいくつかはずした。すると、診察台は晴海のちょうどヒップから向う側の部分がそっくり下へ折れ曲がる形になる。
「博士、準備ができました」
「よし。それでは、これから実験『ＳＳ』に移る。中島くん、きみにもあとで手伝ってもらうから、そのつもりでいてくれたまえ」
「博士、その『ＳＳ』というのはなんの略ですか？」
「シークレット・スペシャルの略だ」
三平太が薄く笑って白衣の前をはだけると、くたびれたズボンの股間がテント状に盛りあがっている。若くてピチピチした晴海の身体を嬲(なぶ)るうちに、研究心よりも獣欲のほうが

勝ってしまったようだ。急いでズボンをずりさげて半勃ちになったペニスを取りだす。
「さて、実験『ＳＳ』を行なうとしよう」
三平太の男根は灰色がかった肌色をしていた。長さは10センチちょっとだが、太さは5センチ近くあり、極太短筒といった感じだった。亀頭部分のくびれがほとんどないので、2つ割りにしたコッペパンの間に挟むと本物のホットドックと見まちがえてしまいそうだ。
晴海はソーセージのようなペニスを見ると、ビクッと裸身を震わせた。見ず知らずの男に犯されたいとは思わない。それなのに、ローターで菊門を嬲られているおかげで、身体中が熱く疼いて男のシンボルを欲しがっている。
もうろうとかすむ頭の中にみだらな想像が浮かぶ。自然とアソコに力が入って、蜜壺の入り口から誘い水がトロリトロリと溢れだす。
「オレのチ×ポを見ただけでヨダレをたらすとは、なんてスケベな女なんだ。それも、次からつぎへと溢れて、これじゃあ、たれ流しもいいところだ。上の口も下の口も透明なスケベ汁ですっかりジュルジュルにしやがって。まったくはしたないにもほどがあるぞ」
三平太は太筒の先で晴海の形のいいふくらはぎをピタピタと叩いた。女の甘い体臭を嗅いだだけで、ペニスは発射してしまいそうになる。
「こいつが欲しいか、えっ？　どうだ、答えてみろ」

晴海はピンポン玉を咥えたまま頭を縦に振ってみせた。このまま放置されてしまったら、欲求不満で頭がおかしくなってしまいそうだ。
「よし、それでは、そいつをはずしてやろう」
三平太がピンポン玉をはずすと、晴海は美唇を大きく開いて深呼吸をした。
「お願い、あの、あの……」
晴海は小さな声でささやきかける。
「なんだ、どうかしたのかね？」
三平太は太竿の表面を指でそっとこすりたてながらも、獣欲とは無縁なふうを装い涼しい顔で質問する。
「お願いですから、イカせてください」
「どうしてもイキたいのなら、片手だけ自由にしてやるからオナニーをするといい。自分で最後まで昇りつめるんだな」
三平太は晴海にオナニーをさせるため、手首のベルトを1本だけはずしてやった。
右手が動かせるようになっても、晴海には命令通りにはできなかった。菊門に挿入されたローターのおかげで身体中が熱く燃えていたが、人前、それもビデオカメラの前でオナニーをするのは絶対にいやだ。

「オナニーなんて、したことないんです」
「ほほう。きみはまた嘘をつくのかね。本当のことを言えば、オナニーでは物足りないから、わたしのペニスをきみのオマ×コへ入れて欲しいのだろう。それも、レイプされるように犯されないと気持ちがよくならないのではないかな？」
晴海は頰を染めて唇を嚙み締めた。三平太の言うことは半分以上当たっている。オナニーをするのもペニスをおねだりするのも、とても恥ずかしい。自分から女の欲望をさらけだすくらいなら、いっそ強姦されてしまったほうがマシだ。なんとか自分の気持ちをわかってもらおうと、三平太とは視線を合わせないようにして哀願する。
「お願い、あなたが手に持っているものを、あたしの大事なところへ入れてください」
三平太は片手でつかんだ逸物を、まるでようやく手に入れた小さな珍獣のようにしげしげと見つめている。小首をかしげて晴海に問いかえした。
「ん？　モノを入れるだと？　日本語には含蓄（がんちく）のある言葉が多いからな。具体的な言葉で詳しく説明してくれないと意味がよく通じないぞ」
晴海は泣き顔を真っ赤に染めて美唇を開いた。
「あなたがいま握っているペニスを、あたしのお……オマ×コの穴へ入れてください」
あられもない言葉を放つ羞恥が、晴海の首筋から乳房にかけてを美麗なピンク色に染め

あげる。
「なんだと⁉　きみは本当に、わたしのペニスをオマ×コの穴へ入れて欲しいと言うのかね？」
「そうよ。お願いだから、今すぐ入れて」
「そんなにスケベなオマ×コへチ×ポを入れて欲しいか？」
「欲しいの。あたしのスケベなオマ×コに、チ×ポをたっぷりぶちこんで欲しいの！」
三平太はねちっこい性格を丸出しにして晴海を執拗に嬲りあげる。片手をのばして淫蜜をたたえた秘孔を人差し指でぐいっとえぐった。
「あひいっ！　そ、そうなの。そこに入れて欲しいのよ」
「きみのお尻の穴にはもう別のものが入ってしまっているが、これはどうするのかね？」
晴海はとまどいの表情を見せたが、すぐに答えをかえした。
「ローターはお尻の穴に入れたままで、オマ×コにペニスを入れて欲しいの。そのほうがきっともっと気持ちがよくなるわ。だからお願い、なんでもするから早くして」
「そうか、きみはわたしの言うことならなんでもすると言うのだね？」
「します。ですから早く。ああ、お願い、イカせてぇ」
三平太はとうとう晴海の手足を拘束するベルトをすべてはずした。晴海は、子供のよう

に両手をのばして三平太にすがりつこうとする。
「それではダメだ。床へ降りて診察台に手をつけ。尻をこちらに向けて自分の指でオマ×コをひろげてみせろ」
晴海はあまりにも屈辱的な命令を受けて思わず涙ぐむ。でも、言う通りにしないとイカせてもらえないと悟り、快感で痺れきっている身体をノロノロ動かした。下半身を診察台の上からずり降ろすようにして床に立ち、両腕を台の端につく。
「どうぞ入れて。あなたのペニスを入れてください」
すすり泣きをもらしながら、股の間に片手を入れて充血した陰唇を指先で大きくくつろげた。みだらな花はすっかり奥まで丸見えになり、透明な蜜をたらしながら受精の瞬間を待ちわびている。
カメラをかついだ中島はゴクリと喉を鳴らし、ヒワイなポーズを取る美しい女の狭間へピントを合わせた。白衣の股間は男の欲棒で大きく盛りあがっている。三平太も一緒になって晴海の濡れそぼったおいしそうなスリットをじっと視姦する。
「なんだか、熟れすぎた桃のようだな」
「そんなこと言ってないで早く入れて！」
晴海はプライドもなにもかなぐり捨てて、秘唇を開いた恥ずかしい姿で男を挑発するよ

うにお尻をくねらせる。
さすがの三平太もその逆襲にはかなわなかった。股間の息子はみるみるうちにそそり勃ち、45度の角度を保って脈打ちはじめる。
「よし、それでは入れてやるとしよう」
三平太はくびれのまったくないペニスの先端を晴海の秘孔へ押し当てた。しとどに溢れている淫蜜を亀頭へたっぷり塗りつけて、ヒクヒクとわななくオマ×コの穴へぐっと挿入する。
「ああっ、とうとう……ああ」
晴海は満足げなため息をついて、形のいいヒップを突きあげた。条二の男根ほどサイズは大きくないが、それでもペニスには変わりがない。三平太の怒張は熱く火照っている肉ヒダをこするように花奥へと押し入ってくる。
「もっとよ！　根元まで入れて、出したり入れたりして」
三平太は自分の娘と同じくらい若い女の膣へ剛直をねじこんでいく。つけ根まで挿入された直径約5センチの太竿は、晴海のヴァギナをいっぱいに満たした。すると、鮮やかなピンク色の秘花は雄の精をしぼり取ろうとするかのように花奥を収縮させる。
「すごくきついな。ただ差しこんだだけなのに、ぐいぐい締めつけてくるぞ」

三平太は桃のような美尻をわしづかみして抽送を開始した。バックスタイルの時にいつもするように、抜きは速く、突きはゆっくりのリズムで腰を使う。
カメラを構えた中島はふたりの結合部をアップで撮影しながら、片手で白衣の前をはだけて剛棒を取りだした。三平太には気づかれぬよう注意しながらオナニーをはじめる。
「おっ、おおっ、ああ！」
「どうかね、わたしのペニスをぶちこまれた感想は？」
うわずった声で聞かれても、晴海には答える余裕などもうなかった。直腸にローターを挿入されたままでヴァギナを犯されると、身体の奥でふたつの異物がこすれ合い、快感が二倍になって身体中がジーンと痺れてくる。
三平太はきつく締めつけてくる女陰へ怒張をピストンしながら、太幹から伝わってくる快感を味わいつづけた。晴海の中はとても熱く、大量の蜜でぐしょぐしょになっている。太ペニスを根元まで突っこむ時、膣壁を拡張するようにこねまわすと、女の身体はけいれんを起こしたように震えて、また淫蜜を放出する。
「ずいぶんと濡れやすい女だな」
晴海のアヌスが呑みこんだローターの振動は、薄い膜を通して三平太の勃起にまで刺激を与えた。ともすれば、すぐにイッてしまいそうになるのをなんとかこらえて甘美な凌辱



をつづける。
「イクうっ。あっ、そこぉ！　もっと突いてぇ、めちゃくちゃにしてぇ！」
晴海はあられもない声を放ち、男の律動に合わせてヒップをくねらせた。三平太の怒張が条二の極太棒のように奥のほうまで刺さってこないのがもどかしく、無意識に男根を深く咥えこもうと美尻を激しく突きあげる。重たくたれさがった乳房は乳首がビンビンに尖り、水をいっぱいに入れた風船のようにタプタプと揺れた。もはや晴海の理性とプライドは美獣と化した彼女を捨てて、どこかへ遠くへいってしまったようだ。
「いいっ。ああーっ！」
ひときわ大きな声をあげて、晴海は絶頂に達した。興奮のあまり汗ばむ全身から力が抜けて、診察台の上へぐったりともたれこんでいく。
「うっ。すごい締めつけだ」
三平太はヴァギナから太竿を抜き取り、小麦色のヒップに向かってスペルマを放出した。白濁液はビュクビュクッと勢いよく溢れでて、桃尻と内腿をべっとりと濡らした。射精が終わると息を弾ませながら背後に立つ中島に声をかける。
「中島、今度はおまえの番だ」
「えっ、いいんですか？」

「もちろんだ。たっぷり犯ってもいいぞ」
中島は口の中にたまっていたつばをゴクッと飲んで、カメラを三平太へ手渡した。ふたりのセックスを撮影しながらオナニーしていたおかげで、股間の勃起はかなり充実している。中島のペニスは長さが15センチほどで浅黒く、カリ深だった。
「それじゃ、犯らせてもらいます」
そう宣言すると、疲れ果ててもうろうとしている晴海のウエストをつかみ、その身体を診察台の上へあおむけに横たえた。女の細腰を自分のほうへ引き寄せ、太腿を片方折り曲げて脇に抱えこんだ。秘孔からしとどに溢れている蜜を指ですくって、赤く剝けあがった肉芽へこすりつける。そのとたん、絶頂に達して感じやすくなっている晴海の内腿がブルルッと震えた。
「ひいっ。や、やめて。おかしくなっちゃう」
晴海は悲鳴をあげて太腿を押さえこむ男の腕をはねのけようとする。けれど、抵抗するより早く、大きなキノコの傘のような亀頭がぐちゅっと秘孔へめりこんだ。
「あうっ！　やめてぇ」
カメラの拘束から自由になった中島は、たまりにたまっていた性欲を満たそうと美しい女の花奥へ怒張をねじこんでいく。ボイルしたソーセージのように軽く反りかえった太竿

は誘い水で潤みきった秘花の中に完全に呑みこまれた。
「どうだね、中島くん。彼女の中は最高だろう？」
「はい。ヴァギナの内側全体がでこぼこしていて、いくつものヒダでペニスを包んで締めあげてきます。なんだか濡れたタオルで全体をおおわれて、やさしくしぼられてるみたいな感じが……」
晴海は冷静な会話をつづけるふたりに声をかけた。
「お願い、もうやめて」
「中島くん、話をするのはやめて欲しいそうだ。この意味がわかるかね？」
「もちろんです」
中島は三平太にうなずきかえし、晴海の乳房をわしづかみにして揉みたてながら、いい具合に濡れそぼった熱いオマ×コへ突き立てたペニスを抽送しはじめる。
「ひいいっ。だ、ダメぇ。こ、壊れるぅ」
晴海は悲鳴をあげて身体をのけぞらせた。
「きみみたいに美しい人は、壊れるまで犯してみたいよ」
そうささやくと、中島は硬く充実した欲棒のピストン運動を速めていく。充血してパックリとひろがった秘唇の中央へ太幹を力強く抜き差しする。

「すごいな。この被験者は僕が今まで経験した中で一番いい反応をしますよ。乳首は充血してこんなに尖っているし、クリ×リスも剝けあがってピクピクけいれんしている。なによりオマ×コの締めつけが最高だ」
晴海は男の冷静な解説を耳にすると、眉根を寄せてイヤイヤとかぶりを振った。
「おおっ、い、いやあっ」
花奥を突きあげられるたびに晴海の裸身はわななき、半開きになった紅唇から切なげな声がもれる。助けを求めるように涙で濡れた瞳をさまよわせるが、頭の中が真っ白になっていてなにも見えない。
「ダメぇ……。ああ、壊れるぅーっ！」
喉を振り絞るようにして叫んだと同時に、晴海は二度目の絶頂に達して汗にまみれた女体を激しく震わせた。その言葉通り意識がすうっと遠のいて全身から力が抜けていく。
中島は気絶した晴海を両手で支えてなおも凌辱をつづけた。意識がなくなっても女の蜜壺はうねるような収縮を繰りかえして男根を締めつけてくる。
「本当にすごい。すごすぎて、もうこらえきれそうもない。射精してしまいそうです」
乾いた声で宣言すると、名残惜しげな表情で怒張を秘孔から抜き取った。中島のペニスは硬く勃起したままでどぴゅどぴゅっとスペルマを射出した。肩で息をしながら両手で支



えていた女の美身を診察台へ横たえて、残り汁をすっかり出しきる。
三平太はビデオカメラの停止ボタンを押して、満足げにうめいた。
晴海は診察台の上にぐったりと四肢を投げだしている。さくらんぼ色の乳首は硬く尖り、だらしなく開かれた太腿の間にある秘部は赤く充血して熟れすぎた桃のように見える。
あまりにも淫靡で男の獣欲をそそらずにはおかない痴態を見せつけられて、ふたりの男たちはまたもや股間が熱くなってくるのを感じた。
「あの**ヌクヌル原人**が目をつけるだけあって、この被験者は人間の女性の中でも、最高の女性器の持ち主だな」
「そうですね。一度性交すれば二度と忘れられなくなるような女性だ」
晴海は夢うつつの意識の中で、三平太が発した『ヌクヌル原人』という言葉をぼんやりと聞いていた。

第3章　オレはヌクヌル原人!?

ひどく冷たいものが額に落ちてきて、条二はハッと双眼を開いた。
気がつくと自室のベッドの上へあおむけに寝ている。冷たいと感じたのはおでこに乗せられた濡れタオルのせいだった。
不思議に思ってタオルを片手でつかんだとたん、お月さまのように真ん丸な顔をした若い女の子が、大きな栗色の瞳に涙をいっぱい浮かべて条二の腕にしがみついてきた。
「佐久間さん！　ごめんなさい、ごめんなさい。本当にごめんなさい」
「あんた、誰だ？」
条二は問いかけながらムクリと上体を起こす。
女の子は17、18歳くらいで、真ん丸な童顔と丸っこくて黒目がちな栗色の瞳、そして柔

らかそうなショートカットの髪をしていた。身体にぴったりしたツーピースを着ていて、右手の指先で頬を伝う涙を拭いながら小さな唇を開く。
「わたし、山本麻衣子っていいます」
「ふーん。……ひょっとして、オレがきみをナンパしたの？」
質問したとたんに、麻衣子の頬がチェリーレッドに染まる。
「そ、そ、そんなことありません！　わたし、佐久間さんの会社へ派遣社員ってことで今日からお勤めすることになってたんですけど、非常階段のトコの扉を開けたらその向こうに佐久間さんがいて、佐久間さん、扉に激突して鼻血出して気絶しちゃって……」
舌足らずの麻衣子は一気にそこまで説明し、いったん言葉をとぎらせた。息をするのを忘れていたらしく、大きく胸をふくらませて深呼吸する。
「オレが気絶したって？」
「そうです。だからわたし、佐久間さんにつきそってご自宅まできたんです」
条二はベッドの上に座り直して考えこむ。朝礼のあとコンピュータ室で晴海とエッチをしていたところまでは記憶にあるが、その先になにが起きたのかは、どうしても思いだせない。不思議そうに首をひねって麻衣子に問いかけた。
「オレ、会社で意識が戻らなかったのか？」



「ええ。水で濡らしたタオルで顔を拭いたり、部長が机に隠してたブランデーを気つけ薬のかわりに飲ませてみたりしたんですけど、全然意識戻んなくて……。ごめんなさい。わたしが不注意だったから」

「いや、いいよ、そんなに謝るなよ」

「わたしが悪かったんですから、謝って当然です。佐久間さん、わたし、おわびになんでもしますから」

麻衣子はベッドの脇から離れて立ちあがり、モジモジしながら両手でツーピースの裾を握りしめる。条二から視線をそらしてミニ丈のスカートをウエストのところまでスッと持ちあげた。一瞬だけだったが、艶めかしい太腿とスキャンティが見えた。

条二は思わず反射的に「ガーター！」と叫んでいた。

まるで女子中学生みたいな純情な顔をしているくせに、麻衣子はきれいな濃いピンク色のガーターベルトと同色のスキャンティをつけていた。刺激的な格好が条二の剛棒をムクッと起きあがらせる。

「こんなことしかできませんけど、これくらいじゃダメですか？」

麻衣子は自分の手でスカートの中を見せたのがすごく恥ずかしかったらしく、ふっくらした頬をいっそう赤く染めて条二から目をそらす。

「ダメか、って言われても……。なんでそんなことをするんだよ？」
「よくわからないんですけど、男性はこういうことをするとたいてい喜んでくださる、と友達が言っていたから……」
「ずいぶん変わった友達を持ってるんだね。……ねえ、麻衣子ちゃん。きみの友達は、誰にでも下着を見せちゃいけないとは言ってなかった？」
「そうねぇ、そんなこと言ってたかしら？」
条二は小首をかしげて考えこむ麻衣子の手を素早くつかみ、ベッドの上に押し倒す。
「きゃっ！　な、なにをするんですか？」
「残念だけど、下着を見せてくれたくらいじゃ、おわびにはならないよ。もっとそれ以上のことをしてくれなきゃ」
条二は抵抗する麻衣子の両脚の上へ馬乗りになり、ツーピースの裾をめくって太腿のつけ根に片手の先を押しこんでいく。
「やですっ！　そんなことしないでください」
「なに言ってるんだよ。おわびになんでもするって言ったじゃないか」
「言いましたけど、でも……」
条二は逃れようとして身悶える麻衣子を見て、ふとその手をとめた。

「なんですか？」
「麻衣子ちゃんって、みんなからよく『可愛いね』って言われるだろ」
「ええ。まぁ、時々ですけど」
「ふーん。でもさ、オレは『可愛いね』なんて絶対に言わないからな。なぜなら、麻衣子ちゃん、きみはエッチだ。それも、すんごいエッチだとオレは思う」
麻衣子はまるで初対面の相手にスリーサイズをズバリ言い当てられたかのようにびっくりしてしまった。
「えーっ!? そんなのウソです。わたし、ぜんぜんエッチなんかじゃないです」
「ウソウソ。見ず知らずの男に自分から進んで下着を見せたりするような女の子は絶対にエッチなの。それにさ、ここんトコに縮れた毛が生えてる女の子はまちがいなくドスケベだっていう法則があるんだぜ」
条二はニヤニヤしながら麻衣子のスキャンティの股ぐりへ指を潜りこませた。恥毛をつまんで引っぱろうとして「ん？」と不思議そうな表情になる。
「おひょひょ？ ひょっとして、麻衣子ちゃんって生えてないの？」
麻衣子は真っ赤になって小さくうなずく。

「そうかぁ。そいつは想像もしなかったな」
「25歳にもなって大切なところに毛が生えていないなんて、おかしいですよね。わたし、恥ずかしい」
「えっ。麻衣子ちゃんって25歳なの？　オレと同い年かよ？　信じらんねぇな。まだ高生だって言っても通用しそうなくらい可愛いのに」
「あっ。佐久間さん、絶対可愛いって言わない、って言ったのにぃ」
「おっと、ごめんごめん。それじゃ、ウソをついたおわびってことで……フッフッフ、気絶するほど気持ちよくしてやるからな」
条二は真顔になってスキャンティへ潜りこませた指をさらに奥へと進めていく。恥毛のないツルツルした谷間をたどっていくと、小さな割れ目の左右に2枚の花びらがある。そのつけ根に隠れているクリ×リスを人差し指の先でコチョコチョッとくすぐった。
麻衣子はすぐに鋭く反応して身体をプルッと震わせる。
「ひゃンっ。ダメです、そんなことしちゃいけません」
「おわびになんでもするって言ったのに、麻衣子ちゃんのウソつきぃ」
条二は麻衣子の口調をまねて文句を言いながらツーピースの胸もとに片手を突っこみ、ブラジャーの上から可愛らしい乳房を揉みしだく。だが、すぐにじれったくなり、両手で

洋服と下着を乱暴にはだけて白くこんもりした肉球を剝きだしにする。
「ふあっ、あぁン。わたし、もう帰る。帰ります」
「帰るのはいい気持ちになってからにしろよ」
条二は可愛い乳首を指先で丸く転がしながら、小さなおちょぼ口にキスをした。舌に舌を絡めて熱い液を吸いあげると、麻衣子の身体は力が抜けてぐったりとなる。
「いい子だから触ってごらん」
幼子に言い聞かせるようにつぶやくと、麻衣子の手をつかんで自分の股間へと導いていく。条二のペニスはズボンの股間をぶち破りそうなほど硬く太く勃起していた。
「すごい」
「ああ、こいつに触ったやつは、みんなそう言うよ」
条二はすべすべした麻衣子の頰を尖らせた舌の先で舐めあげつつ、湿った秘唇の奥を指腹でなぞる。指のつけ根を押しつけるようにしてクリ×リスを転がし、指先を秘孔へそっと潜りこませる。人差し指の第1関節を曲げて膣口の縁をえぐるたびに、麻衣子の内腿の柔肉はヒクヒク震えた。
「ふあッ。もしかしてもしかしたら、佐久間さんのコレをわたしのソコへ入れるの？」
「ひょっとしてひょっとしなくても、オレは麻衣子ちゃんがズボンの上から握ってるチ×

ポをきみのオマ×コの穴に入れるつもりなのさ」
「あぁン。やっぱり」
麻衣子は息を震わせて身体の上へ馬乗りになっている条二の顔をじっと見つめた。羞恥のあまり栗色の瞳が涙でウルウル潤んでくる。
「こうなることは、最初からわかってたんだろ？　でなきゃ、わざわざオレの家へきて、ベッドの側でつきっきりで看病してくれるわけがないよな」
「だって、あれはわたしが悪かったから……」
「そうそう。麻衣子ちゃんはすごく悪くていけない子なんだ。だって、オレのチ×ポをこんなにしちゃったんだから」
条二は愛撫の手をとめて、ズボンをずり降ろした。するとトランクスの中から半勃ちになった極太ペニスがぬうっと出現する。そのサイズは長さ20センチ、直径約4センチ。頬の皮膚より浅黒く、肉茎のあちこちに血管が浮きあがっている。
「す、すごい……」
麻衣子は目の前に現われた巨根を見たとたん、あまりの雄々しさに絶句してしまった。
条二の怒張は麻衣子の視線を一身に浴びて、ドクッドクッと脈打ちながら力強くそそり勃っている。

思わずうなずいてしまい、麻衣子は恥ずかしそうな表情になる。

「それじゃあ、たっぷり入れてやるぜ」

条二は麻衣子の上からいったんどいて、彼女の狭間をおおっている濃いピンク色のスキャンティを強引に剝ぎ取った。つづけて同色のガーターベルトでとめた肌色のストッキングに包まれているおいしそうな太腿をM字に割りひろげる。

「あぁ〜ン。見ないでぇ」

みだらな秘所地を隠そうとする麻衣子の両手を条二がつかんで身体の脇へねじあげる。

「そういえば、さっきから喉が渇いてしょうがないんだ。なにか飲ませてくれよ」

「あらぁ、なにがいいのかしら？」

「きみのジュースがいいな」

条二は低い声で言って、麻衣子の秘部へ唇を近づけていく。

「ダメぇン。そんなことしちゃダメよ」

条二は弱々しく抵抗する麻衣子の陰唇を指先でかきわけて、剝きだしになった膣口から尿道口、そして肉芽へ向けて下から上へと舌でねろっと舐めあげる。

「ひぅン。やめて、そんなトコ、舐めちゃダメですぅ」

「よしよし。中からスケベなジュースが溢れてきたぞ。麻衣子ちゃんの愛液は、けっこうイケる味だな。う～ん。股間のチ×ポクンがみるみるうちに元気になってきちゃうぅ」
条二はからかうように麻衣子の舌足らずな口調をまねてみせる。キュッとすぼまる秘孔へ唇を押しつけて、ヴァギナから溢れてくる透明な蜜をジュルジュルすすりあげる。
「あはぁン。す、すごい音ぉ」
「ちょっと触っただけでこんなに濡れちゃうってことは、アソコに毛が生えてなくても、麻衣子ちゃんは充分スケベだっつーことだな」
「そんなことないですぅ」
「あるある」
条二が包皮を剝いて指先で小さな肉真珠を軽く転がしつづけると、麻衣子は徐々に身体から力を抜いて無意識のうちに太腿を少しずつ開いていく。膣口いっぱいに湧いてきた淫蜜はとうとう溢れだして蟻の門渡りからアヌスへと伝い落ちてシーツを濡らす。
「準備はいいかな？」
条二は両目を潤ませてトロンとしている麻衣子に向かって、完全にそそり勃ったたくましい剛直を突きだしてみせた。大きな亀頭の先割れからガマン汁がぴゅくっと吹きだす。
「残念ですけど、そんなにすごいの、わたしの中には全部入らないと思うの」

「どこまで入るかやってみようぜ」
「そんなの……。あぁン、恥ずかしい」
麻衣子は息を弾ませ、すぐ側にあった羽根枕をつかんで自分の顔を隠してしまった。
「ずいぶん恥ずかしがり屋なんだな」
条二は微笑（ほほえ）みを浮かべて怒張に片手を添えた。充分に濡れそぼっている膣口へ太竿の先端をこすりつけると、半裸に剝かれた女体にピクピクッと震えが走る。白くてポチャポチャした太腿をつかんだ瞬間、麻衣子は枕をどけて条二を見た。
「お願い、痛くしないでね」
「ああ。痛かったら悲鳴をあげてくれ」
もうひとこと注文をつけようとする麻衣子の口を封じるように、条二は巨大なペニスを熱い蜜でいっぱいになっている割れ目の中へ少しずつ挿入していく。女の秘孔は複雑な赤い肉ヒダをゆっくりと開いて逸物を呑みこみはじめた。
「くはぁン。お腹の奥が、いっぱいになってきちゃうぅ」
「腹いっぱい食っていいぞ」
麻衣子は両目を閉じ、ヒップを浮かせて剛直を受け入れていった。小さな朱唇を震わせて、すするように息をしている。

条二は、はち切れそうなほど硬くふくらんだ極太棒を秘孔に半分ほど挿入して、いったん呼吸を整えた。真剣な表情で麻衣子の上気した顔を覗きこんで、
「具合はいかがですか？」
と問いかける。
麻衣子は子供のように両腕で羽根枕を抱き締めて、その陰から目だけのぞかせる。
「いいです。もーちょっと中まで入れても、たぶんだいじょうぶだと思うんですけどぉ」
「それじゃ、遠慮なく」
今の条二はかなり欲望をセーブしていた。青スジの浮かんだ太幹を4分の3くらいまで挿入して、ゆっくりと律動しはじめる。
「あふぅン。すごいわ。太すぎてアソコの中がすり切れちゃいそう」
岩のように硬くなった絶倫棒を抽送すると、大量の淫蜜で熱く濡れそぼった肉ヒダが太竿全体を締めつけてくる。
ヴァギナの奥を深く突きあげられるたびに麻衣子の下腹はひくひくとわななき、真ん丸な美しい顔に官能の表情が浮かんでくる。
「お、奥に当たってるぅ。あ、あうン……はうっ、はうぅン」
麻衣子は小さなよがり声をあげて豊かな腰をくねらせた。下半身をローリングさせると

結合した部分に微妙なひねりが加わって、条二の剛直を甘く激しく刺激する。
「腰の使い方がうまいな。ずいぶん遊んでるんだろう？」
「そ、そんなことないですぅ。あン！　あぁぁン、よすぎちゃうぅ」
「ということは、麻衣子ちゃんは生まれつきセックスが上手なんだな。根っからスケベなインバイだってことになる」
「そんな言いかたしないでぇン。あぁン、もっと突いてぇ。ひぅン。はっ、はひぃン」
条二の20センチのペニスは、女の蜜壺へ根元まで埋没させるには長すぎる。そこで、秘裂からはみだしてしまう部分は片手で握って時々オナニーするように軽く圧迫しながらピストン運動をつづけていく。
麻衣子は抱き締めていた枕を床に放り投げ、条二のウエストに両手をまわして肉ヒダをこすりあげる極太棒をいっそう深く自分の中へ吸いこもうとする。剛直の激しい突きあげを受けて、狂おしく身も悶えながら白い喉をのけぞらせる。
「そうなのぉ。もっともっと……ひぁン！　奥に当たっちゃうぅン」
麻衣子のヴァギナは束にまとめた輪ゴムのように条二の太魔羅をぐいぐい締めつける。
「あぁン、ダメぇ。いきそっ……んはン。き、気がとおぉくっ……や、はン！」
麻衣子はストッキングをはいた両脚のつま先を反りかえらせて絶頂に達した。小さな朱



唇をＯの形に開ききって、全身をブルルッとわななかせる。
「麻衣子、出すぞ」
条二は一瞬遅れて花奥から剛棒をズルリと抜き取った。腰が震えてふくれあがった亀頭の先から白濁液が噴出する。放たれたスペルマはシーツの上でひくついている麻衣子の太腿をべっとりと濡らした。
「ああン。中に出してくれてもよかったのに」
不満そうな顔でつぶやく麻衣子に、条二は息を荒らげて答えた。
「そういうことは、こうなる前に言ってくれ」
色っぽい表情で自分を見つめる美女の隣にどさっと倒れこみ、片手をのばして剝きだしの乳房をいじりはじめる。
「あぁン。そんなにいじめられたら、また痺れちゃいそうですぅ」
「オレ、色っぽい女を裸にひん剝いて、あちこち触りまくるのが好きだ」
あからさまな言葉に、麻衣子は真っ赤に頰を染めた。乳首とクリ×リスを条二の指で同時に転がされているうちに、絶頂に達したばかりの身体の奥から官能の震えが湧き起こり、それは四肢の先へとひろがっていく。
「わたし、会社の人から、佐久間さんは絶倫で目をつけた女の人は絶対に押し倒しちゃう

人だって言われたんです。だから、佐久間さんは女の子の都合も聞かないで中出ししちゃうようなひどい人なんだと思ってました」
「んなわけないだろ。うちの会社の連中は変に嫉妬深いのが多いんだよ。すげぇ美人をオカマだと言ってみたり、オレみたいな男をレディキラー呼ばわりするんだ」
条二はなおも執拗（しつよう）に女体を愛撫しながらその目に苦笑を浮かべた。
「佐久間さんって、女の子にはいつもこんなふうにやさしいの？」
「ＹＥＳ。『唇には唇を、快感には快感を』がオレのモットーなんだ」
麻衣子も微笑みを返してその手を条二の股間へと這わせていく。萎えても大きな強張りをそっと握ってホウッと吐息をもらした。
「佐久間さんってすごいのね。女の人があなたを好きになってしまう理由が、これで少しはわかったような気がするわ」
「少しじゃなくて、たっぷりと教えてやろうか」
条二はけだるさの残る体を起こして、麻衣子のおいしそうな太腿に手をかける。
ところがその時、背後からパチパチパチと拍手の音が聞こえてきた。
「なにっ？」
振りかえると、いつの間にかドアのところにひとりの男が立っていた。ベッドの上のふ

たりに向かって拍手をしている。50歳前後に見えるその男は黄ばんだ白衣を身につけていた。
「佐久間条二くんだね。ずいぶんと素晴らしい愛の儀式を見せてくれてありがとう。こんなに精力的かつ刺激的な儀式を見学したのは、25年ぶりだよ」
条二は麻衣子の太腿をつかんだまま、ポカンとして男に質問した。
「あんた、誰だ？」
「わたしか？　わたしの名は山本三平太(やまもときんぺいた)。そこにいる麻衣子の父親だ」
「麻衣子の父親？」
不思議そうな視線を向ける条二に、麻衣子はコクッとうなずいてみせる。
「ごめんなさい、わたし、本当は佐久間さんをだましていたの。わたしはお父さまの命令で、あなたがヌクヌル原人かどうかを確かめるために、ここへきたのよ」
「ヌクヌル原人？　なんだそりゃ？」
「縄文時代より以前の日本に棲息していた原始人のことです」
「原始人？」
条二は真顔で麻衣子に聞きかえし、かと思うと次には大声で笑いだした。ゲラゲラ笑いながら、三平太と麻衣子の顔を代わるがわる見やる。

「冗談言うのはよせよ。たしかにオレはどっちかってーと猿顔だから、時々『原始人みたいだ』って言われたりするよ。でも、オレ、自慢じゃないが高校ん時の日本史は10段階評定の10だったけど、ヌクヌル原人なんて言葉は今まで見たことも聞いたこともないぜ」
「ヌクヌル原人は本当に存在したのだ。学会ではまだ発表されていないが、頭蓋骨と体の骨の一部が発見されている」
「ウソくせぇなぁ。それに、だいたいどこのどいつがオレをヌクヌル原人だなんて言ってるんだよ？」
「情報源は明かせません。けれども、あなたが正真正銘のヌクヌル原人だということは、このわたしが確認しました」
「確認って、オレのなにを見てヌクヌル原人だと思ったんだよ？」
「証拠はこれです」
麻衣子は条二の巨根を大事そうに手のひらに乗せて目で示した。
「現代人の男性は、こんなに大きくて硬くて長いペニスは持っていません。ですけれど、ヌクヌル原人ならこんなすごいものを持っていて当然です。ちがいますか？」
条二は麻衣子の手の上にある自分の分身をじっと見降ろした。
「バカ言うなよ。世界中の男を調べれば、これくらいのモノを持ってるやつが10人くらい

は見つかるだろ」
「その通りかもしれません。でも、これだけ大きいモノを持っていて、その上、毎日セックスができてしまうような絶倫の人は、ほとんどいないと断言していいと思うんです」
「麻衣子の言う通りだ。長年にわたるヌクヌル原人に関するわたしの研究データと膨大な統計結果に照らしてみると、きみが現代人ではないという結論が出てくる。つまりきみはヌクヌル原人の子孫なのだ！」
「オレがヌクヌル原人の子孫？」
条二は呆然と三平太と麻衣子を見くらべていたが、やがて渋い顔になって切りだした。
「おまえら、くだらない冗談ばっか言ってないで、もう自分ちに帰れよ」
「その必要はない。なぜなら、ここはわたしの家だからだ」
きっぱり言いかえした三平太は、大股で窓のほうへ歩み寄る。
「わたしはヌクヌル原人すなわちきみの生態を24時間にわたって観察するために、屋敷の別棟を一部改造してきみの部屋をつくったのだ」
「なんだって？」
条二は驚いて室内をぐるりと見まわした。窓ぎわのベッドも小さな冷蔵庫も同じだし、まだ中学生だった頃、進とプロレスごっこをしていて壁に激突した時にできた穴も、ちゃ

んとある。家具やブラインドの色あせたところも記憶通りだった。ただし、掃除嫌いであちこちホコリっぽかったのが、いつもよりきれいになっているような気がする。
「家具や小物はもちろん、きみがコレクションしていたヨーロッパ版無修正のポルノ本や秘部が完全に写っている裏ビデオなど、すべてをきみの部屋から運ばせてもらったよ」
三平太は説明しながら窓のブラインドを開いた。その瞬間、条二は「うげっ⁉」と叫んで絶句してしまった。
なぜなら、窓の外にはいつも見慣れた隣家の壁ではなく、かわりに白衣を着た男たちがずらりと並んでいたからだ。白衣の男たちは手に手にファイルや筆記用具を持って条二の部屋の中をジロジロ覗きこんでいる。
「この通り、きみの生態はわれわれが24時間態勢で観察している。彼らの視線が気になるようであれば、ブラインドを降ろすといい。もっとも、このブラインドは特殊な加工を施してあって、マジックミラーのようになっている。つまり、こちらからは見えなくても向こうからはすべてお見通しだ」
三平太は淡々とした口調で説明する。
「ということは、あいつらはオレがおまえの娘の麻衣子ちゃんとセックスしてたのも、すっかり見学してたってことか？」

「うむ。麻衣子を人身御供に差しだすのは心苦しかったが、これも研究のため、泣くなく娘を差しだしたのだよ、わたしは。もちろんビデオにも撮らせてもらった」
アクの強い三平太の顔をにらみつけているうちに、条二はコンピュータ室で起きたことを思いだした。
「くそっ！　オレの体に麻酔銃を撃ちこんだのはおまえだな？」
「その通りだ。あまり暴れるのでしかたがなく撃ったままでだ。ちなみにあの弾丸に仕込んだ薬には一時的に記憶を失うような薬物も混ぜてあった」
「なんだとぉっ⁉　おまえら、こんなとこに監禁しやがって、オレの人権はどうしてくれるんだよ？」
条二は三平太に向かって発作的にパンチを繰りだした。硬く握りしめた右の拳が黄ばんだ白衣に包まれた腹部にボグッとめりこむ。
「ぐはっ！」
「お父さま！」
麻衣子は腹を押さえてジュウタンの上にうずくまる父親のもとへ駆けつけ、条二の顔をキッとにらみつけた。
「やはりあなたはヌクヌル原人だったのね。そうでなければ、こんなにひどいことはしな

いはずよ。あなたの生態を調べつくしたら、わたしの手で解剖してあげる。きれいに研いだメスで体中を切り裂いてあげるわ」
あまりにも冷酷な言葉を浴びせられて、さすがの条二も背筋が凍るような気がした。
「麻衣子、ここは危険だ。もう向こうへいこう」
「待てよ！」
条二は部屋を退出する三平太親子を追いかけようとしたが、振りかえった麻衣子はその手に痴漢撃退用のショックガンを握っていた。素早くトリガーを引くと青白い光が走って低圧電流が条二の体を直撃する。
「ぐあっ！」
またしても条二は気を失って床にあおむけに倒れこんだ。

☆

会社にもいかずに、1日中ベッドの上で好きなものを食べ好きなことをしてゴロゴロダラダラとすごす。
会議と仕事と残業に始終追われる毎日を送っていると、そんな生活にあこがれてしまうが、実際には、病気でもないのに寝転んで1日中すごすのは無理に等しい。
条二が監禁された彼の自室そっくりの実験室は、まるでホテルの個室のようになってい

た。電話で外線0番を呼ぶと麻衣子が応対して食べたいもの、欲しいものを届けてくれる。それも、監獄のようにドアの下部にある細い隙間から押しこんでくれた。

とりあえず、前から見ようと思って録画しておいたTV放映の映画をまとめて見たり、読む時間がなくて山積みになっていた雑誌やマンガを読んだりしてみたが、それにも飽きて、すぐにすることがなくなってしまった。

ブラインドの外を覗くと、必ず数人の学者たちが条二の動静を見守っていたし、ドアには三平太親子が出ていった時からずっと鍵がかかっている。

夜になって学者たちがいなくなり、彼らのかわりに監視用ビデオが置かれると、条二は麻衣子を電話口に呼びだした。

「麻衣子ちゃーん、そんなとこにいないで遊びにこいよ」

「ダメです。佐久間さんはヌクヌル原人で危険だから、勝手に中に入るな、とお父さまに言われているんです」

条二はわざと大きなため息をつき、真剣な声色で麻衣子に言った。

「実は、ヌクヌル原人は毎晩エッチをしないと眠れないんだよなぁ。ちょっとの間でいいからここへきて慰めてくれないかな？」

「お断わりします」

「冷たいなぁ。じゃあ、テレホンセックスしようか。それなら、麻衣子ちゃんのエッチな顔はオレには見えないからいいだろ？」

そのとたん、麻衣子は電話をブチッと切ってしまった。条二はカッとなってもう一度電話をかけた。

「なんですか？」

「麻衣子ちゃん、オレ、マジで寝る前に1発抜かないと眠れないんだ。それに、寝不足がつづくと自分でもとめられないほど凶暴になって部屋中の物をブッ壊しちまうぞ。ヘタすると窓に頭突っこんで、ガラスで頸動脈を切って自殺しちゃうかもな」

電話の向こうで麻衣子が「ヒッ！」と息を呑む音が聞こえた。

「そんな……。それじゃあ、どうすればいいんですか？　わたし、お父さまから、あなたの部屋には絶対に入るなと言われているのですけど」

「じゃあさ、その電話を持って窓のところへきてくれよ。きみがここへこられないなら、そのかわりに麻衣子ちゃんの顔を見ながら1発抜きたいんだ」

「わかりましたわ」

ほどなく、窓の向こうへ電話の子機を持った麻衣子が現われた。もう寝るつもりだったのか、赤い前開きのベビードールを身につけている。透けてしまいそうなほど薄い絹でで

きたベビードールは膝上20センチの長さで、胸もとと裾に小さなフリルとリボンがたくさんついている。
電話がつながると、条二は部屋の真ん中にイスを置いて座りこんだ。
「麻衣子ちゃん。そこに立って、ストリップをしてくれよ」
すると麻衣子は白い頬を朱赤に染めて、条二から視線をそらした。
「そんなこと、できません」
「あーそう。じゃあ、貴重なヌクヌル原人の子孫の命がどうなってもいいってわけか」
麻衣子がハッとして視線を戻すと、条二はイスを両手でつかんで頭上へ振りかぶり、窓へぶつけようと構えている。
「待って！　やりますから」
麻衣子は悲鳴をあげた。条二がイスを降ろして座りこむのを見届けてから、子機を床に置く。恥ずかしそうに頬を染め、条二の食い入るような目つきを意識しまいと顔をそむける。怒ったように唇をへの字に結んで両肩にかかる細紐をずり降ろした。赤いベビードールがスルリと滑って乳房が飛びだしそうになるのをあわてて押さえて身体をひねる。
小さなリボンをちりばめた裾がふわっと躍って、むしゃぶりつきたくなるほどおいしそうな白い内腿がかいま見えた。

「いいぞ、その調子でじわじわ脱いでいけよ」
条二は受話器を戻してパジャマの中から極太ペニスを取りだした。20センチの巨根を両手で支えて、窓の外に立つ麻衣子をじっと見つめる。ゴクッと喉を鳴らして輪のように丸めた指で太竿をこすりたて、もう片方の手でつけ根の玉袋を転がす。自分の手でするオナニーはそれほど気持ちよくはないが、羞恥に染まった麻衣子の姿態がオカズになると快感はいつもより強くなる。
「ああん、こんなの恥ずかしい」
麻衣子は小声でささやきながら、両手で押さえたベビードールを少しずつずり降ろしていく。白くこんもりした乳房の谷間が見え、つづけて乳うんがわずかに露出する。両目に涙をいっぱいためて、今にも泣きそうな顔で片方だけバストを剝きだしにした。
「うわー。何度見てもおいしそうな……あっ！」
麻衣子は素早く乳房を隠し、太腿をぴったり閉じてモジモジ身体をくねらせる。条二の顔をちらっと見ると、くるっと後ろを向いてしまった。
「あーっ！　なんで後ろを向くうっ⁉　おいこら、こっちを向け！　正面向いて脱ぎぬぎするんだよぉっ」
条二は半勃ちになった太ペニスを握ったまま、中腰になって大声を出す。

すると麻衣子は声が聞こえたのか、肩越しに振りかえった。上半身を倒して前かがみになり、ヒップをおおう赤いシルクをウエストまでゆっくり持ちあげる。ベビードールの下から同色のスキャンティに包まれたヒップが出現する。
「ひぇ〜、そういうことかよぉ」
納得してうなずきつつ、条二はイスへドッカと腰を降ろす。また機嫌よくニコニコ……いや、ニヤニヤしながらオナニーを再開する。
麻衣子はスキャンティの両脇へ親指を入れて、脱ごうか脱ぐまいか、ためらうような素振りを見せた。乳房の谷間を見せた時と同じように、少しずつずり降ろしてお尻の谷間を3分の2ほど剝きだしにする。
「うーん。麻衣子ちゃんってば、女子中学生みたいに可愛い顔をしてるくせに、じらしのテクニックは本物のストリッパーさんと同じくらいうまいじゃないか」
条二は感心しながら両手で極太棒をこすりたてた。20センチの巨砲は完全に屹立して先割れから我慢汁を溢れさせている。もうあとひとこすりかふたこすりしただけで爆発してしまいそうだ。
窓の向こうの麻衣子は雪白のお尻を完全に露出させているが、恥ずかしい場所だけは片手で隠している。

「うわ〜、すげぇ淫靡でそそられるぜ。麻衣子ちゃ〜ん、そろそろ全部見せてくれよぉ」
条二がじれはじめた頃、麻衣子の背後へ突然三平太が乱入してきた。裸同然の娘を見ると、カンカンに怒って細い腕をつかむ。三平太は娘と口論になり、条二のことはすっかり忘れて麻衣子を監視用の部屋の外へと連れだしてしまった。
「あーっ！　三平太の馬鹿野郎。もうちょっとでイキそうだったのに」
条二は萎えてしまった巨根をズボンの中へしまいこみ、ふてくされた顔でベッドへあおむけにひっくり返った。
「チェッ。あったまくんなぁ。いったいどこのどいつがオレをヌクヌル原人だなんて言ったんだよ？　むかしフッた女の誰かが復讐のつもりでオレをワナにかけたのか？」
過去につき合った女たちの顔を思い浮かべてみたが、犯人に心当たりはない。
「オレがヌクヌル原人なのか？　進のやつもどこか別の部屋に監禁されてるんだろうか」
ぼんやりと考えこむうちにあくびが次々と出てきて、条二は睡魔に誘われるままトロトロとまどろんでしまった。

第4章　童貞ボーイの過激実習

その日の真夜中。
進はトイレに起きたついでにリビングルームで牛乳を飲んでいた。夕食で塩辛いものを食べたせいか、ひどく喉が渇いている。
「あら、まだ起きてたの。勉強？」
振りかえると律子がドアのところに立っていた。シャワーを浴びたばかりらしく、化粧を落とした白い頰はピンク色に上気して、肩のあたりで切りそろえられたストレートの黒髪がシルクのようにしっとりと艶を帯びて光っている。
律子は切れ長の目の黒い瞳をしばたき、眠そうにあくびをしてソファに座りこむ。その弾みで95センチの巨乳を包むパジャマの前ボタンが自然とはずれ、Ｅカップの谷間と白い

肉球が半分ほど露出する。ズボンがわりのボクサーパンツ姿でムッチリした太腿を見せつけるように、ソファの上で脚をゆっくり組み替える。

「勉強ってわけでもないけど……」

進は言葉を濁して牛乳を飲み干す。あわてて目を閉じたが、まぶたの裏には律子の白い胸の谷間がくっきり焼きつき、血気盛んなペニスがムクッと盛りあがってくる。

（あの胸には牛乳と同じものが入ってるのかな？　吸ったら出てくるのかな？）

そんなことを考えたとたん、進の男根はムクムクッと半勃ちになってしまった。興奮を静めようと、律子の白い太腿から目をそらしてこっそり深呼吸をする。

「ジョージのやつ、まだ帰ってきてないみたいね。いつもこうなの？」

「う〜ん。時々、朝帰りするかな。一晩中帰ってこないこともあるよ」

「それって仕事なの？　それとも恋人のところへ泊まってるのかしら？」

進は肩をすぼめて飲み干したコップをシンクへ置いた。律子がまだ話したそうにしているので、部屋へすぐ戻るのも悪いような気がして、冷蔵庫の中を物色するふりをする。

「ねぇ、ジョージに聞いたけど、進くんはまだ童貞だって本当？」

「そんなこと、律子姉ちゃんには関係ないだろ」

進は怒ったような顔で返事をした。兄の条二ならまだしも、イトコの律子から「童貞、

童貞」と言われると、なんだか自分が童貞でいることに罪悪感が湧いてくる。
「ボク、もう寝るんだ」
微笑を浮かべて見つめている律子の前を横切って2階の部屋へ直行した。まだぬくもりの残るベッドの上へあおむけにひっくり返る。
「チエッ。ボクが童貞なのは、ボクが悪いんじゃないや」
ブツブツつぶやく進の脳裏には、ひとりの少女の顔がぼんやりと浮かんでいる。それは進と同じ高校の2年生、**姫野恵里香**（ひめのえりか）だった。
恵里香は進より1年先輩で帰宅部に所属している。友達が教えてくれた情報によると、恵里香は妹のミミナとふたり姉妹で、病弱で働けない父親の薬代と生活費を稼ぐために学校が終わるとあちこちでバイトをしているらしい。
「恵里香さんは偉いよなぁ。恋人なんているのかな？……恵里香さんもエッチなことをするんだろうか？」
悦楽に歪む恵里香の表情を想像したとたん、進のペニスがムクムクムクッと充実してくる。そっと片手をズボンの上へ持っていくと、チェリーボーイの男根は軽くつかまれただけでピクッと反応を示した。
「ダメだ！　ボクは兄ちゃんみたいに女の人とやりまくるようなケダモノには絶対ならな

いぞ。結婚するまでは、絶対に童貞を守り抜くんだ！」
自分自身に言い聞かせて、股間の疼きを静めようと枕に顔をうずめる。けれど、すぐに息苦しくなってガバッと跳ね起きた。浅黒くハンサムな顔を赤く染めて、マットレスの下に片手を突っこむ。引っぱりだしたのは1冊のマンガ雑誌だった。表紙には『18禁』とは書いていないが、中を開くとアダルト漫画ばかりが並んでいる。
進はパラパラッとページをめくって、巻中カラーのところで指をとめた。
「恵里香さん」
そのマンガに登場するヒロインは恵里香によく似ていた。
恵里香は143センチと小柄で、子猫のような可愛い顔をしている。身体だけじゃなく顔も小さいので、長いまつげにふちどられた目だけが大きく見えた。進が学校で見かける恵里香は、いつも友達と楽しそうに笑っている。
進はセーラー服姿の恵里香を思い浮かべてベッドの上に両膝をついた。枕もとの棚に雑誌を置いて片手で押さえ、もう片方の手でパジャマのズボンをずり降ろす。青いトランクスの下から高校1年生にしては驚くほど長いペニスがヌッと出現した。
「恵里香さん。ボク、恵里香さんが好きだ。すごく好きなんだ」
進はマンガの中の恵里香にささやきかけながら、輪にした指で太竿をゆっくりとしごき

はじめる。条二のペニスは勃起時で長さ20センチ、太さは一番太いところで直径4センチほどあったが、弟の進も負けてはいない。どんどんそり勃ってきた剛直は長さ17センチ、太さ直径3・8センチにまでふくらんでいる。

「ボクは兄ちゃんみたいなケダモノには絶対ならない。でも、でも……」

恵里香のことを考えると、進の分身はいつも熱く火照ってくる。ブリーフにはおさまりきらない巨根がムズムズ疼いて、肉茎の表面に青スジが浮かぶほど勃起してしまった。

マンガの中の美少女は唇に突きつけられた男の怒張をいやいや舐めている。大きな瞳を涙でいっぱいにして、おそろしく巨大な太竿をフェラチオしていた。

進はページをめくって美少女の凌辱シーンを見ながらオナニーをつづけた。今やヘソを打たんばかりに勃起した太幹の先端からは、透明な液がにじみだしている。コブラの鎌首のような亀頭は赤黒く濡れて、心臓の鼓動と連動してドクッドクッと脈打っている。

「ああ、この指が恵里香さんの指だったらいいのに。恵里香さんがあの唇でボクのチ×ポをフェラチオしてくれたら……」

「あたしがしてあげようか？」

すぐ後ろで声がして、進は「ギャッ！」と叫んでしまった。発射寸前の巨砲をつかんだまま振りかえると、客間へ戻ったはずの律子がドアのところに立っている。

ずくまる。

「り、律子姉ちゃん!?」

律子の視線が自分の股間に向けられているのに気づき、真っ赤になってベッドの上にう

「進くん、恵里香さんって誰よ。好きな女の子なの?」

「う、うん。あの、律子姉ちゃん、ボク……」

部屋から出ていって欲しい、と言いたいのだが、気弱な性格の上に、オナニーしている現場に踏みこまれてしまったせいで、どうしても強気になれない。オドオドしながら律子の顔色をそっとうかがう。

律子は進の側にヒップを降ろした。ボクサーパンツからのびている白い太腿がやけに目にまぶしくて、進は思わず目線をそらす。

「ねえ、しつこいようだけど、進くんって、本当にまだ童貞なの?」

「そうだよ。悪いかよ?」

進はさすがにムッとして聞きかえした。律子に見えないように背中を向けて、半勃ちの巨根をズボンの中へしまいこもうとする。ところが、その手を律子がつかんだ。

「あら、隠さなくたっていいじゃない」

「えっ? でも、ボク……」

律子は長いまつ毛を伏せて、しっとり濡れた唇を進の唇へ触れそうなほど近づけていく。
「お姉ちゃん、進くんのおチ×チ×を食べてみたいなぁ」
「えええっ？　た、食べるって、そ、そんな……」
進は驚きのあまり股間を両手で押さえたまま体をのけぞらせた。心臓は早鐘を打つごとくバックンバックンと高鳴って、今にも口から飛びだしてしまいそうだ。ゴクッと喉を鳴らして生唾を飲みくだし、幽霊屋敷の提灯オバケのように口をパクパクさせる。
律子は慌てふためく進の右手をパジャマに包まれた自分の巨乳へ導いた。浅黒い手をつかんだままで、ふくよかな乳房を揉みしだかせる。
「あたし、今日で出張は終わったし、明日はこの家を出て自宅へ帰るのよ。その前に一度でいいから進くんのおチ×チ×を味見させて。いいでしょ」
進は「えええええっ？」と奇妙な声をあげて絶句してしまった。その手に握らされた乳房の柔らかな感触が脳ミソいっぱいにひろがって、鼻筋の通ったハンサムな顔はみるみるうちに真っ赤に染まっていく。
年上の小悪魔はウフッと笑って進の両肩をつかんだ。軽く力を入れてベッドに押し倒し、股間を隠している進の片手をどけさせる。すぐに巨大なペニスが剝きだしになった。
「わあ！　すごいじゃない」

「そんなことないよ」
「すごいわよ。ジョージのおチ×チ×もすごいけど、進くんのもとっても素敵。こんなにすごいのを見せつけられたら、お姉ちゃん、胸がワクワクしてきちゃうわ」
その言葉通り、深呼吸する律子の乳房が大きく盛りあがる。興奮のあまり乳首が勝手に尖ってきてパジャマの胸もとをプクプクと突きあげた。律子はパジャマを頭から脱いで巨乳を剝きだしにすると、しなやかな指で進の肉袋をすくいあげて、もう片方の手の指を弾力のある太幹の表面に這わせていく。
「まだ柔らかいのに、こんなに大きいなんて……」
「ダメだよ。律子姉ちゃん、お願いだからそんなに触らないで」
進の剛直はあまりにも敏感すぎて、ほんの軽く撫でられただけなのに根元からグンと硬くなっていく。
「ではでは。いたーだきーます」
進の両脚の間にひざまずいた律子は、勃起してきた男根を美唇でパクッと咥(くわ)えこんだ。舌の平らな部分で亀頭を包みこんで、カリ首を舌先でえぐりあげる。
「あっ……」
進は小さな声をあげて両目をつぶった。熱くてしっとりした感触がペニスの先端に絡み

ついてくる。律子の舌はナメクジが這うように進の剛棒を先割れから根元のほうへとにじっていく。

「だ、ダメだよ。そんな……」

律子は赤いマニキュアを塗った指先で巨砲の根元にある丸い弾倉をやさしく転がしながら、チェリーボーイの元気棒をジュルリと舐めあげた。興奮で胸を弾ませつつ、美少年の顔をうっとりと見あげる。

「どう。気持ちいいでしょ。もっとして欲しい？」

ハスキーボイスでささやかれると、進は両頬をいっそう熱く火照らせてイヤイヤと頭を左右に振った。

「ダメだよ。もうやめて」

「どうしてよ。気持ちいいんでしょ？」

「気持ちはいいけど、ボクをこれ以上ヘンにしないで。……ああっ、ちょっと触られただけなのに、こんなになってる」

進は上半身を起こして律子の手の中にある太いペニスを見降ろした。青筋の浮かんだ剛棒は、まるで持ち主の進とは無縁の独立した生き物のようにドクッドクッと脈打っている。自分の手を使ってオナニーする時よりも、もっと硬く勃起していた。



「男ならこうなるのが普通よ。気にしないで」
泣き顔になる進を、律子は思わず両腕で抱き締めた。卵形の美しい顔に微笑を浮かべて完全にふくらみきった男根の先にキスをする。
「進くん、お姉ちゃんのも触ってみて」
甘くかすれた声でささやいて進の手をつかみ、ボクサーパンツの中へ導こうとする。
「ダメだよ」
「やあねぇ。そんなに抵抗しないの」
律子は赤面している進の右手を強引に自分の狭間（はざま）へ持っていった。
「ああっ」
ざらりとした恥毛の感触に、進は慌ててその手を引っこめようとする。
「もっと奥まで触ってちょうだい」
「いやだ。できないよ」
律子はいやがって身悶える年下の美少年をもう一度ベッドへ押し倒した。
「いつもは素直でいい子なのに、今夜はずいぶん悪い子なのね。……いいわ、悪い子にはおしおきしなきゃ。進くんを逆レイプして童貞を奪っちゃおうっと」
「そ、そんなのダメだよ！」

律子は悲鳴じみた声をあげて逃げだそうとする進のお腹の上へ大きなヒップをドシンと乗せてしまった。進の上にまたがったまま、器用に尻たぶを片方ずつあげてボクサーパンツを脱ぎ捨てる。

「ダメだったら！　律子姉ちゃん、部屋から出ていかないと、大きな声を出すぞ！」

「いくら叫んでも平気よ。どうせジョージはまだ帰ってきてないんだし」

律子は小悪魔の笑みを浮かべて平然と言いかえし、卑猥なクレヴァスを自分の指でひろげて美少年の顔の前に突きつける。

律子のアソコはネバネバした淫蜜を吹きだしてしとどに濡れそぼっていた。

「ほぉーらね。こんなの、一度も見たことないでしょ。進くんのおっきいのをフェラチオしてたら、こんなに濡れてきちゃって大変よぉ」

「やだよぉ、やめてよぉ」

進は泣き声をあげて女の秘部から視線をそらした。けれど、ギュッとつぶったまぶたの裏には、ビラビラした薄い秘唇とクリ×リス、そして前と後ろのふたつの穴がくっきりと焼きついている。

「律子姉ちゃんなんか、きらいだ。ボク、もう二度と口なんかきかないからね！」

「進くん……」

律子は眼下で泣きじゃくる進のことが急にかわいそうになってきた。馬乗りの体勢を解いてすぐ脇へひざまずく。
「ごめんね、進くんを困らせるつもりじゃなかったのよ。進くんがとっても可愛いから、ちょっぴりイジワルしてみたくなっちゃっただけなの」
やさしい言葉をかけて、起きあがろうとする進の体を抱きしめる。進は一瞬抵抗する素振りを見せたが、自然と律子の巨乳へ頬を押しつけるようにしてその身をまかせた。
進は律子の腕の中で大きなため息をつく。
「律子姉ちゃん、ごめんね。ボクは兄ちゃんみたいなケダモノには絶対にならない。そう決めてるんだ。だからこんなことをされると困るんだよ」
進の巨根はフェラチオの余韻を残して半分ほど勃起したままになっている。
「バカね。どこをどうまちがっても、進くんはケダモノにはならないと思うわ」
「本当に？」
「もちろん本当よ。ジョージは生まれつきのケダモノだけど、進くんはちがうわ。いくらケダモノになろうとしても、絶対なれっこないわよ」
「本当かなぁ？」
進は心配そうな顔で自分の股間を見降ろす。

「ケダモノっていうのは誰でもいいから手当たりしだいにセックスしちゃう人のことよ。でもね、本当は野生の動物は人間ほどエッチじゃないのよ。だって、たいていの動物は発情期が決まっているし、カップリングする相手は誰でもいいってわけじゃないもの」
「姉ちゃんの話が本当なら、ボクはケダモノじゃなくて、野生の動物のほうに近いんじゃないかな」
「かもね。人間はいつでも発情するし、男も女もケダモノになることができるわ」
「律子姉ちゃんもケダモノになるの？」
「ええ。優秀なオスを見つけた時は、身体の奥にあるスイッチが自動的にONになって、オスに犯して欲しくなるの」
律子は声を震わせて進の体をいっそう強く抱きしめる。
「わかるでしょ？　お姉ちゃんは今夜素敵なオスを見つけたの。だからスイッチが入って、こんなことをしてしまったのよ」
美少年の首筋に舌を這わせつつ、股間の太筒に指を絡める。
「進くん、わかって。お姉ちゃんは進くんが好きなの。好きだからこんなになってしまったのよ」
律子は瞳を潤ませ、骨ばった進の手をつかんでもう一度女陰へと導いていく。

「姉ちゃん……」
律子のアソコは信じられないほど大量の淫蜜でぐっしょりと濡れそぼっていた。少年の指先が薄いピンク色の秘唇を割り開くと、陰口にたまっていたラブジュースがトロリとアヌスのほうへ流れていく。
進はびっくりして律子の顔を見た。
「濡れてる」
「そうよ。スイッチが入ると自然に濡れてきちゃうの。進くんのおチ×チ×がちゃんと奥まで入るように、びしょびしょに濡れてしまうのよ」
進は律子の手をはずして自分の意志で濡れた右手を動かした。指先を割れ目の中で遊ばせて女の秘め貝をヌルヌルの液でまんべんなく潤わせてから、スリットの下のほうにある膣口に人差し指をあてがう。
「ここにボクのが入るの?」
「ええそうよ。入れてみたいでしょ?」
「入れたいけど、ボク、童貞は結婚するまで取っておこうと思ってるんだ」
「でも、男の子はそれなりに経験を積んでおかないと、初めての時に失敗することがあるのよ。だから、恵里香ちゃんとする時に失敗しないように、お姉ちゃんがやりかたを教え

てあげるわ。そんなに難しくはないけど、その時のために、ちゃんとできるように練習しておいたほうがいいと思うの」

恵里香の名を聞くと、進は頰を赤く染めてうつむいてしまった。

「ボク、童貞を捨てたほうがいいんだね？」

「そうよ。お姉ちゃんが進くんを一人前の男にしてあげる」

「一人前の男……」

顔をあげた進と律子の視線が真っ直ぐにぶつかった。

「教えて、お姉ちゃん」

「いいわ。進くん、女の子とベッドに入ったら、まず最初にやさしい言葉をかけて安心させて、洋服とか下着を脱がせてあげるの。今は、そこのところは省略するわね。それから、唇や舌や指を使って女の子の身体中を可愛がるのよ」

「どんなふうに？」

「キスしたり、舐めたりするの。進くん、お姉ちゃんのオッパイを舐めて」

真剣な表情でセックス講義を聞いていた進は、ドキドキしながら目の前に横たわる律子の巨乳にむしゃぶりついていく。硬くしこった乳首を口に含んでチュウチュウ吸いあげると、律子が「ああん」と甘い声をあげた。

「それじゃダメよ。最初は乳房の縁のほうから舐めはじめて、少しずつ乳首のほうへ近づいていくの。乳首とクリ×リスは身体の中でも特に敏感だから、いきなり刺激するよりは、たっぷりじらしてから愛撫したほうが燃えるのよ」
「クリ×リスって、どのへんにあるの？」
「さっき見せてあげたでしょ。アソコのビラビラの間の、上のほうにあるの。でも、今はまだ触っちゃダメよ」
進は「うん」とうなずいて、教えられた通りにEカップ95センチの巨乳を舐めあげる。マンガの中に出てくる男たちのまねをして、片方の手で柔らかな肉球をわしづかみに包んでゆっくりと揉みしだく。
「はあぁん。……そうよ、その調子。女の身体って外側よりも内側が感じやすいの。腕や太腿の内側とか、腋の下とかね。普通はくすぐったいと思うところを愛撫すると、快感を感じることが多いのよ」
進はためしに律子の白くムチムチした内腿をやさしくさすってみた。
「んくっ……。あふっ」
律子はトロンとした瞳で年下のチェリーボーイを見つめる。
「初めてにしては、ずいぶんじょうずなのね。いつもマンガを見て勉強しているの？」

「勉強なんかしてないよ」
怒ったような声で言って、進は律子の狭間へ指を滑らせていく。カールした恥毛を指の先でなぞり、濡れそぼった秘唇をつまんで軽く引っぱる。
「んんっ。はんっ……」
くすんだピンク色の花びらを左右にひろげて、蜜の溢れだす場所を指でくじる。指腹で愛液をすくって敏感な突起にこすりつけると、年上の女はブルッと裸身を震わせた。
「ここがクリ×リスなんだね」
進は自分の指に合わせて女の身体が反応するのがおもしろくてたまらなかった。ピンク色の肉芽を転がすたびに、律子は甘く息を弾ませる。白い内腿はヒクヒクわなないて赤いペディキュアを塗ったつま先がピンと反りかえった。クリ×リスへの愛撫を中断すると、律子は自分からヒップを持ちあげて進の指をおねだりする。
「はふっ……あはぁん。も、もう我慢できないわ。進くんのおチ×チ×を下のお口に食べさせて。お姉ちゃん、もうこれ以上待てないの！」
進もまた、興奮で心臓をドキドキさせながら言葉をかえす。
「もう入れてもいいの？」
「いいわ。おチ×チ×の先か指でビラビラを左右に開いて、アソコの穴へ入れるのよ」

進のペニスはもはやビンビンに硬く張りつめていた。
「入れるからね」
そう宣言すると、進はそそり勃った巨根を秘裂へ挿入していく。ところが、コブラの頭のような三角形の亀頭はなかなか蜜壺に入っていかない。
「ダメだ。穴が狭くて入っていかないよ」
「だいじょうぶ。片手を添えて、もっと腰に力を入れればちゃんと入るわ。がんばって」
律子は進を励ましながら腰を突きあげていく。すると少年の巨砲は膣の穴にズブッと突き刺さった。
「ひあぁっ！　ほ、ほら、入ったじゃないの」
「うん。姉ちゃんのココ、すごく熱くてヌルヌルなんだね。これからどうするの？」
「出したり入れたりしてみて。そうすれば気持ちよく……あひいっ！　あんまり強くしないで。壊れちゃいそう。……あっ、ひはあっ」
進は律子の太腿をつかんで、棒のように硬直した剛直を律動させる。太幹にぬろぬろとまつわりついてくる肉ヒダを亀頭の先でこすりたてるたびに、女の身体は激しくわななき、上気した顔に悦楽の表情がひろがっていく。
「うわあ、すごいや。姉ちゃんのオマ×コがボクのチ×ポをギューッて締めつけてくるよ。



オマ×コの中はとても熱くてドロドロに溶けきってて、すごく気持ちいいや」
「ひぃぃっ。ひっ……はひぃっ！」
進が元気棒をピストンさせると、律子はみだらな声をあげて大きなお尻をくねらせる。ふたりの結合部はぐしょぐしょに濡れそぼり、極太ペニスが秘孔を出入りするたびに愛液がシーツの上へ点々と飛び散った。
「もっとやって！　はうっ、あっ、ふあぁーっ」
進は大きくM字に開かれた律子の太腿をつかんで、ピストン運動の速度を速めていく。生まれて初めて味わう女のヴァギナは最高に気持ちよくて、あっという間に果ててしまいそうだったが、白い歯を食いしばって必死に射精をこらえる。けれど、我慢はもう限界にきていた。
「お、お姉ちゃん、もうダメだ。ボク、出ちゃう！」
そう叫んだと同時に、進は律子の花奥へ白濁の液を放出してしまった。ペニスに集中していた全身の力がスペルマと一緒に溢れだしていき、引き締まった尻がブルッと震える。
「ああーっ！」
律子も絶頂に達して、ひときわ大きな声をあげながら根元まで挿入された進の勃起を激しく締めつけた。エクスタシーを迎えた裸身は熱く弾けて、ゆっくり弛緩（しかん）していく。

「ああ。進くんのが、あたしの中に……」

進がヒクヒクとけいれんしているヴァギナからペニスを抜こうとすると、律子は彼の腕をつかんでイヤイヤをした。

「まだ抜かないで」

「でも、ボク、中で出しちゃったよ」

「今日は平気な日なの。気にしないでもう少し余韻(よいん)を味わわせて」

やさしげに律子を見つめる進の顔には、どことなく大人びた色が浮かんでいた。

第5章　幼なじみとお風呂で××!?

翌朝。

進は普段より早い時間に目覚めた。ベッドの中で四肢を大きくのばして「うーん」と声をあげる。そのままで一瞬息をとめてみた。なんだか、今朝の自分はきのうとはまったくちがう自分になったような気がする。

「律子姉ちゃんのせいかな？」

とつぶやき、ゆっくりと起きあがった。その脳裏に昨夜生まれて初めて味わった女陰の感触がよみがえってくる。律子のヴァギナは大量の愛液で濡れそぼり、熱く火照る肉ヒダが童貞だった進のペニスに絡みついてきた。蜜壺のやさしい締めつけはオナニーや他の行為では絶対に味わえない快感だ。

進は根元から充血しはじめたペニスを片手で軽く押さえた。
「まずいぞ。元気になってきちゃった。おい、勝手に勃起するなよ！」
股間の息子に言い聞かせて洗顔をすませた。
「そういえば今日は日直だったっけ」
高校の制服に着替えると、足音を忍ばせて階下へ降りていった。律子と顔を合わせるのはなんだかちょっと恥ずかしいので、誰もいないキッチンの戸棚からモーニングロールをふたつ取って一気に頬張り、牛乳で流しこんで玄関を飛びだした。
玄関に靴がなかったところを見ると、条二は昨夜は帰宅しなかったようだ。
「兄ちゃん、また女の人のところに泊まったのかな？」
渋い顔でつぶやきながら、すぐ隣の飯村家の玄関のドアを開けた。
「おはよーございまーす！　おーい、桃代ぉ、迎えにきたぞー」
大きな声で呼んでみたが、返事がない。
「おばさーん！……変だな、みんなどこかへ出かけちゃったのかな？　でも、鍵をかけないでいくわけないし……。桃代のやつ、まだ寝てるのかな？　おーい、桃代ぉ！」
彼女の部屋までいってみようか、それともネボスケは見捨てて学校へいこうか、と進が考えていると、ようやく家の奥からかすかに声が聞こえてきた。

「進ーっ！」

「桃代、いるんだろ？　おじゃましまーす」

思いきって家の中へあがりこんだ。玄関の横にある階段を登ると突き当たりが桃代の部屋だが、進を呼ぶ声は2階ではなくキッチンのほうから聞こえてきたようだ。

稲村家はリビングもキッチンも無人だった。テーブルの上にはひとり分の朝食が用意されている。その横に『今夜は遅くなります。気をつけていってらっしゃい』という桃代にあてたメモがあった。どうやら、桃代の両親は朝早く出かけてしまったらしい。

「進、助けてぇ！」

進は桃代の声を聞くと急いで浴室へ直行した。脱衣所へつづくドアが半分ほど開いている。いきなり入っていくのもなんなので、ドアの陰から桃代に声をかけてみた。

「なんだよ、朝から風呂に入ってるのか？」

「よかった！　髪が絡まっちゃって取れないの。お願いだから助けてよ」

「中まで入っていってもいいのか？」

「いいわ。早くしてぇ」

進はゴクッとつばを飲んで脱衣所に入っていく。

洗濯機の上に桃代のパジャマと洗いたての下着が置かれていた。洗濯カゴにパステルピ

ンクのパンティがあるのを見つけて、手に取って鼻に押し当てる。大きく息を吸いこむと鼻腔いっぱいに女の子独特の甘いような酸っぱいような香がひろがり、進はウットリとした表情になった。

「なにしてるの？　早くしてってたら！」

桃代の声にせかされた進は、ビクッとしてパンティを元の場所へ戻した。

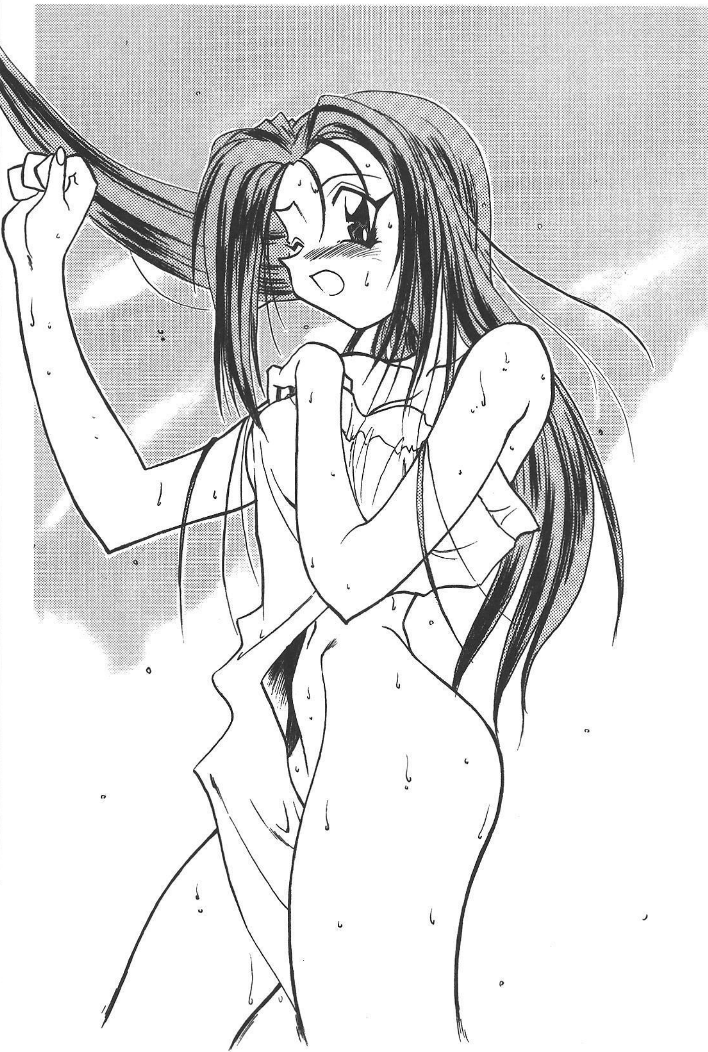
「開けるよ」とひとこと断わってから浴室のガラス戸を細く開けて覗きこむ。すると、すぐ目の前に桃代の白い裸身があった。

進は「うわっ！」と叫んで体をのけぞらせた。思いがけず幼なじみの裸を目撃してしまったショックと興奮で心臓がドキドキ高鳴ってくる。胸の鼓動は全身に伝わって、股間の息子がムクッと充血してくる。

「どーして裸なんだよ？」

「シャワーを浴びてたのよ、裸で当然じゃない。それより、このままじゃ風邪ひいちゃうわ。早く助けてったら！」

進が恐るおそるもう一度浴室を覗きこむと、桃代は素っ裸で壁のシャワーに向かって立っている。シャンプーしている最中に腰のあたりまである茶色のロングヘアがノズルのフックに絡まってしまったらしく、タイルの上で棒立ちになっている。



桃代は片手に持ったタオルで乳房と大切なところを隠し、頭を軽くひねって進を見た。彼女は175センチの進より10センチほど背が低い。それでも高校1年生の女の子にしては身長が高いほうで、健康的で肉づきのいい身体をしていた。すべすべときめこまやかで白い頬が、幼なじみに裸身を見られている羞恥で赤く染まってくる。

「自分じゃ、どんなふうに絡まってるのか全然わかんないの。早くはずしてよ」

進は制服のジャケットと靴下を脱いで桃代の横に降り立った。タオルの端から見える白い乳房やほどよく発達した太腿はなるべく見ないようにして、フックへ手をのばす。

桃代の黒髪はちょっと引っかかっているだけで、すぐにはずしてやれそうだ。けれど、勝ち気な桃代はいつも進に生意気な口を叩いてばかりいるので、少しいじめてみたくなって、つい嘘をついてしまった。

「かなり絡まっちゃってるな。少しハサミで切らないとダメだぞ」

「そんなのイヤよ。せっかくここまでのばしたのに」

桃代は泣きそうになってポッテリしたピンク色の唇を尖らせる。進には、唇をすぼめた桃代の顔が、まるで自分にキスをせがんでいるように見えた。

「じゃあ、ボクの言う通りにするかい？」

「どうすればいいの？」

「う〜ん。そうだな、そのままじっとしてて。ボクが『いいよ』って言うまでは、ギャアギャア大声を出して騒いだり、暴れたりしちゃダメだよ。いいね？」
「いいけど、本当に切らずにはずしてくれるんでしょうね？」
「うん、だいじょうぶさ。それじゃあ、はじめるよ」
進は律子から教えてもらった女体攻略法を試してみたくてウズウズしていた。セックスの腕を磨くチャンスとばかりに、壁に向かって立っている桃代の細くくびれたウエストへ片手を軽く乗せる。
「ちょっと、なんでそんなとこを触るのよ？」
「いいから黙って」
進は幼なじみの細腰をつかみ、もう片方の手を下腹部へとのばしていく。
「なにするのよ!?」
「黙ってないと、絡まってる髪を根元から切ってハゲにしちゃうぞ」
「やだぁ！」
進の手は肩幅にひろげられた桃代の両脚のつけ根に潜りこんだ。すぐに指先に頭髪とはちがうヘアが触れる。美少女の恥毛はシャワーを浴びたばかりでしっとりと潤っていた。ところどころに小さな水滴がまだ残っている。

「やーん。そんなトコに触んないでぇ」
進は幼なじみの抗議は無視して、うっすらと肉の乗った丘のふもとへと片手をのばしていく。恥ずかしい毛の生えた丘の下は深い谷になっている。そこには、2枚の花びらがぐっしょり濡れて震えていた。
「それ以上触ったら、ぶっとばすからね！」
「できるもんならやってみろよ」
桃代はタオルで乳房を隠したまま、もう片方の手で進のイタズラな手をつかんで秘部からどけさせようとするが、男の腕力にはかなわない。
進は白いワイシャツが濡れるのもかまわずに、美少女の背中へ自分の胸を押しつけた。両脇から両手を差しこみ、片手でパールピンクに輝く秘唇をひろげていく。薄皮に包まれた肉芽を剥きだしにすると桃代は鼻にかかった甘い声で「いやん。ダメよぉ」と身悶える。
「桃代だって、オナニーくらいしたことあるんだろ？」
「ないわよ」
「本当かどうか、怪しいな。じゃあさ、オレが教えてやるから、きちんと覚えとけよ」
童貞とさよならしたおかげで男らしさが出てきたのか、進は急に自分のことを「オレ」と呼びながら、幼なじみのクレヴァスへ指先を軽く押し当てる。もう片方の手はタオルに

包まれた乳房へとのばした。
進の指が大切なところに触れると、桃代は「あっ」と声をあげた。
「ちょっと、ダメだったら！」
しかし進は桃代が抵抗できないのをいいことに、右手で少女の秘裂全体を包みこむようにしてやんわりと揉みあげる。
「ああん。どうしてそんなことをするの？」
「気持ちよくしてあげるためさ」
「気持ちよく？……あっ」
桃代は小声で叫んでブルッと裸身を震わせた。その弾みで乳房を隠していたタオルが足もとに落ちる。桃代のバストは16歳にしては大きく、ブラジャーは90センチCカップをつけていた。
「桃代ってオッパイが大きいんだね。こんなに大きいとは思ってなかったよ」
「やだ、見ないで！」
片腕で乳房を隠すようにしながら、少女は羞恥で頬を朱に染める。そのおかげでガラス細工のように繊細で清楚（せいそ）な面ざしがいっそう美しさを増した。
「もっと触ってもいいだろ」

進は幼なじみの乳房を揉みあげ、クリ×リスをやさしく嬲りはじめた。人差し指の腹を敏感な花芯の先へ『の』の字を書くようにこすりつけていく。

「ダメよ、そんなことしたら……ああん。やだ、なんか変になってきちゃった」

「桃代さぁ、本当にオナニーしたことないの？」

「ないって言ってるでしょ。あんっ。もうそれ以上触らないでぇ。早く髪を……」

敏感な肉芽を転がされるたびに、桃代の美しい裸身を興奮の震えが駆け抜ける。少女のウエストは細く引き締まって56センチしかない。ヒップはバストと同じ90センチで、弾力のある肉球はキュッと上向きに盛りあがっている。

「ああん。どうしよう、はあぁん」

下腹から快感の波がゾクゾクとこみあげてきて、桃代は立っていられなくなり、切なげに息を吐いてヒップをくねらせた。フックに絡みついた髪のことなどすっかり忘れて白い喉をぎりぎりまでのけぞらせ、朱唇をわななかせて快感をむさぼる。乳首がツンと尖った大きな乳房は重たげにゆさゆさ揺れてぶつかり合う。

「やあぁん。進、なんかすごく気持ちいいよぉ。あたしを変にしないでぇ」

「変になっちゃえよ。オレは気にしないぜ」

「だってだって。や～ん。変になっちゃううぅ」

恥ずかしげに頰を赤らめ、両目に涙を浮かべて身をよじる美しい幼なじみを、進は思うぞんぶんもてあそぶ。クレヴァスに這わせた指を激しく動かし、芯の硬くなってきたクリ×リスを指腹で転がす。

「ダメだったら！」

桃代は狭間を犯す進の腕を両手で押しのけようとした。けれど、尖った乳首とじっとり湿ったスリットをいじられているうちに身体の奥から快感がこみあげてきて、抵抗する気が失せてくる。このまま最後までいってしまってもいいような、けれど処女を失うのは怖いような、どっちつかずの気持ちになってきた。

進はほっそりとしたウエストに片腕をまわして桃代のヒップを引き寄せた。背後から耳もとに唇を寄せて低い声でささやく。

「今すぐ入れてやるからな。そしたらもっと気持ちよくなるぞ」

淫蜜を指にまぶして膣口を揉みしだくと、桃代の白い裸身はビクビクッとけいれんする。進は処女の花園をじわじわと責めながら、ズボンの中から勃起を取りだした。極太ペニスはズボンの戒めを解かれたと同時に硬く太くそそり勃っていく。透明な液をにじませる亀頭が桃代の太腿にぶつかった。

「ひいっ。やめてぇ」

桃代は太腿の裏側に男のシンボルを押しつけられて、握った拳を振りまわして暴れたが、乳房をやさしく揉まれて首筋を舐められるとイヤでも息が荒く弾んできて、なぜか身体に力が入らなくなってくる。

「そんなに抵抗するなよ。……じゃあさ、チ×ポを入れても痛くないように、もう少しいじってやるからな」

進はタンポンすら入れたことのない桃代のアソコの穴に指を1本挿入した。たぷたぷと柔らかなオッパイを揉みしだきつつ、蜜壺の入り口を指でこねまわす。熱く絡みついてくるヒダを刺激してやると、奥のほうから粘り気のあるヌルヌルした液が溢れてくる。

「いやいやっ、あひぃ」

美少女は大事なところに異物感を感じ、眉根を寄せて裸身をくねらせた。

「桃代、オマ×コが濡れてきたぞ。中はすごい濡れぬれで、外まで溢れてきちゃったぜ。ほら、この音が聞こえるだろ」

進はわざと卑猥な音がたつように桃代の割れ目をかきまわした。進の指が恥ずかしい谷間を往復するたびに秘唇と指がこすれてくちゅくちゅとみだらな音楽を奏でる。

「そんなこと言わないでよ。あたし、おもらしなんかしてないのに……」

「こいつはおしっこじゃなくて愛液っていうんだ。大事なところをいじられて感じちゃう

と愛液が出てきて、ペニスを簡単に入れられるようになるんだって」
説明する進の男根は完璧に勃起して、肉茎の表面にはところどころ青筋が浮きあがってる。歯の根が浮くようなウズウズ感で体がブルッと震えた。
「おまえ、オレのを入れて欲しいんだろ。だからこんなに濡れちゃったんだ」
「ちがうわよぉ。は、くうっ……。もうやめてったらぁ」
桃代は理性とは逆の反応をしてしまう自分の身体に羞恥を感じて、美しい頬を朱に染めた。脇からのばされた幼なじみの浅黒い手は、秘密の花園を執拗にこねまわしている。なんとかして逃れようと暴れるのだが、桃代の髪の毛はフックに絡まったままで、そのうえ両脚を進の太腿に挟みこまれているので、まったく身動きが取れない。
「もういいな」
進は桃代の頬をつかむと股間の剛直を見せつけるように腰をクイッと突きだした。進の極太棒は黒い密林の中からぬうっと屹立している。
桃代は「ひいっ」と叫んで急いで目をそらしたが、その網膜には勃起したペニスの色と形がくっきりと焼きついてしまった。
黒々としたシンボルの太さは約4センチ。長さは17センチほどもあり、亀頭が左右に大きく張りだしている。極太チ×ポは桃代の視線を感じたのか、さらに硬くヘソまで反りか

えって表面に浮きあがった青筋をピクピク脈打たせる。
「そうだ。こいつをアソコにぶちこむ前に、たっぷり舐めてもらおうか」
「そんなの無理よ。髪が絡まってるんだもの」
「無理なもんか。ほら、こうすればいい」
進は桃代のロングヘアをフックから簡単に取りはずしてしまった。宙吊りになっていた桃代の身体が支えを失って進のほうへ倒れこんでくる。
桃代は両腕で剝きだしの乳房と股間を押さえて文句を言った。
「やだ、どうして早く取ってくれなかったのよ?」
「うるさいぞ。少し黙ってろよ」
進はタイルの上にしゃがみこんでいる桃代の髪をつかんで、美唇へペニスを突きつけた。同時に鼻をつまむと、桃代は息ができなくなっていやでも口を開いてしまう。
「ほら、舐めろよ」
桃代は進の剛棒を舌で押し戻しながらイヤイヤと頭を振る。
進はムッとして桃代の顎をつかみ、強引にあおむかせて涙に潤む瞳をじっと覗きこんだ。その双眼には強い気迫が満ちている。
「いいか、こいつがおしゃぶりできないなら、今すぐおまえのケツの穴にぶちこんでやっ

てもいいんだぞ」

「け、ケツぅ？　冗談じゃないわよ。そんなことしたら、お尻の穴が裂けちゃうわ！」

「肛門を裂かれたくなかったらフェラチオしろ」

「わかったわよ。舐めればいいんでしょ」

桃代は進の命令を絶対に拒否できないと悟ると、おずおずと両手をのばして半勃ちの巨根を手のひらで包みこんだ。可憐な唇を開いて亀頭を咥(くわ)えこもうとするが、すぐに気が変わって進にお願いする。

「ねえ、舐める前に洗わせてよ」

「ダメだ。このままおしゃぶりしないと、アソコの毛を丸刈りにしちゃうぞ」

桃代は慌ててキノコのような先端を唇に含んだ。男の匂いが口の中にむっとひろがる。一瞬むせて吐きだしそうになるのをこらえて、恐るおそる舌で舐めてみる。

進のペニスは表面がツルツルと滑らかでカリ首は深くくびれており、まるでソーセージのような舌触りだった。ふくらみきった太竿はたどたどしい舌技に反応して、表皮がはち切れそうなほど硬く充実してくる。

「んぶっ」

桃代は男根が勃起して頬の内側を圧迫するのを感じ、当惑の表情を浮かべた。苦しげに

眉根を寄せて舐めていると、かすかに塩辛くて苦い味が口の中にひろがる。先走りの液がもれたのだが、桃代には原因が全然わからない。
「桃代って舐めるのがうまいんだな」
進は頬をすぼませて亀頭を吸いあげている桃代の肩をつかんで、強引に股間から引き離す。そのまま肩を突き飛ばすようにして桃代をタイルの上に押さえつけた。むっちりした白い太腿を小脇に抱えこんでビクビク脈打つ太幹の先端をクレヴァスに押しつける。
「だめっ。いやぁ〜」
桃代は怯えきった表情で幼なじみの顔を見あげた。進は整った顔に残忍な笑みを浮かべてじっと見降ろしている。
「こんなに濡らして誘っといて、今さらイヤはないだろ」
亀頭でクレヴァスをヌルヌルかきまぜられて、桃代は泣きじゃくりながら美唇を開く。
「お願いよ、バージンは恋人にあげたいの。だから、処女だけは奪わないで」
「本当にして欲しくないの？」
桃代は涙を流しながらこくっとうなずく。
「残念だけど、ここまできたらやめられないよ。桃代の処女はオレがもらう。いいな」
進はきっぱり宣言して剛直を桃代の秘孔へ突き立てた。その刹那（せつな）、乙女の肉門はバッと



鮮血を散らした。タイルの上に小さな赤い花がいくつも乱れ咲く。
「ああーっ、痛いーっ！」
桃代は大事なところに熱く熱した焼きごてを押しつけられたような激痛を感じ、叫び声をあげて裸身をのけぞらせた。タイルに両手をつっぱってずりあがろうとするが、進は太腿をがっしりと抱えこんで離そうとしない。剛直を根元まで挿入してしまおうと、深々とねじこんでいく。
「桃代のココは、すごくきついな。すぐに出ちゃいそうだよ」
進は狭あいな蜜壺の奥を剛棒の先でゆっくりこねまわした。太幹を締めつけられると疼くような快感が体中にひろがってくる。ゾクゾクと全身を震わせながら桃代の乳房を片手で揉みしだいた。指の間に挟んだ美少女の乳首は愛撫に素直に反応して硬くしこってくる。
「ひっ、ひぃぃ～」
破瓜（はか）の痛みに美貌を歪め、桃代は屈辱の涙で頬を濡らした。処女を無理やり奪った進が殺してやりたいほど憎い。だが、力ずくで強姦されているというのに、肉体は彼女の理性とは裏腹に少しずつ快感を感じはじめていた。恐ろしく太い肉茎をはめられたままで敏感な肉芽をくじられると、破瓜の痛みを越えるほどの愉悦がこみあげてくる。
「たっ、助けてぇ」

桃代は熱い液で濡れそぼる狭間を岩のように硬い極太棒で深々と突きあげられて満足に息もできず、あえぐように声をもらした。その背中は弓なりにのけぞり、両肩と肘だけがタイルについている。肉厚の秘唇は蜜壺を出入りする剛直にまとわりつき、ぐちゅっぴちゅっとみだらな音をたてた。
「すげぇ、最高だぁ」
進は美しい幼なじみのウエストをつかんで激しく腰を振りたてる。
桃代の裸身はピンク色に染まり、霧のような汗で柔肌が潤んでいる。処女壺は挿入された異物をぎゅっと締めつけ、熱く潤んだ肉ヒダはねばっこく太竿に絡みつく。花奥を執拗に突きあげられるうちに、身体がバラバラに飛び散ってしまいそうなほどの快感が桃代の脳天を突き抜けていった。
「す、進っ……ふはあぁっ」
進は絶頂に達してぐったりとなった少女の身体を犯しつづけた。全身から玉のような汗をしたたらせ、荒く息を弾ませながら絶倫棒をピストンさせる。
「まだまだこれからだぜ」
片頬に笑みをたたえてグレープフルーツのような巨乳をわしづかみに揉みしだき、まだ抵抗感の残るヴァギナにタフな太魔羅をぶちこむ。

「ひぃ〜っ。はっ、はぁっ」

桃代は苦しげな息をもらし、乳房を揉みあげる手を振り払おうとする。だが、熱く痺れてしまった肉体は、幼なじみの凌辱をどうしてもやめさせることはできなかった。

「いっ、いやぁ〜！」

絶頂に昇りつめた直後だというのに、桃代の白い裸身はまたもやエクスタシーを感じてわなわなと震えてくる。下半身からぐったりと力が抜けていき、同時に下半身がジーンと重くなってくる。剛棒を激しく出し入れされるたびに、結合部から鮮血の混じったラブジュースがぐぷっぶぷっと溢れでた。

「た、助けてぇ。おかしくなっちゃうぅ」

桃代は大粒の涙をこぼして身悶えた。これ以上犯されつづけたのでは、身体だけでなく心までもバラバラに壊れてしまいそうな気がして、泣きながら進の腕にすがりつく。

二度目のセックスに夢中になっていた進は、無言のまま少女の花奥を突きあげていた。そろそろ射精してしまいそうな気配だったが、無理に息子をなだめすかして快感をむさぼる。

「ああっ、だめぇ〜っ！」

桃代はまたもや絶頂に達して大きなよがり声をあげた。ピンク色に染まった美しい裸身

は弓なりにのけぞり、身体中の細胞がシャンペンの泡のように弾けてゆっくりとろけていく。ヴァギナはひくひくとけいれんして男のシンボルを貪欲に吸いこもうとする。
「くっ」
キツキツの蜜壺にきゅうっと締めつけられて、進は不覚にも精液を噴出してしまった。まったりとした濃いスペルマが桃代の胎内にどぷどぷどぷっとぶちまけられる。
「ちえっ。もったいないな。もう出ちゃったか」
進は徐々に力を失っていくペニスを乙女の狭間から抜き取った。浅黒い肉茎の表面には処女血がところどころについている。残り汁をぴゅっぴゅっとふるい落とした。
「はふぅーっ」
肩で荒々しく息をしていると、桃代がいきなり殴りかかってきた。
「いってーっ！　なにするんだよ、危ないじゃないか」
「バカバカバカ……ふっ、ふぇぇぇ〜っ」
桃代は握りしめた拳で進の胸を叩きつつ、泣きだした。双眼から大粒の涙をポロポロこぼし、進をにらみつけながら悲しそうにしゃくりあげる。
「どうしたんだよ。気持ちよすぎてパッパラパーになっちゃったのか？　それとも、オレのチ×ポがデカすぎてアソコが痛むのか」

進は桃代の腕を離してバスタブの縁に座らせた。屈辱と興奮で真っ赤になっている美貌を覗きこむが、桃代は泣きじゃくるばかりで答えようとしない。
「なんだよ、なんで泣くんだよ？」
「進のバカぁ。わたし、初めてのエッチは恋人としたかったのよ。それなのに、進が強引に……」
桃代の白い内腿にはバージン喪失の印が点々とこびりついている。その血を見ると、進は冷静さを取り戻して真っ青になった。
進は桃代の裸身を両腕で抱きしめる。
「ごめんな。そんな格好の桃代を見たら、頭ん中がプチプチプチッと切れちゃって、ゴーッと燃えてきちゃったんだ。今まで、おまえのことは、勝ち気で生意気なやつだとしか思ってなかったのに、すごいグラマーで色っぽくて女らしいから……」
桃代はヒックヒックとしゃくりあげて、進の顔を見つめる。
「オレさぁ、なんか、桃代のこと、今まで以上に好きになってきちゃった。……まいったな。こんなこと言うつもりじゃなかったのに」
「あたしのこと、本当に好きなの？」
「うん。いつからかは、はっきりわかんないけど、前からずっと好きだったよ」

そのとたん、桃代の青白い頰に赤みが射してきた。美しい顔に笑みを浮かべて進に言う。
「バカね。最初からそう言ってくれたら、怒ったり暴れたりしなかったのに」
「ごめんな」
進は涙で濡れた桃代の頰にキスをしてやった。だが、桃代はそれだけでは物足りないのか、自分から本物のキスをせがんで唇を重ねてくる。
美少女の柔らかな朱唇を味わっていた進は、ギクッとして体を離した。
「しまった！　オレ、今日は日直だったんだ」
「本当？　それじゃ、早く登校しなきゃ」
「うん。おまえはどうする？」
桃代は真っ赤になってうつむいた。はにかみながら小さな声で返事をする。
「あのね、進のアレ、すごくおっきかったから、アソコがヒリヒリするの。だから今日は休んじゃう。進だけ学校にいって」
「わかった。じゃあな」
進は萎えても充分ビックな男根をぶらさげたまま、浴室を出ていった。

第6章　女子高生イケナイあるばいと

学校へ登校した進は、桃代と別れた時からずっとうわの空状態だった。
昼休み、教室の窓からグラウンドを眺めながらため息をつく。
グラウンドでは2年生の集団が円陣バレーをしていた。その中に姫野恵里香(ひめのえりか)の姿もある。
恵里香は三つ編みにした黒髪を踊らせ、スカートの裾をひるがえしてレシーブに走っていく。けれど白球の落下地点には間に合わず、途中で勢いあまってコケそうになり、クラスメートたちと笑い合っている。輝くような笑顔はとても楽しそうに見えた。
「ああ、恵里香さん……」
進はつぶやき、大きなため息をつく。
「なにシケたツラしてんだよ？」

声をかけられて振り向くと同じクラスの東城（とうじょう）が隣に並んできた。
「たとえばさ、好きな女がいるのに別な女とやっちゃうってのは、マズいよな？」
「やった？　おまえ、とうとう童貞捨てたのかよ⁉」
すっとんきょうな声を出す東城を、進は「しーっ！」ととめた。
「いつだよ？　相手は？　やっぱ、エッチって最高だろ？」
進は小声で律子とのことを説明した。
「年上のお姉さまにリードされて童貞喪失。……うーん、めちゃクソうらやましいなぁ。それで、なにが問題なんだよ？」
「だから、オレには好きな子がいて、それなのに他の女性と……」
「そんなの関係ないだろ。男ってのは、その気になれば好きでもない女とでもやれちゃうんだ。男の体自体がそういう仕組みになってるんだから、しょうがないじゃん」
「それはケダモノのすることだ。オレは好きな人としかやりたくないよ」
「基本的にはそれが正しい。しかし、基本は常に変化する。そして変化なき人生ほどつまらないものはないのだよ、進くん」
東城は神妙な顔つきで進に説明する。
「好きな女とやるのはとびきり最高。でも、つまみ食いほどうまいものはないぜ」

「それはそうかもしれないけど……」
進は納得しきれない顔でグラウンドにいる恵里香をじっと見つめた。
「進よぉ、おまえ、まだあいつが好きなのか？」
東城はアゴをしゃくるようにして恵里香を示す。
恵里香は進に見つめられていることなど全然知らずに、転がっていくボールめがけて子犬のように飛びついていく。ところが自分の足につまずいて思いっきり転んでしまった。制服のスカートがまくれあがって白い太腿とパンティが剝きだしになる。
「きゃー！　見た？　やだもう」
クラスメートに爆笑されて、恵里香はてへへっと笑いながら急いで立ちあがった。スカートのほこりを払うその頰は羞恥で真っ赤に染まっている。
「好きだよ」
進はボソッと答えた。
この高校に入学してすぐの頃から、廊下で時々見かける恵里香を好きになった。でも、幼なじみの桃代のことも好きだ。恵里香は進が片思いしていることを知らないが、桃代は進が桃代を好きなことをすでに知っている。
「おまえ、桃代も好きなんだろ。あいつと桃代の、どっちがいいんだ？」

東城に聞かれても、進には答えられなかった。進の心は風に踊る1枚の木の葉のように激しく揺れ動いている。
真剣に悩んでいると予鈴が鳴りはじめた。東城は自分の席へ戻り、進は恵里香が校舎の中へ消えてしまうのを見届けてから席に着く。
進は教科書を開きながら考えこんだ。
(本当に好きな女の子とセックスできたら、どんな気持ちになるだろう?)
いくら頭の中で想像してみても、恵里香の制服を脱がすと、そこには今朝見たばかりの桃代の裸身が出現する。桃代の手にあまるほど大きな乳房と、柔らかで弾力のある白い太腿。それに、桃代のアソコは最高だった。成熟しきった律子のアソコとはちがって、キツくて熱くてヌルヌルだった。進のペニスをぐいぐい締めつけて、絶頂を迎えてもなかなか怒張を解放しようとはしなかった。
(あの時のオレは条二兄ちゃんみたいにケダモノになってた。桃代の裸を見たとたん、やりたくてたまんなくなって、チ×ポが爆発しそうになった。兄ちゃんみたいには絶対にならないって決めてたのにケダモノになっちゃったのは、童貞を捨てたからなのかな?)
東城の言う通り、エッチをするのは最高に気持ちいい。でも、誰でもいいからエッチをして気持ちよくなろうとするのは、すごく悪いことのような気がする。

（これからは女の人に挑発されてもケダモノにならないように気をつけよう。ボクは本当に好きな人とだけセックスするんだ）

自分自身に言い聞かせて、今度は授業をまじめに受けようと気持ちを切り替える。ところが黒板の文字をノートに写そうとしていると、制服の右のポケットがプルプルと振動をはじめた。バイブ機能つきのポケベルが鳴っているのだ。

進は誰にも見つからないようにポケベルを引っぱりだしてメッセージを読んだ。

『タイヘンなことがおきたの。すぐＴＥＬして。モモヨ』

いったい「タイヘンなこと」というのはなんだろう？

進はソワソワしながら授業が終わるのを待った。チャイムが鳴ると教室を飛びだし、学校の裏門の側にある電話ボックスから飯村家に電話をかける。コール１回で桃代が出た。

「進？」

「桃代か。大変なことってなんだよ、子供でもできたのか？」

「バカね。大変なのは進のお兄さんなの。ついさっき、男の人たちがうちにきて、条二さんが仕事中に倒れたから弟さんの通ってる学校を教えてくれ、って聞かれたのよ」

「兄ちゃんが倒れたって⁉」

「そう。それで学校の名前と電話番号を教えてあげたんだけど、うっかりして病院の名前

を聞き忘れたの。あの人たち、たぶん進を迎えにいったんだと思うんだけど……」
桃代の話が最後まで終わらないうちに、進の背後でコンコンとノックの音がした。振り向くと背広姿の男が数人立っていた。男のひとりがガラス戸を開けた。
「佐久間進くんだね？」
「ええ、そうですけど、あなたたちは条二兄ちゃんの会社の人ですか？」
「会社の？　ああ、そうだよ。お兄さんが大変だ。わたしたちと一緒にきてくれたまえ」
進はその男がきのう条二を拉致(らち)した山本三平太だとは知らずに彼らのあとについていった。

☆

山本と名乗った男は、進をあるホテルの一室へ案内した。
「きみのお兄さんはこのホテルで開かれた会議の席上で倒れられて、そのまま意識がないんだ。向こうはいろいろとごったがえしているから、少しの間、ここで待っていてくれ」
そう説明して部屋から出ていったきりで、山本はなかなか戻ってこない。
進はイライラしながら部屋の中を歩きまわった。部屋にはシングルベッドと小さな机とイス、そしてトイレつきのバスルームの他にはなにもない。レースのカーテンがかかった窓からは隣の建物の壁しか見えなかった。

「兄ちゃん、だいじょうぶなのかな？」
ベッドの端に座って考えこんでいたが、意識不明だという条二の容態が気にかかり、ふと思いついてフロントへ様子を聞きにいってみようと立ちあがる。すると、進の動きを察知したかのようにドアがひとりでに開いた。
そのとたん、進は「あっ！」と叫んで体を硬直させた。開いたドアの向こうに、なんと恵里香が立っている。恵里香は学校の制服姿で手には学生カバンをさげていた。
「恵里香さん⁉」
不安そうな表情の恵里香は、進の顔を見るとなぜか安心してホッと胸を撫で降ろした。けれどすぐに不思議そうな顔つきになって進に質問する。
「ねぇ、なんであたしの名前を知ってるの？　あたし、あなたと同じ高校には通ってるけど、学年もクラスもちがうのに」
「いや、それは……。と、とにかく中に入ってください」
恵里香が部屋へ入ると後ろでドアがひとりでに閉まった。ふたりは部屋の中までいき、進はベッドに、恵里香はひとつきりのイスに腰を降ろす。
進は黙りこくったまま、前に座る恵里香の顔を見つめた。条二のことが心配だが、今はそれ以上に恵里香が突然ここへ現われた理由が気にかかる。

「姫野さん、どうしてここへきたんです？」
「あたし、アルバイトを引き受けてここへきたの。本当はこんなことは絶対にしないって心に誓っていたんだけど……」
恵里香は突然両手で顔をおおって朱唇を嚙みしめ、声を殺して泣きだした。
「どうして泣くの？　ボク、なにか悪いことを言っちゃったかな？」
「ううん。あのね、ひとつだけ聞いていい？」
「え？　なんですか」
「あたしにバイトを頼んだ人がね、あなたがあたしに片思いをしてる、って言ったの。そんなの嘘よね？　ううん、絶対嘘に決まってるわ。そうでしょ？」
「嘘じゃない。本当だよ！　ボク、本当は恵里香さんが好きだ。だから名前を知ってる。名前だけじゃなくて、恵里香さんの誕生日や血液型だって知ってるんだ」
進は思わず叫んでいた。両手をギュッと握りしめて立ちあがり、真剣な表情で目の前にいる女の子を見つめる。けれど、すぐに弱気になってシュンとうなだれてしまった。
「あ。しまった、言っちゃった。……すみません」
するると恵里香は泣き笑いの表情になって進に言いかえす。
「やだ、謝ったりしないで。……ああ。あたし、このバイトを引き受けてよかった」

「バイトって？」
当惑の表情を浮かべる進に、恵里香は涙で濡れた瞳を向けた。
「あなたとエッチをする、っていうバイト」
進は「えーっ!?」と叫んだきり絶句してしまった。興奮で胸がドックンドックン高鳴って自然とつばが湧いてくる。それを飲みこむとゴクッと喉が鳴った。
「今まで、肉体労働ならともかく、自分の身体を使ってお金を稼ぐなんてことは絶対にしない、って決めてたの。だけど、父さんが急に入院しちゃって、まとまったお金が必要になってしまったの。それで、すぐにお金をたくさんもらえそうな仕事をさがしていたら、男の人たちが放課後学校へきて、バイトをしないか、って言ってきたのよ」
恵里香は説明しながらセーラー服の赤いリボンを襟から抜き取り、前ボタンをはずしていく。
「待ってよ。恵里香さんは本当にボクとするつもりなの？」
小柄な美少女は緊張の面持ちでコクッとうなずきかえしてイスから立ちあがると、進のほうへゆっくり歩み寄ってくる。
「お願いだから、あたしのバイトに協力して。あなたが協力してくれないと、バイト料は1円ももらえないの」



もう童貞ではないとはいえ純情でまじめな進は、せっかく据え膳を用意されてもなんと答えて断わったらいいのかわからずに、どぎまぎしてしまう。
「そうだわ。なんなら、あたしがもらうバイト料の半分をあなたにあげてもいいわ。ね、それならいいでしょ？　お願い、あたしとエッチして」
恵里香は真剣な表情で進の手をつかみ、その手をはだけたセーラー服の胸もとへと導いていく。けれど進は彼女の手を逆に両手で包みこんで言った。
「こんな形で恵里香さんとエッチをするなんて、ボクは絶対にいやだ。お金が必要なら、ボクの貯金を貸してあげるから、そんなことは言わないで」
「無理よ。父さんの手術は日本一の名医と言われている人にしてもらうの。そのためには少なくとも50万円は必要だって言われたわ」
「げ！　ボクの貯金、そんなにないや」
「でしょ？　だから、こうするのが一番いいの。あなたがいやでなければ……」
恵里香はもう一度進の手をセーラー服の中へ持っていく。進は抵抗せずにブラジャーに包まれた恵里香の乳房をそっとつかんだ。
「ボクとエッチをしたら、恵里香さんはその人たちからいくらもらえるの？」
「30万円。もしもコンドームをつけないで最後までしたら、10万円加算してくれるって。

……ねぇ、もうそれ以上質問しないで。あたし、男の人とこんなことをするのは生まれて初めてなの。だからすごく恥ずかしくて……」
姫野恵里香は処女！
そう知ったと同時に、分身はカーッと熱く燃えてくる。しかし進は、グッと奥歯を噛み締めてかぶりを振った。両手で恵里香の肩をつかむと、なかば突き飛ばすように小さな身体を押しのける。
「ごめん。ボク、恵里香さんとはできないよ」
「えっ⁉ どうして？」
驚く恵里香をよそに、進はベッドから立ちあがった。
「よく考えてごらんよ。平凡な高校1年生のボクとエッチをするだけで40万円ももらえるなんて、変だと思わないか？ だいいち、ボクは山本って人から兄ちゃんが倒れた、って言われてここまで連れてこられたんだよ。……待てよ、もしかしたら、あれは真っ赤な嘘で、山本のやつ、ボクと恵里香さんをだましてるのかもしれないぞ」
「だますってどういうこと？」
「バイトを頼んだやつと山本は同一人物で、もしかしたらボクたちには内緒で、もっとすごく悪いことを企んでるのかもしれないよ。たとえば、どこかに隠しカメラがあって、ボ

クたちのエッチを裏ビデオにして通信販売しようとしてるとか……」
進は隠しカメラを見つけようと壁や鏡に指先を這わせる。夢にまで見た恵里香とのエッチが実際にできると思うと、舞いあがってしまいそうなくらいうれしいが、今の状況はあまりにも不自然すぎる。
「カメラの場所が見つからないな。かなりうまく隠してるみたいだ」
部屋を見まわしながら首をかしげる進の背中へ恵里香が飛びついていった。大柄な美少年を後ろから抱きしめて、背中へ頰を押しつけていく。
「お願い、隠しカメラなんかどうでもいいから、あたしを抱いて。病院の先生は現金で50万円持ってこないと手術はしない、って言ってるの。早くしないと父さんの命が危ないのよ！」
恵里香は進の背中に顔をうずめて泣きだした。病院にいる父のことを思うと、心配で心配で小さな胸が張り裂けてしまいそうだ。
「恵里香さん……」
進はかなり迷った。まだつき合ったこともない恵里香を抱くのはためらわれる。でも、恵里香はふたりの間に恋愛感情がなくてもセックスをするつもりでいる。それも父親の命を救うために。

「父さんが死んだら、あたしの家族は妹のミミナだけになっちゃうの。たしかに、高校生のあたしたちがホテルの部屋にいて、お金をもらってエッチをしようとしてるなんておかしすぎるけど、なんとかして父さんを助けたいの！」

進は涙ながらに訴える恵里香の気持ちがまるで手に取るようによくわかった。数年前に事故死した両親のことを思いだすと、あの時の悲しみ、そして不安が胸にこみあげてくる。条二とふたり暮らしになった今も、時々寂しくてしょうがないことがあるのだ。

「わかったよ」

とだけ言うと、涙で濡れた瞳で自分を見つめている恵里香の身体を抱きあげてベッドへ運ぶ。白いシーツの上に仰臥した美少女のセーラー服を脱がせながら、キスをするふりをして耳もとにささやいた。

「本当は恵里香さんとエッチがしたいけど、ここではしない。でも、あいつらには、本当にやってるように見せかけてやるんだ。それならいいだろ？」

「そんなことができるの？」

「できるさ。この部屋のどこかにある隠しカメラはきっとベッドを狙ってる。その死角を突いてやれば、必ずうまくいくよ」

進は自信たっぷりにうなずいて、恵里香のセーラー服をやさしく剝ぎ取っていく。

恵里香は清楚な白いブラジャーとパンティをつけていた。143センチと小柄なわりには乳房が大きく、ヒップも形よく発達している。

「恵里香さんって、きれいな肌をしているんだね」

「そうかしら？」

恵里香は子猫のように可愛い顔を赤らめて、恥ずかしそうにまつ毛を伏せて横を向く。その白い首筋にキスをした。

「学校であなたの写真は見せてもらったけど、もしかしたらすごくおっかない人で、あたしなんかメチャクチャに犯されちゃうかも、って心配だったの。だけど、やさしそうな人でよかった。それに、あたしなんかに片思いしてくれてたなんて、すごくうれしい」

「好きだよ。ボク、恵里香さんが好きだ。好きだから恵里香さんを大切にしたいんだ」

進はかすれた声で告白して、白いブラジャーを取り去った。剝きだしになった少女の乳房はもぎたての白桃のように先がツンと尖って淡いピンク色をしていた。小さな乳首は指で軽く転がされただけで芯が硬くしこってくる。

恵里香は敏感な突起を愛撫されると、軽く結んだ朱唇の奥で「んんっ」と声をあげた。男の熱い視線は恵里香の柔肌をジリジリ焦がしていく。ただ見られているだけで身体中から力が抜けてしまいそうだった。

「まいったな。恵里香さんがあんまりきれいだから、これ以上触っちゃいけないような気がしてきたよ」

「触っていいのよ。佐久間くんだけは、あたしの身体中に触ってもいいの」

進は熱っぽい声でささやく恵里香のパンティを脱がせた。ほっそりした太腿をつかんで左右に開き、淡い恥毛の生えた秘部へ指先を潜りこませていく。恵里香の花びらはしっとりと露を帯びて指にまとわりついてきた。

「ボクに恵里香さんの大事なところを見せて。もう少し脚を開いて欲しいんだ」

「そんなの恥ずかしい」

と言いながらも、恵里香は自分から白い太腿を開いていく。進はゴクッとつばを飲んで美少女の狭間（はざま）に視線を集中させた。

「これくらいでいい？」

「ん？　ああ」

恵里香のアソコは朱色がかったサーモンピンクをしていた。進が指で肉厚の秘唇を割りひろげると、包皮が引っぱられてクリ×リスが露出する。その下にほんの小さな割れ目のような尿道口、そして処女孔がある。

「そんなにじっと見ちゃイヤ」

恵里香は羞恥で頬を赤くして甘い声をもらした。両脚を閉じてしまいたいのだが、そうもできずに身体をモジモジくねらせる。
進は秘唇を片手でひろげたままで、人差し指の先を剝けあがった肉芽へ押しつけた。薬を肌へすりこむように指腹で円を描いていく。
「う、くっ……。な、なにしてるの?」
「恵里香さんのクリ×リスを可愛がってるんだ。こうすると、すごく気持ちよくなってくるし、チ×ポをここの穴へ入れる時に痛くないように、愛液が出てくるんだよ」
「えっ、入れるの?」
「だいじょうぶ、マネだけさ」
進は調子に乗ってクリ×リスを転がしながら唇を秘裂へ押しつけた。尖らせた舌の先で蜜壺の入り口をえぐりあげると、少女の青白い内腿に震えが走る。
「くふん。やだ、なんだか変な感じ。背中がゾクゾクしてきちゃう」
「よかった。愛液が出て恵里香さんの大事なところが濡れてきたよ。こうすると気持ちがいいんじゃない?」
美少年は小さな秘孔から溢れてきた透明な蜜をすくって、敏感な肉芽へとこすりつけていく。そのとたん、恵里香の内腿は大きくわななないてつま先がピンと反りかえった。

「あんっ！　いやぁん、そんなことされたら頭の中がぼうっとして、すっごく変になってきちゃう。もうそれ以上いじらないでぇ」

進は花芯を転がしながら、膣口へ指を1本挿入してみた。処女孔はそれ自体が淫靡な生き物のように収縮して、進の人差し指をじわっと締めつけてくる。

「恵里香さんのオマ×コ、熱くてヌルヌルだね」

「そんなエッチなこと言わないで。あたし……あぁん。もうダメぇ」

進は可愛いよがり声をあげる美少女を見つめたまま、グッと奥歯を嚙みしめた。人差し指のかわりに股間で爆発しそうになっているペニスをヴァギナへ入れてみたい。だが、今ここで処女を破れば、自分を信用してくれた恵里香を裏切ることになる。

進は心の中でため息をつき、熱いぬかるみの中から指を抜き取って、もうろうとしている恵里香の肩をそっとつかんだ。

「恵里香さん、起きて」

「なあに？　どうするの？」

「お尻をこっちに向けて、ここを両手でつかんで。そうしたら最後までしてあげるよ」

進は恵里香の身体の向きを変えると、彼女の両手をベッドのヘッドボードへかけさせた。

「痛くないとは思うけど、痛かったら言ってね。すぐにやめるから」

恵里香の耳もとで説明しながら制服のズボンとトランクスを脱いで、みごとな太竿を剝きだしにする。ペニスはもはや準備が整っていて、亀頭の先割れから涙のような透明なしずくが1滴溢れていた。

「それじゃあ、はじめるよ。脚を少しだけ開いて」

ベッドの上に両膝をついてヘッドボードを握った恵里香が、言われた通りに拳ひとつぶんだけ太腿を開く。進は恵里香の細くくびれたウエストをつかんで、白い太腿のつけ根に亀頭を押しつけた。

「あっ……、なに？」

「素股（すまた）っていって、太腿の間にチ×ポをはさんで刺激するんだ。ちょっと見ただけじゃ、アソコの中に入ってるかどうかなんてわかんないはずだよ」

進は恵里香のヒップの上の平らな部分に片手をあてがって腰を進めていく。極太チ×ポを太腿の間へズブズブ埋めこんでいくと、恵里香が突然「きゃーっ！」と叫んだ。

「やだやだ、あたしのお股から変なものが生えてき……もがっ、ふ、んうぐっ」

進は驚いて暴れだす恵里香の朱唇を右手でふさいで耳もとにささやいた。

「しっ！　びっくりしないで。これ、ボクのだから。ねえ、少しだけ動かしていい？」

おとなしくなった恵里香は、真っ赤になってコクンとうなずく。

進は素股エッチを開始した。半円を描くように勢いよく反りかえった太竿の上側をクレヴァスへ押しつけるようにして抽送する。美少女の秘孔から溢れだした液は、秘唇と勃起がこすれ合うたびにニチュニチュという恥ずかしい音をたてる。

「あぅ！　す、すごくだめぇ。そんなことされたら、お腹の奥がゾクゾクするよぉ」

恵里香はブルッと身体を震わせて、疑似セックスをつづける進に訴える。

「こうすると、どんな感じ？　気持ちいい？」

「あぁん。身体の中を電気がピリピリピリッて走って……。あふぅん。くふっ」

進は白い背中をのけぞらせる恵里香の乳房を背後から揉みしだく。柔らかな内腿とぬらついた谷間の感触は蜜壺を貫いているのと同じくらい気持ちよくて、ついつい腰を激しく前後に振ってしまう。

「ひんっ。ピリピリするぅ。足、カクカクしてぇ、力入んないよぉ」

進の亀頭が恵里香の剝けたクリ×リスをこすりあげる。そのたびに美少女は小柄な裸身をわななかせ、苦しげな息を繰りかえした。

「いやぁっ、こ、こんなの恥ずかしいっ」

恵里香は涙で潤んだ瞳で自分の身体を見降ろしていた。こんもりと盛りあがった白い乳房は浅黒い手で揉みしだかれ、恥丘のすぐ下からは色黒の極太ペニスが出たり引っこんだ



りしている。谷間の奥から強張りが突きだすと、まるで自分のアソコから男根が生えてきたように見えて、頭の中がクラクラする。
「そんなにこすっちゃイヤぁ。ゾクゾクするのぉっ。みうっ、あん、んんんんーっ」
自然ともれてしまう自分のよがり声に羞恥を感じた恵里香は、わななく唇を嚙みしめて身体の奥から湧き起こってくる快感を必死にこらえる。
進はそのことに気づくと、美少女の乳房を揉みたてながらほっそりした首筋に唇を押しつけた。柔肉をついばむようにキスを繰りかえし、耳たぶを軽く嚙むと、恵里香の身体に新たな震えが走った。
「ん、くうぅーっ」
「恵里香さん、声を聞かせて。ボク、恵里香さんの声でイキたいんだ」
「ダメぇ。恥ずかしいぃ……あん。くふっ、ひぃん」
恵里香は生まれて初めて経験する女の悦びに、三つ編みにした髪を振り乱してイヤイヤとかぶりを振る。けれど、ついに嚙みしめていた朱唇を大きく開いてあえぎ声を放った。
「あう……。はっ、くふぅん。も、もぉ、ダメぇ。バラバラになっちゃうぅ！」
「恵里香さん！」
太いペニスの表面で狭間を突きあげられた瞬間、恵里香は絶頂に達して裸身を激しくけ

いれんさせた。進につかまれた乳房も柔肉の乗った太腿も小刻みにわなないて、あっと言う間にとろけていく。青白い内腿の間から突きだした進の極太棒の先端からは、白濁の液がビュクビュクッと吹きだした。

「恵里香さん……」

進は荒々しく息をしながら、ぐったりした恵里香の裸身を両腕でギュッと抱きしめた。激しく脈打つ首筋に唇を押しつけ、キスをしてから小さな声でささやきかける。

「最高だよ。恵里香さんの身体、すごくよかった」

恵里香は絶頂の余韻でもうろうとしていたが、その言葉を聞くと表情を強張らせた。

「そんなふうに言われたら、あたし、まるで自分が『そういう商売』をして生活している人になったみたいな気分だね。悲しくなってきちゃう」

「ごめん。ボク、そんなつもりじゃなかったんだ。大好きな人とセックスすると、すごく気持ちがいいし、そのうえ幸せになれる。そう言いたかっただけなんだ」

進は恵里香の裸身から両手を離してベッドの端へ力なく座りこんだ。

「でも、恵里香さんはボクのことは好きでもなんでもないんだよね。ボクが勝手に恵里香さんを好きなだけで、なんとも思われてはいないんだ」

すると、恵里香は弾かれたように進のほうを振りかえった。

「そんなことないわ。最初はなんとも思ってなかったのは事実よ。けど、佐久間くんと話してたら、あたしもなんとなく……」
途中まで言いかけて、真っ赤になってうつむいてしまう。
進はそんな恵里香の心をなんとかして読み取ろうと、じっと顔を覗きこんだ。恵里香は真剣な視線に気づいて、恥ずかしそうに顔をあげた。
「本当はね、父さんのことはすごく心配だけど、もしあなたが変な男性だとわかったら、バイトをするのはやめて帰っちゃおうと思ってたのよ」
「そうか、そうだったんだ……」
恵里香を見つめる進の顔にうれしそうな笑みがひろがった。
「ボクはきみのことを知ってる。でも、きみはボクのことを知らない。だからボクとつき合ってくれないか？」
「えっ？　あなたとあたしがつき合うの？」
「そう。ボクも本当のことを言うと、さっきはすごく恵里香さんの中に入れたくてたまらなかった。でも、約束は約束だから、きみがボクを好きになってくれるまで待つことにしたんだ。……つまり、これからつき合ってみて、恵里香さんがボクを好きになってくれたら、その時はきっと恵里香さんの処女をもらう。そう決めてもいいよね？」

見つめ合うふたりの顔が、まるで夕日に照らされているように真っ赤に染まる。照れて先に目をそらしたのは恵里香だった。
「そうね。考えてみてもいいかも」
「考えるだけじゃなくて、つき合ってよ。ね？」
進はいつになく強気に言い張って、恥ずかしがる恵里香の両手を握りしめる。
「わかったわ。あたし、バイトがあるからデートはあまりできないかもしれないけど、それでもいい？」
「いいよ。ボクたち、同じ学校だから昼休みとかに会えるし、来月の学校祭は一緒に校内を見てまわれるよね」
進が笑顔になってあれこれ計画を立てはじめたところへ、ドアがノックされた。
「誰だろ。兄ちゃんの会社の山本って人かな？」
「あたし、シャワーを使わせてもらうわ」
恵里香がバスルームに入るのを見届けてから、進はドアを開けた。
「佐久間くん、遅くなってすまない。お兄さんは病院に運ばれたそうだ。今すぐ向こうへいくことにしよう」
「え？　今すぐですか？」

進はバスルームのほうをちらっと見た。その視線に気づいて山本が問いかける。
「なにか都合の悪いことでもあるのかね？」
「いえ、別に。……あの、さっき、高校生の女の子がこの部屋にきたんですけど、知ってますか？」
「高校生の女の子？　そんな人は知らないが、なにかあったのかな？」
「え？　いえ、知らなければ別にいいんですけど……」
「それでは、そろそろ夕方のラッシュアワーで道が混みはじめるから、急いでいこう」
廊下を歩きだした山本のあとを、進は慌てて追いかけた。目の前をいく山本が知らないとなると、恵里香を進のもとへ差し向けたのは誰なのだろう？
（恵里香さんにバイトを頼んだのは誰なんだ？）
進は胸の中でつぶやき、部屋へひとり残してきた恵里香を心配しつつも、ホテルの駐車場に停められていた山本の車に乗りこんだ。

第7章　誘惑のボディコンOL晴海

条二は自分の部屋そっくりに改造された実験室の中でフテ寝をしていた。
ベッドの上に横たわり、壁際のテレビをじっと見つめている。画面には弟の進の姿が映っていた。画面の中の進は、背中を向けて美少女を抱きしめている。
「うわー、なんてバカなやつなんだ。なにが『きみがボクを好きになってくれるまで待つ』だよ。進のやつめ、せっかくの据え膳……それもめったにお目にかかれない処女を食えねぇようじゃあ、まだまだガキもいいとこだな」
ぶつくさ文句を言ってリモコンのスイッチを押すが、どのチャンネルを入れてみても進と美少女のいる部屋しか画面に映らない。
「つまんねぇなぁ。こんなのばっかしかよ」

リモコンを床に投げだしてベッドへあおむけにひっくり返る。マジックミラー仕様になったブラインドは朝から降ろしたままだった。

「あーあ。やってらんねぇな。狭苦しい部屋の中に閉じこめられて、種馬みたいに次から次へといろんな女を犯しつづける生活なんて、考えただけでもうんざりするぜ」

文句タラタラでふてくされていると、ノックの音がしてドアが外から開いた。

「お待たせ〜、ディナーよぉ！」

部屋に入ってきたのは晴海だった。鮮やかな濃いレモン色のボディコンスーツに白いエプロンをかけて、両手には銀色のトレーを持っている。指1本すら動かそうとしない条二の顔を覗きこんでニッと笑いかけた。

「ずいぶんしょぼくれた顔をしてるのね。もっと元気出しなさいよ」

「そうは言うけど、ここへきてから、出せるもんは全部出しちまったからな。もう元気も鼻血もザーメンも出ないよ」

「またまたぁ。絶倫のくせにぃ」

晴海は明るくキャハハッと笑って、条二の肩をパシッと叩く。

「おまえ、なにしにきたんだよ？」

「もちろん、やることはひとぉ〜つ！　よ」

力強く宣言すると、条二の側へムチムチした身体を横たえる。添い寝するような格好になって条二をじっと見つめた。
「あのあと、あたしがどうなったか知りたくない？」
「あのあとって？」
「コンピュータ室から連れだされたあとよ。……あたしね、知らない男の人たちを相手に3Pしちゃったの。最初は診察台の上で強制的にお股をひろげられて、お尻とアソコをローターでいじめられたの。あたし、すごく濡れてきちゃって、エッチな声も出ちゃったのね。そしたら、あたしたちのエッチな姿をビデオに録画してた男の人も興奮しちゃって、ふたりでかわりばんこにビンビンになったモノをあたしの下のお口に出したり入れたりしたのよ。んもぉ、激しくて大変だったんだから」
「ふーん。それで？」
晴海は浮かない返事をする条二に、プッとふくれてみせた。
「もちろん何度もイッたわよ。レイプされてるみたいですごく感じちゃったんだもん。……ねぇ、あたしからこんな話を聞かされたら、ちょっとは熱くなってこない？　絶倫くんがムズムズするとか、背中がゾクッと興奮してくるとか……」
「だから言っただろ。やりすぎてすっかり枯れちまったんだよ」

晴海は「うそ〜!?」と叫んでベッドから跳ね起きた。
「そんなのウソよ。こうなったら、条二がまだまだ熱くなれるってことを、あたしが証明してあげるわ」
「おまえ、いつの間にオレを呼び捨てにできるような身分になったんだよ？」
「今日からよ」
生意気な口調で答えて、晴海はさっき部屋へ持ちこんだトレーの端からはみだしている細い鎖を抜き取った。
「本当はこんなことしたくなかったんだけど……」
意味深長な言葉をつぶやき、退屈そうにあくびをしている条二の手首をつかむ。
「ん？　あ？　なにぃ!?　なんでこんなことするんだよ？」
晴海は油断していた条二の両手を頭上のヘッドボードへ素早く縛りつけてしまった。そして、身悶える条二に向かって微笑んでみせる。
「条二のペニスを勃たせて射精させたら、20万もらえることになってるのよね」
「20万だぁ？　冗談じゃないぞ、あのブラインドはマジックミラーになってて、あいつらが一日中この部屋を覗いてるんだ。それでもやるってのかよ？」
「やるわ。臨時ボーナスはいつでも大歓迎だもん」

条二は手首に絡みつく細い鎖を引きちぎろうと両手に力を入れたが、銀色の拘束具は肌に食いこむばかりで緩みもしない。

「くそっ、離せ。おまえがいくら挑発しても、オレは絶対チ×ポを勃たせたりしないからな！」

「本当かしら？　怪しいもんだわね」

晴海は挑戦的な笑みを浮かべて、条二の足もとで仁王立ちになりエプロンを脱いだ。その下に着ている濃いレモン色のボディコンは、まるでゴムのように身体にぴったりと張りついていた。おかげでふくよかな乳房の形も、くびれたウエストから優美なカーブを描いているヒップのラインも手に取るようにわかってしまう。大きなふたつの胸の頂上にはかすかに乳首の形が盛りあがっている。

「男の人って、じかに触らなくてもペニスはちゃんと勃つんですってね？」

黙りこむ条二へ見せつけるようにボディコンの裾へ片手をかけて、半分以上剝きだしになっている太腿を少しずつ露出させていく。

「女の裸なんて見飽きてるでしょ。でも、条二の目の前でこんなことをした人は、ひとりもいないんじゃない？」

晴海は伸縮性のあるボディコンをウエストまでゆっくりとまくりあげた。薄い小麦色を



した太腿のつけ根にはオレンジ色のスキャンティが張りついている。細い股ぐりの部分から恥毛が数本はみだしていた。
「いいこと教えてあげましょうか。あたしね、時々、会社のおトイレに入ると、アソコがぐしょぐしょに濡れてることがあるの。別にエッチなことを考えたりしたわけじゃないのに、透明でネバネバした液が溢れだしているのよ」
ハスキーがかった声で説明しながら、スキャンティの中へ右手を入れていく。どうやら条二の目の前でオナニーをするつもりのようだ。
「そんな時は、エッチな液をクリ×リスに塗りつけちゃうの。こんなふうに……」
晴海は両脚を肩幅と同じくらいまで開いて、秘唇を指で割りひろげ、膣口からとろりと溢れているみだら汁を指ですくって、剝きだしになった肉芽へとこすりつけていく。
「おまえさぁ、窓の外から覗かれてるってのに、それでもオナニーするつもりかよ?」
「するわ。だって、こうすると気持ちいいし、うまくいけばお金ももらえちゃうんだから一石二鳥じゃない。ふっ……。はぅん」
晴海の顔には恍惚の表情が浮かびあがり、ボディコンに包まれた乳首はプクッと尖って薄い布地を突き破りそうになっている。喉をのけぞらして秘裂をこすりたてると、くちゅくちゅという音とともにスキャンティの股の部分が濡れて変色していく。

「やっ、やぁあっ。ふはぁん。んもぉ、どんどん溢れてきちゃう」
条二は両手を拘束されてベッドに仰臥したまま、自慰にふける晴海の姿を凝視した。女が恥ずかしそうにオナるのを見ているうちにつばが湧いてきて、ゴクッと喉が鳴る。股間の息子も元気を取り戻してムクムクふくらんでいく。
晴海のソコはオレンジ色のスキャンティに邪魔されて見えなかったが、恥ずかしい音と股間の湿った部分を見れば、中がどうなっているかは簡単に想像がついた。
「こんな……こんなの、感じちゃう。はふぅ。はっ、あァん」
晴海は甘くかすれた声を放ち、潤んだ瞳で条二を見降ろした。かなり感じているらしく両脚がガクガクけいれんしている。
「ふぅぅ。もう立っていられないわ。条二のは勃った？」
「いや、全然」
「本当かしら？」
晴海は形のいぃヒップを見せつけるようにしてベッドから降りた。そして、冷蔵庫の中を物色して条二のもとへ戻ってくる。その手に栄養ドリンクの小瓶を持っていた。
「ちょっと待っててね、飲んじゃうから」
もう一度仁王立ちのポーズを取り、腰に片手をあててドリンクを一気に飲み干す。まる

で風呂あがりのオヤジのように「ぷはーっ」と息を吐いて、瓶の口をペロッと舐めた。
「それじゃあ、最後の手段よ」
晴海はすんなりした脚を片方ずつあげてスキャンティを脱ぎ、条二のウエストのあたりをまたいで立つ。そうすると彼女の大切なところが条二の目前で丸見えになった。
「ほらね、もうこんなになっちゃった」
秘唇を指でかき分けると、クレヴァスを満たしていた透明な蜜がネットリと糸を引いて溢れ落ちる。淫蜜は条二の太腿に落ちてパジャマのズボンを濡らした。
「すげぇ、濡れぬれ」
「そうよ。こんなの見せつけられても、黙っていられる？」
条二は「う〜ん」とうなった。たしかに自慢の太竿はかなり元気になってきた。だが、見知らぬやつらの監視の中でセックスをするのは、あまり気が進まない。
「しょうがないわねぇ」
晴海はあきれたようにため息をつき、もう一度瓶の口を舐めた。フェラチオをするように細口を朱唇で咥(くわ)えてたっぷり濡らすと、今度はそれを恥丘の奥へと持っていく。
「ちゃんと見ててね」
「おい、待てよ」

条二が見ている前で、晴海は瓶の細口をオマ×コの穴へゆっくり挿入しはじめる。
「あふっ、冷たぁい」
眉根を寄せ、小さな悲鳴をあげながらも、直径3センチ、長さ5センチほどの瓶を膣口で呑みこんでいく。
「ああっ、は、恥ずかしいっ」
晴海は片手の指でクリ×リスを転がしながら、秘孔へ突き立てた小瓶をゆっくりローリングさせはじめた。つるつるした瓶の口は熱くとろけきった肉ヒダをえぐり、Gスポットを直接刺激する。
「くっ、くひいっ！　あっ、あは……はうっ。気持ちいいわっ。あん、ああん！」
美貌のOL、晴海はあられもない声をあげて絶頂へと昇りつめていく。
条二は濡れそぼる女の秘部に瓶が出入りするのを見ているうちに、全身の力が太腿のつけ根へ集中していくのを感じた。
「だめ、もう、イッちゃうーっ！」
そのとたん、ピシピシピシッと裏スジに緊張が走って、ペニスが硬く太く張りつめる。
条二の極太棒は完全にそそり勃ってパジャマの股間をピラミッド状に盛りあげた。反射的に起きあがろうとしたが、両手を縛られているので身悶えることしかできない。

「頼む、オレを自由にしてくれ」
　絶頂に達した晴海は立っていられなくなり、ブラインドに片手をついて身体を支えた。狭間から抜き取った瓶をピンク色の舌でペロリと舐めあげ、唇を尖らせて条二の顔をうっとり見つめて妖艶に微笑む。
「うふふ。自由にして欲しいのは条二じゃなくて、この子でしょ？」
　まだ荒く乱れている息で乳房を大きく弾ませつつ、条二の両脚の間にひざまずいて股間のピラミッドをパジャマの上から軽く撫でた。
　条二は鋭く反応して、「うっ」とうめき声をあげる。
「あらぁ？『オレは絶対勃たせたりしない！』って断言したのは誰だったかしら？」
「オレだ。今日はもう勃たないと思ってたのに、おまえが瓶なんか使ってオナニーするから、勝手におっ勃っちまったんだぞ」
「ふうん、そうなの」
　晴海はじらすようにパジャマの上から強張りを撫でまわす。条二は小虫が肉茎を這うような、むずがゆい感触を味わいながら、眉根を寄せて言った。
「晴海、1発犯らせてくれよ」
「どうしようかなぁ？　あたし、もうイッちゃったしぃ」

条二は足もとの美女をにらみつけた。
「臨時ボーナス、欲しくないのか？」
「あらやだ、忘れてたわ。それじゃ、条二のおペニス、いただいちゃおっかな」
「おい、ズボンを脱がす前にこの鎖をほどいてくれ」
晴海は顎の下に右手を軽く当てて考えこんだ。
「三平太とかいう人が言ってたけど、条二ってヌクヌル原人なんでしょ？　その鎖をはずしても、あたしにひどいことをしたりしない？」
「ああ、約束する。そのかわり、たっぷりイカせてやるぜ」
うれしそうにムフフと笑った晴海が鎖をほどいたとたん、条二は晴海の身体へ素早くつかみかかっていた。
「あんっ！　やだぁ、乱暴にしないでぇ」
「おまえなぁ、こんなにうまそうな濡れぬれマ×コを見せつけられて、おとなしくしていられるような男なんかいるわけねぇだろ」
「でもっ、やだやだ、服は破かないでぇ」
晴海の悲鳴も空しく、条二は大きな手で女体をおおうボディコンを力まかせに引きちぎった。小麦色に焼けた肌を舌の平らな部分でていねいに舐めあげながら、すっかり濡れそ

ぼっている秘花の中へ指を挿入していく。
「あくっ。そんなにかきまわしちゃイヤぁ」
「オレの目の前でクチュクチュやったくせに、指くらいでヒィヒィ言うなよ」
「だって、あふん。はっ、はあぁん」
条二は上気した顔であえぐ晴海のウエストをつかんで、分厚い胸に抱き寄せた。赤ん坊をダッコするように膝の上へ座らせて、半開きになった朱唇を舌で犯す。
「まいったな。晴海がこんなにスケベではしたない女だとは想像してもみなかったよ」
「そ、そんなこと言っちゃイヤ。あんっ。もうこれ以上かきまわさないでぇ」
条二はヒクヒクしている蜜壷から指を抜き取り、かわりにそそり勃った強張りの先端を突きつける。晴海の細腰をつかんで宙へ浮かせ、パックリと開ききった陰口へ極太棒を突き立てた。
「ああーっ！　だ、だめぇ、すごく奥まで入ってきちゃ……くはぁーっ」
晴海は柔らかくカールしたロングヘアを振り乱して、条二のたくましい肩を両手でつっぱねた。けれど、20センチの巨砲は膣の奥へ奥へと突き刺さってくる。
「痛っ……。ああ、もういやぁ」
「イヤとかダメとか言いながら、ずいぶん深々と咥(くわ)えこんでくれるじゃないか。もう半分

以上入っちまったぞ」
「だ、だって……、ああん、も、もう入らないぃ」
　晴海は双眼から涙をこぼし、苦しげな声をあげて身悶える。青筋の立った巨根は秘花を貫き、その先端は子宮の中まで到達しかけている。
「お願い、助けてぇ」
「これ以上入れて欲しくなかったら、自分で身体を浮かせるんだな。そうすりゃ、少しは楽になるはずだ」
　晴海は条二の首へ両手をまわして身体を少し持ちあげた。ガクガクする両脚に力を入れて大きく開き、脱糞スタイルを取ると、根元まで突き刺さった極太棒がほんの少しズルリと抜けて息をするのが楽になってくる。
「あ……ああん。どうすればいいのぉ？」
「このまま好きなように動いてみろ。ケツを振るのは得意だろ？」
「そんなことない……ひいっ。や、やだぁ、すごっ……あはん。はああっ」
　晴海は条二に抱きついたままで腰をくねらせはじめた。深々と突き刺さっている怒張が充血して熱くなっている膣壁の中でうねり、大きな亀頭は指すら届かぬ場所をグイグイとえぐりあげる。

「はあぁっ。あん、やぅっ。す、すごいぃ。頭ん中……くらくらっ。ひいぃん」
条二は晴海の動きを助けるように細くくびれたウエストを片手でつかんで上下にユサユサ揺すりたてる。
「あっ、おおっ。ダメぇ、いくっ、ああーっ！」
赤く剝けあがったクリ×リスを太いペニスの幹でこすりたてられると、晴海はついにエクスタシーに達して大きな声をあげた。小麦色の裸身をビクビクけいれんさせて条二の胸にぐったりもたれこんでいく。
「なんだ、もうイッたのか」
ところが、条二の息子はまだ絶頂を迎えていない。条二はひとまず気絶した晴海をベッドに横たえ、まだひくついているヴァギナから怒張を抜き取った。そして、床に落ちていた細い鎖を取りあげて、完全に巻きあげたブラインドに引っかける。つづけて晴海を窓ぎわまで運んでいって両手首を鎖で拘束した。
「ん……。ああ、なんなの、これ⁉」
手首に鋭い痛みを感じて、晴海は意識を取り戻した。視線を巡らせて自分自身を見ると、その裸身はYの字を描くように窓の前へ吊りさげられている。窓の向こうには数人の学者たちが並び、それぞれノートを握りしめたまま硬直して条二たちを見つめていた。

「やだ、なんでこんなことしたの？」
肩越しに問いかけると条二は裏スジを見せつけて反りかえっている太竿を輪にした指でしごきながら答えた。
「おまえ、バックから犯られるのが好きだろ。そのまま犯してやるから、頭デッカチのあいつらにたっぷり見せつけてやれよ」
条二は両腕に巻きついた鎖をほどこうとする晴海の尻たぶを両手でかきわけた。透明な液でヌルヌルしているクレヴァスを剝きだしにして巨大な亀頭を突きつける。
「だめっ。ああ、いやあーっ！」
羞恥に頰を染めて絶叫する晴海の秘唇をバックスタイルで一気に貫く。美女の熱いぬかるみは、条二の極太棒をパックリ咥えこんだ。
「おおっ。オレのチ×ポをうれしそうに締めつけてくるぞ」
「イヤイヤ。鎖が痛いのぉっ！」
晴海は泣きながら艶やかな背中をのけぞらせた。
「窓に片足を乗せてみろ。そうすれば少しは体重がかからなくなる」
言われた通りにすると、たしかに手首への食いこみは緩くなる。だがそのかわりふたりの結合部はすっかり丸見えになって、窓の向こうの男たちの顔色がサッと変わるのがわか



った。
「ああ、み、見られてるぅ」
「いーじゃないか。見られるとうれしいんだろ？　でなきゃ、こんなにぐいぐい締めつけたりはしないよな」
「そんなことないってば……ああ、イヤ、ダメぇっ」
晴海は頭を左右に振って身をくねらせる。条二が後ろからペニスを抽送すると泡立つような快感が次々と生まれて四肢へとひろがり、頭の中が真っ白になってくる。見ず知らずの男たちに視姦されながらのセックスは、気絶してしまいたいほど恥ずかしくてたまらない。それなのに、身体中の神経がいつもより敏感になっていて、大きな声をあげずにはいられないほど乱れよがってしまう。
「おおっ。あっ、ひいいっ。イクぅっ。あっ、ダメぇ」
「まだまだ」
条二は晴海の細いウエストと張りつめた乳房をつかんで極太ペニスを律動させる。女の熱い肉壺は甘やかな匂いのする蜜をにじませながら太幹を締めつけ、しぼりあげる。その動きは妖しいほど巧みだった。
「オレがチ×ポを出し入れするのに合わせて肉ヒダがグニグニ絡みついてくるな。こんな

に感度のいいオマ×コはめったにないぞ。あきれるくらいスケベで貪欲なマ×コだぜ」
恥ずかしい言葉を吐きかけられても、晴海にはもう言いかえすだけの元気はなかった。巨大なバナナのように硬く反りかえった巨根で花奥を何度も突きあげられて、その激しさに持ちこたえられずに、しだいに窓へもたれかかっていく。すると充血してプクッと尖った乳首が冷たいガラスにこすれて痺れるような快感が湧き起こる。
「ひいっ、ひっ、あうぅ……」
「おっ？　なんだか締めつけが前よりよくなってきたぞ。……そうか、あいつらが見てると思うと、うれしくていつもよりよけいに感じちゃうんだな？」
条二の言葉は真実だった。
晴海は極太ペニスをピストンされるたびに何度も昇りつめ、裸身をガクガクけいれんさせている。白衣姿の男たちの食い入るような熱い視線は晴海の全身へ針のように突き刺さり、羞恥をますますつのらせる。恥辱の涙でかすむ目を閉じてみても、男たちの獣欲に駆られた顔やもっこりとふくれあがった股間は目の奥にくっきりと焼きついていた。
条二は調子に乗って晴海のアヌスへ指を１本こじ入れた。
「あひっ！　そ、そこ、ダメぇ」
晴海は激しく腰をくねらせ、その弾みで小さな菊のツボミがイタズラな指をいましめる

ようにキュウッと締めつける。
「ダメとか言ってるけど、ケツの穴も感度いいじゃないか」
条二は人差し指をつけ根までアヌスに挿入して、熱く火照った直腸の壁をぐにぐにかきまわす。
「くあぁっ！　や、やあぁっ」
晴海はあまりの心地よさに裸身をゾクゾク震わせてせわしなくあえぎつづけた。美麗な顔は涙とよだれでびしょびしょに濡れてしまっている。
「も、もう、だ……うぐうーっ！」
晴海が再び絶頂に達した瞬間、蜜壺はひときわ大きく収縮して突き刺さった剛棒を激しく締めつけた。
条二は「うわっ！」と叫ぶと、太幹にねっとり巻きついてくる膣ヒダの奥へ向けて熱い樹液を放った。
「おい、気絶したのか？」
問いかけても、晴海はぐったりしたまま返事をしない。条二は晴海の手首から鎖をはずし、その裸身をベッドへ横たえさせた。
窓の向こうの男たちはあっけに取られたような顔で条二の動静を見守っている。

「あいつら、AVよりハードなプレイを見せつけられて、さすがに絶句しちゃったようだな。みんな欲求不満そうな顔だぜ。ははは、いい気味だ」

条二は射精後の解放感に酔いしれつつ、両手を頭上へあげて大きくのびをする。四肢の筋肉の緊張がほぐれて全身が柔らかくなっていった。

「あーあ。好きなタイプの女とやる時は、少しくらい見られてても平気なんだがなぁ」

もしも三平太がどこからか牝ゴリラのような女を連れてきてセックスさせようとしたら……と思うと、背筋がゾッと冷たくなる。

「あの記事は本物だったのね?」

かすれた声が聞こえて振りかえると、ベッドの上の晴海が条二を見つめていた。

「記事って、なんのことだよ?」

「さっき持ってきたトレーの上に雑誌があるから、取ってきて」

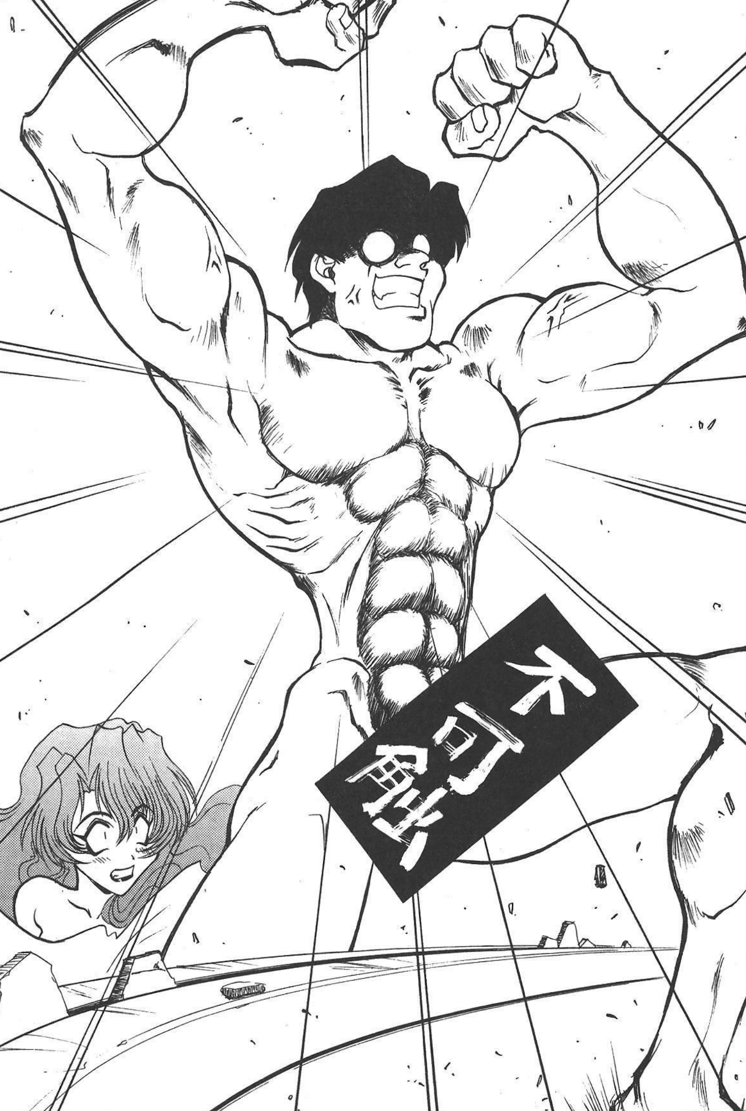
まだ身体に力が入らないらしく、晴海は寝そべったままで言った。条二から薄っぺらな写真雑誌を受け取ると、角を折ってあったページを開いてみせる。

記事のタイトルと写真を見た瞬間、条二は両目を皿のように見開き、ポカンとした表情になった。

「『世界で一番危険な男!?』……なんだ、こりゃ!? どうしてオレの写真がこんな雑誌に

載ってるんだよ!?」
雑誌のほぼ1ページ全部が、条二の上半身を写した写真だった。隠し撮りをしたにしてはかなり鮮明で、荒削りでハンサムな横顔がはっきり見て取れる。その横に『狙った女は百発百中! ヌクヌル原人の子孫はこの男!?』というサブタイトルが印刷されている。
条二は記事をざっと読むと驚いた顔で晴海を見た。
「この雑誌、全国発売じゃないか」
「ええ。条二がヌクヌル原人の子孫だってことは、日本に住んでる人ならほとんどみんな知ってると思うわ。雑誌だけじゃなくて、普通の新聞やスポーツ誌にも1面トップで大きく載ってたし、テレビのニュースや奥様番組なんかでも放送されたのよ」
晴海は毛布で裸身を隠しながら言葉をつづける。
「たしかAP電で扱われて世界中にも報道されたから、条二は今や地球規模の有名人よ。きっとそのうち、条二のためにインターネットのホームページとかファンクラブができたり、アメリカの有名な雑誌からも、条二の顔を表紙にしたい、って言ってくるかもね」
「ま、マジかよ」
条二は窓の外へ視線を向けた。白衣の学者たちは記事を見た彼の反応を注意深く見守っている。

「条二が本当にヌクヌル原人の子孫だってことが証明されたら、上野動物園のパンダのオリの隣に特別の観察室を建設してそこへ住まわせるんだって。バス、トイレ、キッチンつきの素敵な部屋で、図面はもうできてるって三平太博士が言ってたわ」
条二の顔が真っ赤に染まった。握りしめた両手がブルブル震えだす。
「ふざけんなよ。オレを珍獣扱いしようったって、そうはさせないからな！」
「条二？　ねえ、どうしたの？」
ただならぬ気配を感じて晴海が身体を起こしたとたん、条二は側にあったイスを素早くつかんで思いきり窓へ叩きつけた。
ガッシャーン！
強化ガラスが粉々に砕け散り、その向こうに立っていた学者たちが「わああーっ！」と悲鳴をあげる。
「条二！」
条二は晴海の声を背中に浴びつつ、壊れた窓を長い脚でまたいだ。怒りに駆られ、ランランと光る双眼で逃げまどう男たちを見まわしながら外部へつづくドアへと走りだす。
「待て！」
貴重なヌクヌル原人の子孫を捕まえようとヘッピリ腰で飛びかかってくる学者を片腕で


不可解

なぎ倒し、目前であんぐりと口を開けたまま棒立ちになっている男を突き倒す。ドアに鍵はかかっておらず、体当たりをかましてぶっ飛ばして一気に外へ走りでた。

「待てーっ！」

「条二！」

佐久間条二はあっと言う間にその場から姿をくらました。

「くそう、ヌクヌル原人め。なんて逃げ足の速いやつなんだ」

晴海はぶち破られたドアを呆然と見つめつつ、ひとりの学者の悔しげなつぶやきを聞くともなく聞いていた。

第8章　思いだした秘密の記憶

進は不安そうな顔で佐久間家のリビングを歩きまわっていた。
ときどき電話を見つめるが、病院から帰宅してから、まだ一度もベルは鳴っていない。
「兄ちゃん、だいじょうぶかな?」
あのあと山本の車で病院へいってみると、条二はホテルで倒れた時から意識不明のままで、念のためMRIで脳の断面図を撮影したがどこにも異常はなく、今はICUに入っているとのことだった。
「いくらベッドが足りないって言っても、ICUに入れられるなんて変だよな。それに、弟のボクが面会にいったのに、会わせてくれないなんておかしいよ」
どう考えてみても不思議なことばかりだが、病院の職員や山本を疑うわけにもいかず、

自宅へ戻って病院から電話がくるのを待ちつづけている。
時刻はもうすぐ7時になるところで、進は自分が空腹なことに気づいて冷蔵庫の中を覗きこんだ。牛乳のパックを見ると童貞を捧げた律子の顔が脳裏に浮かんできた。
律子は予定通り荷物をまとめて自宅へ戻ったらしく、玄関には靴がなかった。律子に会えなくなるのはちょっと残念な気がして小さなため息をつき、冷凍庫にあったエビドリアをレンジに入れてスタートボタンを押す。
ソファに座ってテレビのスイッチを入れると、ちょうどN×Kの全国ニュースがはじまった。ショートカットの若い女性が一礼してからトップニュースを読みあげる。
「まず最初に、日本最古の人類と言われているヌクヌル原人の子孫が発見されたニュースからです。仏蘭西(ふらんす)大学古代人類学教授、山本三平太氏は昨日、ヌクヌル原人の子孫を発見ならびに捕獲したとの報告書を学会へ提出しました」
画面が切り替わって男の写真が映しだされた瞬間、進は飲みかけの牛乳をぶはーっと吹きだしてしまった。
「に、に、兄ちゃん!?」
ブラウン管いっぱいに映っているのは条二の顔だった。女子アナは冷静な表情でニュースをつづける。



「山本教授は平成5年に発掘されたヌクヌル原人の化石と、その遺伝子を持つ子孫の写真並びに生体データを本日公表しました。報告書によるとヌクヌル原人は現在までに発掘されている洪積世の人類より数十年前に、H県のヌクヌル地方に生存していた模様です」

「兄ちゃんがヌクヌル原人？　じゃあボクは？　弟のボクもヌクヌル原人なのか？」

画面は次のニュースに切り替わったが、進は呆然としたままで、両目がテレビに釘づけになっている。

「たしかに兄ちゃんはペキン原人みたいにゴツい顔だし、体格もいい。それに乱暴で力が強くて、エッチが得意だ。いや、エッチがじょうずかどうかなんて関係ないか。あれ？そういえば、どっかで『ヌクヌル原人』って言葉を聞いたことがあるぞ。日本史の授業じゃないな。あれはたしか……」

ソファへあおむけにひっくり返って考えこむ進の脳裏に、先週の金曜日のことが鮮明に浮かびあがってきた。

☆

金曜日の午後10時、1台のタクシーが夜の街を駆けていく。

条二は後部座席にどっかともたれて、隣に座る律子の横顔をじっと見つめていた。

律子は目にもあでやかな赤いチャイナドレスを身につけ、髪はおだんごに結いあげた姿

でシートにゆったりと座っている。鮮やかな紅を掃いた唇はしっとりと光沢を帯びて、誘うように薄く開かれている。Ｅカップで95センチの乳房は赤いシルクを突きあげるようにして盛りあがり、脂がほどよく乗ってムッチリした太腿の上に、パーティ用のバックといさっき親せきの結婚式の披露宴でもらってきたケーキの小箱が置かれている。

彼らは律子の姉の結婚式に出席してきたばかりだ。

条二はひとりだけへべれけ寸前まで酔っぱらって、すっかり上機嫌になっていた。ねっとりと這うような目つきで中国娘に変身したイトコの輝くような美貌に注目している。いつもは理知的な律子だが、服装のせいか雰囲気がガラリと変わって、今夜はとても色っぽい。

律子は条二の視線に気づいて、目尻のあがった黒い瞳を向けた。

「どうかしたの？」

「ん？　いや、別に……。今日のリッコはずいぶんきれいだな」

ふたりは小さい頃から仲がよく、互いに『リッコ』、『ジョージ』と呼び合っていた。

「あら、わたしはいつもきれいよ」

律子はツンとして言いかえし、また前を向く。

「なぁ、おまえ、ひょっとしてノーパンか？」

「なに言ってるのよ。バカね」
「そうか。正直に答えないんなら、その身体に聞くまでだな」
条二は目にもとまらぬ早業で律子を後部シートに押し倒した。唇を重ね、舌を絡めて甘く香る液を吸いあげながら、片手をチャイナ服のスリットに這わせる。
「んうっ。な、なにするのよっ⁉」
「兄ちゃん、どうかしたの？」
助手席にいた進は後ろを振りかえって、あんぐりと口を開けたまま硬直してしまった。よりによってタクシーの中で、条二が律子に襲いかかっている。
条二は学生の頃から女遊びが激しくて、しょっちゅう自宅へ女の子を連れてきてエッチをしていた。
進は条二と部屋が隣り合わせなので、そのことをよく知っていたが、兄が毒牙を剝きだしにして女に挑みかかる姿を見るのはこれが初めてだ。獣欲に駆られた条二はいつもの兄とはちがい、まるで別人になってしまったように見える。
進は後部座席で揉み合うふたりの姿を呆然と見つめるしかなかった。
「いやだったら！」
律子は声高に叫び、身体の上へのしかかってくる条二の胸を両腕で押し戻した。手のひ

らで肉厚の胸板に触れると、彼の心臓の鼓動がじかに伝わってくる。激しく高鳴る男の鼓動は押しつけた指先から律子の全身にひろがっていった。
「やめて！　ジョージったら、酔っ払ってるんじゃないの？」
「そんなにスケベな太腿を見せつけられたら、悪酔いしてメロメロになっちまうぜ」
「なによっ。飲みすぎただけでしょ。もぉやめてったら！」
条二は狭いシートの上で揉み合いながら、律子の太腿の谷間へ強引に右手を突っこむ。思った通り律子はノーパンで、彼女の抵抗を封じようとして、軽くカールした恥毛を指で引っぱった。
「痛いっ！」
律子は悲鳴をあげて、剝きだしになった白い太腿をよじらせた。
「ダメよ。これ以上は絶対ダメ。へんなことはしないで」
「残念だな、オレ、へんなことをするのが大好きなんだ」
条二は抵抗をつづける律子のやや薄めのビラビラを左右にかきわけて、しっとり湿っている花奥に指を這わせる。円を描くように膣口の周囲をこすりあげつつ、包皮の下で眠っている尖った芽を指腹でえぐりたてた。
「……あっ。はっ、はひぃ」

律子の秘唇はまるで男の愛撫を待ちわびていたようにねっとりした液をもらしはじめた。香水とミックスされた牝蜜の香が一気に車中に充満する。
「……んーたまんねぇな。いい女の匂いがプンプンしてきたぜ」
「はぁん。ダメよ」
律子は甘く息を弾ませて身悶えた。秘孔の周囲をじらすように指でなぞられると下半身がゾクゾクしてきてたまらなくなってくる。条二は律子が敏感に感じる場所を素早くさがしだして責めたててくる。
「イヤよ。お願い、こんなトコでしないでぇ」
律子はうわずった声をあげて抵抗した。けれど、その言葉とは裏腹にムッチリした身体が火照ってきてたまらない。アソコの奥がヒクヒク勝手にうごめいてしまい、硬く勃起した男根の激しい突きあげを欲しがりだす。
「ああっ、も、もうっ。ひぃい」
「いい気分になってきただろ。そろそろ前菜を食わせてやるぜ」
条二は熱く潤う女の穴に2本まとめて指を出し入れした。すでに勃起した逸物は期待と興奮でカーッと熱くなっている。
「待ってろよ、太いのたっぷりぶちこんでやるからな」

「だめぇ、そんなことしないで。条二のバカぁ！」

条二をとめる方法を必死に考えている進に、運転手が困ったような顔で言った。

「ちょっとお客さん、車の中で変なことをされちゃ困るよ。あんたのお兄さんなら、頼むから早くとめてくれよ」

「おじさん、あんなの、とめるなんてできないよ、ボク」

条二はサカリのついたライオン同然にすっかり弾みがついていて、ちょっとやそっとじゃとめられないほど暴走している。律子の柔らかな身体を片手で押さえこんだまま、ズボンとトランクスをひとまとめにずりさげた。

「リッコ、気絶するまで嬲(なぶ)ってやるから覚悟しろよ」

条二の巨根は完全に勃起して股間から天を向いてそそり勃っていた。拘束を解かれて自由になったペニスは亀頭が左右に大きく張りだして、先割れからたらたらと先走りの液をたらしはじめる。

律子は透明な液が太腿にしたたり落ちたのを感じ、ビクッとして条二の腕をつかむ手に力をこめてイトコの巨体を押し戻そうとする。

「ダメよ。そんなことしたら、ジョージとは絶交だからね」

「情事と性交？　おう！　これからたっぷりしてやるからな」

条二は真剣な表情できっぱり言い放ち、律子のむっちりした太腿を抱えあげた。腰の位置を調整して、ぬらぬらした液をもらしている陰穴に剛棒の先を押しつける。
「いくぜ」という声とともに、極太ペニスが膣口にぶちこまれた。
律子は「あうっ！」と声をあげてのけぞった。
「ああっ、ふ、太いぃ。太すぎるわあっ！」
条二は狭い後部座席のシートに片膝をつき、律子の両脚をつかんで自分の肩に乗せた。形のいいヒップをわしづかみにして、濡れそぼる秘孔へぐいぐいと亀頭をねじこんでいく。硬く勃起した巨根は熱く潤む蜜壺の中にずっぷり埋没した。
「ひいぃっ」
条二は悲鳴をあげる律子のウエストをつかんで激しく腰を前後させた。太幹にねっとりと絡みついてくる膣壁をこすりたてるように抽送すると、秘花はみだらな蜜を花奥からトロトロと溢れさせる。
「はっ、はっ、はぁっ、いっダメぇ」
律子は悩ましいよがり声をあげて両手を頭上のドアに押し当てた。ドアをつっぱねるように両手に力を入れて、たくましい剛直を突き立てられた下半身をくねらせる。ふたりの結合部はじゅくっぶちゅっと恥音をたてた。



「ひっ、いいっ。感じるぅ〜っ！」

条二は剛棒を突き入れたまま律子のチャイナ服を剝ぎ取り、Eカップのブラを破り捨てて豊満な乳房を剝きだしにした。柔らかな肉球を両手でわしづかみにつかんで荒々しく揉みしだく。

一方、律子はとうとう狭間からこみあげる快感に夢中になってしまい、ほっそりした脚を条二の腰に巻きつけてぐいぐい締めつけはじめた。腰を突きだすように振りたてると、条二の極太チ×ポに秘め貝の奥深くをえぐりあげられて目の前がまばゆく染まっていく。

「いいっ。もっとぉ〜っ」

条二のピストン運動はますます勢いを速め、信号待ちで停車したタクシーはゆさゆさと上下に揺れた。周囲に停まった他の車の運転手たちが不思議そうな視線を向けてくる。

「ああっ、あーんっ」

律子のヴァギナは我が物顔で出入りを繰りかえす男根を締めつけ、雄汁をしぼり取ろうとみだらな収縮を繰りかえす。

「うぉおっ。いいぞっ。絶好調だぁあーっ！」

「に、兄ちゃん、もうそれくらいにしたほうがいいんじゃないの」

恐るおそる声をかけた進を条二はジロッとにらみつけた。律子の乳首を指の間に挟みこ

み、巨乳を左右に揺さぶりながら揉みあげる。はち切れそうなほど勃起したペニスは、熱いぬかるみの中を激しく出入りして快感をむさぼりつづけていた。

「まだよっ。もぉすぐっ。いきそっ……ああーっ」

先に達したのは律子だった。ひときわ高い声をあげたと同時に、全身をブルブルわななかせてぐったりとなる。

「むうっ」

条二は低い声でうめいて太幹を締めつけてくる蜜壺の奥へ白濁したリキッドを放出した。弾む息を深呼吸して静めつつ、助手席でポカンとしている進に問いかける。

「さて、お次はおまえか？　それとも誰だ？」

進は「えっ!?」と聞きかえしたまま、再び硬直してしまった。

まだ酔いの覚めない条二は、情事の名残を瞳に色濃く浮かべたまま進と運転手の顔を見くらべる。

「せっかくオレが極太チ×ポでこいつのマ×コをいい具合にしてやったんだぜ。さっさと犯らねぇともったいないぞ。おい、どっちが先に犯る？」

「どっちって言われてもわかんないよ、ボク。おじさん、どうする？」

「勘弁してくださいよ。業務中にお客さんを犯ったりしたら警察に捕まっちまう」

「だよねぇ。兄ちゃん、そういうわけで……」
気弱な進が恐るおそる協議の結果を報告しようとすると、条二は「わーっはっはっは」と豪快に笑いだした。
「冗談だよ、冗談。さてと、おい、早いとこ家に着けてくれよ」
条二は運転手に命令して律子の顔を覗きこむ。
「オレのチ×ポをハメられたくらいで気絶するようじゃ、リッコもまだまだ子供だな。わははは……」
またもや豪快に笑いながら、律子の狭間から溢れてきたみだらな混合液を指ですくってクリ×リスへ持っていく。赤く充血した肉芽に指腹を押し当ててこするたびに、ぐったりと投げだされた律子の腕がピクピクッと震えた。
「なぁ進、おまえ、まだ童貞なのか?」
「え? あ……。うん」
素直な進は小さな声でうなずいた。
「そんなもんはさっさと捨てちまったほうがいいぞ。……そうだな、おまえはまだ童貞だから、処女とやるのはやめとけよ。もし失敗したりしたらヘタクソ呼ばわりされて、一生バカにされるからな。そうだ、最初は経験のある女にしろ。リッコみたいにマ×コの上等

な女を見つけてナンパして、女の犯しかたや弱点を教えてもらえよ。な？」
「な？　って言われても、ボク、女の人をナンパするなんてできないよ」
「だーから童貞は困るってんだよ。とにかく、リッコでもその道のプロでもいいから、さっさと童貞を捨ててこい。世の中にはオレたち男を気持ちよくしてくれる女がたくさんいるんだからな。犯らなきゃ損だぞ。わーっはっはっはっは」
「うぅん……」
律子は条二の笑い声で意識を取り戻した。ふと見ると、彼の手は大きくひろげられた太腿のつけ根にまでもぐりこみ、その指は包皮から露出した花芯をいじくりまわしている。そうと気づいた瞬間、条二と目が合った。
「ああんっ。ジョージったら、こんなことして許さないんだから」
そのとたん、条二は起きあがろうとする律子に抱きついていった。
「リッコ、今までずっと言えなかったけど、オレ、おまえのことが前から好きだったんだ！」
「ちょっとジョージ、なにバカなことを言いだすのよ？」
「バカなもんか。オレはマジだ。マジでおまえが好きなんだよ！」
条二は芝居がかった口調で言うと律子を抱きしめ、背中を片手でやさしく撫であげなが

ら言葉をつづける。

「こんなことをしてすまなかった。でも、今夜のリッコは最高に魅力的で、どうしてもこの気持ちをとめられなかったんだよ！」

「ジョージ……」

条二は彼女の身体から両手を離すと、ションボリとうなだれる。

「オレなんか、救いようがないくらい粗野で野蛮でバカだもんな。きれいで頭のいいおまえには絶対不釣り合いだよ。だけど、今夜だけはおまえをオレのものにしたかった。オレだけのものに……」

「ジョージったら」

律子は思いがけない告白を聞いて、ポッと頰を赤らめた。今度は自分から条二に抱きついていく。

「もっと早くジョージの気持ちを打ち明けてくれればよかったのに。そうすれば、こんなタクシーの中じゃなくて、別の場所でゆっくりエッチできたのに……」

「はいはい。こんなタクシーが到着しましたよ」

タクシーの運転手がふてくされた顔でメーターを倒した。

「進、おまえ払っといてくれ。釣りはおまえにやるからな」

条二は急に律子を押しのけ、進に5千円札を1枚渡してドアの外へ飛びだした。
「あんっ、ジョージの嘘つきぃ！」
置いてきぼりを食らった律子は、不満げな顔で佐久間家の玄関に突進する条二の後ろ姿をにらみつけた。ウエストまでめくれあがったチャイナ服の裾を直し、破けた胸もとと腰の部分を片手で押さえてタクシーを降りる。
つづけて進が助手席から降りた。
「もうっ！　ジョージって、どうしてあんなにスケベなの？　ねぇ、進はまだ童貞なんでしょ？　ジョージも進も同じ両親から生まれた兄弟なのに、なんであいつだけがあんなに野蛮で絶倫なのかしら？……あいつ、実は現代人じゃなくてヌクヌル原人だったりして」
「ヌクヌル原人ってなに？」
「日本最古の原人よ。世界中のどこの学会にもまだ報告されていないけれど、そういう原始人が日本にはいたの。ふふっ。ヌクヌル原人のことが発表されたら、ジョージのやつ、すごく驚くわね、きっと……」

☆

そこまで思いだしたところで、進は電話のベルを聞いてソファから跳ね起きた。
「そうだ、律子姉ちゃんだ。律子姉ちゃんが条二兄ちゃんのことをヌクヌル原人って呼ん

だんだ！」
　思わず大声で叫んで電話の受話器に飛びつく。
「はい、佐久間です」
「佐久間か？　ニュースで見たぞ。おまえの兄貴、ヌクヌル原人なんだってな。おまえもヌクヌル原人なのかよ？」
　クラスメートの声を聞いた進は、「ちがうよ」と反論して電話を切った。するとまたすぐにベルが鳴りはじめる。
「もしもし？」
「菊花(きくか)でーす。ねぇ、佐久間くんがヌクヌル原人だって本当？　7時のニュースに佐久間くんのお兄さんが……」
　女友達の声を最後まで聞かずに受話器を戻し、その上に大きなビーズクッションをかぶせて両手で押さえこむ。ようやくベルの音が聞こえなくなった。
「兄ちゃんは……いや、兄ちゃんとボクは本当にヌクヌル原人なのか？　それならどうして兄ちゃんだけが『捕獲』されたんだよ？」
　いくら考えてみても、進は謎を解く鍵すら持っていない。
「進、いたのね？」

真後ろで声がして、振りかえると桃代が心配そうな顔でドアの前に立っていた。
「玄関の鍵が開いてたから入ってきちゃった。進は7時のニュース、見た？」
進は「ああ」とうなずき、ソファの上からジャケットを取りあげた。
「ねえ進。条二さんがヌクヌル原人なら、進もそうなの？」
「わからないよ。山本って人……そうか、あの人、やっぱりボクに嘘をついてたんだ。ボクをだましてホテルへ連れていって、恵里香さんにあんなことをさせたんだ」
進はようやく学校へ自分を迎えにきた山本と山本三平太教授が同一人物であることに気づき、くやしそうに唇を嚙み締めた。
「山本って誰よ。恵里香さんって誰なの？」
けれど進は桃代の肩をつかむと、不安そうな瞳をじっと覗きこんで言った。
「桃代、ボクはこれから兄ちゃんを助けにいく。この家にいたりしたら、きっとさっきのニュースを見たマスコミやヤジ馬が詰めかけてくるから、桃代は自分の家に戻ってじっとしてるんだ。いいね？」
「わかったわ。でも、進はひとりきりでだいじょうぶ？」
「ああ。なんとかする。兄ちゃんのために、なんとかしなきゃいけないんだ！」
桃代は緊張しきった進の表情を見て泣きそうになる。

「危険なことはしちゃダメよ。気をつけてね」
「わかった。じゃあな」
進は肩幅の広い背中を向けて、小走りに外へ駆けだしていった。

第9章　レズレズ♡アクシデント

条二を救うべく家を飛びだした進は、最初に仏蘭西大学へ向かった。
守衛の目を盗んで大学構内へ忍びこみ、まだ研究で居残っていた助教授のひとりを捕まえて山本三平太の自宅住所を聞きだすと、すぐに電車に飛び乗る。
車内の壁に設置されたテレビで『ヌクヌル原人の子孫発見される』というニュースが数分おきに流れていて、条二の写真が映るたびに進は冷や汗をかいた。
条二は父親似の猿顔だが進は美人だった母親似で、ふたりの顔のつくりはかなりちがう。それでも眼力のある人が見れば彫りの深い面立ちに共通点を見いだせるにちがいない。進はアポロキャップのつばをつかんで目深にかぶりなおした。
三平太の屋敷は閑静な住宅街の一角にあった。かなり裕福な家庭らしく、大きな屋敷の

周囲は広葉樹と高い塀でぐるりと囲まれていた。
散歩しているふうを装って屋敷のまわりを一周してみると、正面玄関の前にマスコミ関係者が数人張りこんでいる。どうやら誰かが帰宅するのを待ち伏せしているようだ。
「どの窓も真っ暗だけど、2階の奥の部屋だけは電気がついてるな。兄ちゃんはあそこにいるのかな？　もしそうなら、なんとかして中に入らなきゃ」
進は暗闇にまぎれて裏口からこっそり屋敷の中へ侵入した。横手にまわると真っ暗な窓へ肘をぶつけてガラスを割る。止め金をはずして窓によじ登り、部屋の中に転がりこんだ。
「簡単に入れちゃったぞ。ずいぶん無用心な家だな」
進の胸は高鳴っている。深呼吸して動悸を静めつつ、足音を忍ばせて廊下へ出た。
屋敷の中は外から見た時と同じように真っ暗だった。2階へつづく階段を登り、明かりがついていた部屋へ真っ直ぐ向かう。その部屋のドアはどうやら立てつけが悪いらしく、薄く開いて中から細く光がもれていた。
息を殺して中を覗きこんだ進は、驚いて声を出してしまいそうになった。
(どうしてここに律子姉ちゃんがいるんだ!?)
胸の中で誰にともなく問いかけながら、目を皿のようにして室内を覗き見る。
明るい部屋の中にはなぜか律子が立っていて、ベッドに座っている美少女になにやら話

しかけている。
（律子姉ちゃんって山本教授の知り合いなのかな？　あの女の子は姉ちゃんの友達？　待てよ、ふたりともなにを話しているんだろう）
進は息を殺し、ドアの隙間へ目をこらして耳をそばだてた。
「だいじょうぶよ。ここから逃げだしたって、ジョージの自宅にはマスコミが張りこんでいるし、どこにも隠れられる場所なんかないわよ。それに、これだけ報道されていれば、どこにいたって、きっと誰かが見つけてくれるわ」
ひどく不安そうな顔で律子を見あげているのは麻衣子だった。
「でも律子さま、これ以上変なことにならなきゃいいんですけど……」
「ジョージだってバカじゃないんだから、きっとここへ舞い戻ってくるわよ。それより、約束通り今すぐ報酬を払って欲しいわね」
するとと麻衣子は困って顔をうつむける。
「約束は約束よ。わかってるでしょ？」
律子は麻衣子の顎をつかんであおむかせ、栗色の瞳をじっと覗きこんだ。
「わかってます。でも……」
麻衣子は真っ赤になって律子から目をそらした。甘い予感が胸をよぎって心臓がドキド

キと弾んでくるのを感じつつ、まぶたをそっと閉じる。
「いい子ね、おとなしくなさい」
律子は、自分より4歳年上なのに、まるで年下のように見える麻衣子の頬に手をあてて、かすかにほころんだおちょぼ口へキスしていった。柔らかな花びらをついばむように吸いあげ、舌の先を尖らせて唇の輪郭をゆっくりたどる。
麻衣子は朱唇の合わせ目に生温かなものが侵入してくると、びっくりして舌を引っこめた。しかし律子が執拗に唇の裏を舐めまわすと観念したようにキスに応えて舌を絡めはじめる。ディープキスのあとで、ため息混じりにささやいた。
「ごめんなさい。わたし、女の人とするのは初めてなの」
律子を見つめる麻衣子の大きな瞳は、しっとりと潤みを帯びて光っていた。
「しっ。なにも言わなくていいの」
律子はとまどいの表情を浮かべている麻衣子をベッドの上にやさしく押し倒した。ほっそりした白い首筋に舌を這わせつつ、ボタンをはずしてニットシャツを脱がせる。サーモンピンクのブラの下から93センチの巨乳が飛びだした。
「麻衣子ちゃん、おっぱい大きいのね」
「そうでもないですぅ」

律子は人差し指を尖らせて乳房の表面をすうっと撫であげた。
「きれいな肌ね。白くてきめが細かくてすべすべしてる。とってもおいしそう」
小さな果実をつまむように乳首を指で挟むと、麻衣子は「あっ」と声をあげた。軽くつねられただけなのに、麻衣子の背筋を甘い震えがゾクッと走り抜ける。
「ふふっ。感度いいじゃない」
律子は麻衣子のくびれたウエストの上へ馬乗りになって、彼女の乳房を両手でつかんだ。乳首を手のひらで転がすようにしてDカップの巨乳をゆっくり揉みしだく。
「んっ……。はぁンっ」
麻衣子の裸身はじっとりと汗ばみ、白い頬が上気して桃色に染まっている。
「麻衣子ちゃん、乳首勃ってるわよ」
「いやあん」
麻衣子はいっそう真っ赤になって両目を閉じてしまった。
「こんなに感じやすいなら、アソコはもっと敏感かもしれないわね」
律子は身体をずらして麻衣子の乳房を指でなぞった。指先はじりじりと肌を焦がすように下腹へ進み、スカートのウエストまでくると、やさしく円を描く。
「ふあぁン。は、早くぅ」

麻衣子の身体は熱く火照っていた。ついに思うようにならない律子の指にじれったくなって、おねだりの声をあげてしまう。
「早くして欲しいの」
「なにを？」
麻衣子は羞恥で耳まで赤く染めた。けれども、律子はわざと不思議そうな顔をつくって見つめているだけだ。麻衣子は、とうとう観念して唇を開いた。
「麻衣子のアソコに触って。お願いですぅ」
すると律子は素早く身を起こして麻衣子の裸身から完全に手を離してしまった。
「アソコに触って欲しかったら、自分で服を全部お脱ぎなさいよ」
律子は唇の端に微笑をたたえて童顔の美女に命令した。茶色がかった律子の瞳は麻衣子に服従を求めている。
麻衣子は熱っぽく火照っている身体を動かしてベッドを降りた。律子にヒップを向けて膝上20センチのスカートを脱ごうとすると、
「ダメよ。ちゃんとこっちを向いて」
とクレームがついた。
麻衣子はベッドに座る律子の正面に立ってホックをはずした。しかし、ジッパーを降ろ

すのはどうしてもためらわれた。条二が相手の時は我慢してストリッパーまがいのことをしたが、これから裸になって律子とレズプレイをするのかと思うと、指も身体もすくんでしまう。

「どうしたの、できないの？」

律子の声はひどくクールで、うかうかしていると麻衣子を置き去りにして部屋を出ていってしまいそうだ。

麻衣子は両目をつぶり、思いきってミニスカートを脱ぎ捨てた。片手で乳房を、片手で股間を隠しておずおずと律子の顔をうかがう。

「これでいいですかぁ？」

「だめよ。パンティも全部脱ぐの。全部脱がなきゃエッチできないでしょ」

「全部なんてひどいわ。律子さまはお洋服を着てらっしゃるのに」

羞恥のあまり、麻衣子の首筋から胸のあたりまでが真っ赤に染まっていく。彼女は視線を伏せて身をくねらせた。

「文句を言うのはおやめなさい。おまえはあの実験を成功させるためなら、どんなことでもする、あたしの可愛い奴隷になると約束したでしょう？」

律子は、なおもためらいを見せる麻衣子の前に立った。それから、麻衣子の顎をつかん

で、唇の表面を舌でじっくりと舐めあげる。もう一度ディープキスをしながら少女の下腹に手を這わせた。太腿のつけ根に片手を挿入し、パンティの股布の上からクリ×リスがあるあたりを指腹でやわやわとこすりたてる。

「んんっ。はぁっ。はふぅ」

麻衣子は口中で動きまわる律子の舌に自分の舌を絡めて、甘い液を恐るおそる吸いあげた。律子の手でぽちゃぽちゃした巨乳を揉みしだかれると呼吸が荒く乱れてくる。

ドアの隙間からその様子を覗いていた進は、息を詰めて再び目をこらした。ふたりの女たちの痴態は進にはあまりにも刺激が強すぎる。これから律子たちがどんなことをするのかと思うとますます目が離せなくなり、条二のことなどすっかり忘れてしまった。

「あら、どうしたのかしら？　麻衣子ちゃんのアソコ、湿ってきたようよ。おもらしでもしちゃったのかしら」

律子は進に覗き見られていることなどまったく知らずに、残忍な笑みを浮かべて麻衣子の狭間(はざま)を嬲(なぶ)る指に力をこめる。

「ちがいますぅ。律子さまが麻衣子の大事なところをいじるから」

「あらあら、それじゃあ、もうやめましょうね」

「いやっ」

麻衣子は栗色の瞳を潤ませて律子にしがみついた。
「律子さまぁ、お願いですから麻衣子のアソコをもっといじって。パンティ脱ぎますからぁ」
麻衣子は蚊の鳴くような声でみだらなおねだりをする。律子から離れると片足ずつあげてランジェリーを脱いだ。小さなパンティを丸めて手の中に隠し、両目を閉じてほうっと吐息をもらす。
「思った通りだわ。とってもきれい」
律子は手をのばして麻衣子の乳房にそっと触れた。そのまま指を滑らせて、毛の生えていない恥丘の上をなぞっていく。
「足を開いて」
麻衣子は目を閉じたまま両脚をわずかに開いた。すぐに、律子の指の熱い感触を秘めやかな部分に感じる。
「ほらね、濡れてる」
人差し指で割れ目をえぐられたとたん、麻衣子はブルッと裸身を震わせて両手をきつく握り締めた。次に、包皮に守られた敏感な肉芽をくじられると腰のあたりがゾクゾクしてきて、立っていられなくなってくる。



「くっ……。り、律子さまぁ、麻衣子、もう……」
律子は麻衣子の白い太腿が震えているのを見て、微笑をもらした。
「もう我慢できないのね。ふふふ……」
ふたりの美女は糸の切れたあやつり人形のように重なり合ってベッドに倒れこんだ。
ドアの外で覗いていた進は、自慢の息子がズボンを突きあげて勃起しているのに気づき、眉根を寄せた。亀頭の先から溢れた我慢汁で濡れたトランクスが太腿にベットリ張りついている。
（いざとなったらこいつを武器にしてやるぞ！）
進は心の中でそう決めるとズボンとトランクスを脱ぎ捨てて、またドアの隙間へ片目を押しつける。
律子はあおむけになった麻衣子の丸い膝頭をつかんで、むっちりした白い太腿を菱形に開いた。美麗なピンク色の花びらを指でつまんで左右にひろげる。
「鮮やかできれいな色。まるで蘭の花のようね」
感嘆の吐息をもらすと麻衣子の両脚の間にしゃがみこんで、彼女の秘花を舐めはじめる。
「律子さま、そんなことしちゃいけないわ」
「どうして？」

「だって、汚いもの」
「そんなことないわ。麻衣子ちゃんのココはとってもきれいよ」
律子は片手を麻衣子の太腿にかけて両脚が閉じられないように力をこめた。そして、尖らせた舌の先で濃いピンク色の陰部をペロペロと舐めあげる。
「ああンっ」
充血してふくらんできた肉芽の先端を歯で軽く嚙まれると、麻衣子はゾクッと裸身を震わせた。
「ここが一番感じるのね。ほら、こんなに溢れてきたわ」
律子はそう言いながら鮮やかな色をした麻衣子の秘口を指先でなぞる。
「ひうっ!」
思わず声をあげる麻衣子の目前に人差し指を突きつける。その指には透明な液がねっとりと糸を引いてまとわりついていた。麻衣子は自分の膣から吹きだした液を見ると、赤面して目をそらす。
「いやっ。恥ずかしい」
律子は愛液まみれの指を、顔をそむけた麻衣子の唇へ強引に押しこんだ。
「んぐっ」

「指がきれいになるまで舐めるのよ」
麻衣子は泣きそうな顔で口中に挿入された指を舐めあげた。かすかに塩辛い味が舌の上にひろがっていく。閉じた目尻に涙をにじませて自分のラブジュースをすっかり舐め取った。
「これでいいですかぁ？」
「ええ、いいわ。麻衣子は舐めるのがじょうずね」
麻衣子はなんと答えたらいいかわからなくなってイヤイヤをする。
「ふふふっ。その表情、可愛いわよ」
律子はまたもや麻衣子の狭間(はざま)を責めにかかった。白い太腿の間に身体を割りこませ、勃起したクリ×リスを嚙み、舌先で転がすと、乙女の秘花はぬるぬるした誘い水を溢れさせる。麻衣子の裸身は肉芽をくじられるたびにピクッピクッと小さなけいれんを起こした。
「くうっ。律子さま、もう許してぇ」
「どうしたの？　はっきりおっしゃい」
麻衣子は欲情に潤みきった黒い瞳で答えた。
「アソコがウズウズするのぉ。身体中が熱くて、手足から力が抜けていくみたい」
「そう。それじゃあ、そろそろ指をあげるわ」

律子は満足そうな笑みを浮かべて、麻衣子の秘孔へ人差し指をゆっくりねじこんだ。充血して赤くなっている牝壺はぬらっとした蜜をたたえて律子の指を迎え入れる。

その瞬間、麻衣子は「あっ」と小さな声をあげて唇を嚙んだ。目を閉じると全身の神経がより過敏になって、肌を舐める律子の吐息すら気持ちよく感じられるようになる。

「ああっ。指が……律子さまの指が、あたしの中に入ってるぅっ」

麻衣子はうわずった声をあげてシーツを両手でつかんだ。花奥に潜りこんだ指は肉壁の表面を這いまわっている。熱くうるむ淫蜜にまみれた秘唇と指とがこすれ合ってヌチュッチュクッと恥ずかしい音がたつ。

「ほら、ここはどう？　どんな気分？」

律子が問いかけても、麻衣子はまるで熱に浮かされているかのように返事をしない。ぼうっとした表情のまま身をくねらせている。

「ふ……ふぁあっ」

律子は膣に入れた指を2本に増やし、より深々と突き立てた。同時に朱唇を恥丘のふもとに押しつけてピンク色のつぼみを吸いあげはじめる。

「ひっ。ひぃいっ！」

麻衣子は突如として大きな声をあげた。律子の指が彼女のGスポットを完全に捕らえた

のだ。強く弱くリズミカルに膣壁をこすりながら肉芽をしゃぶられて、麻衣子の裸身は高圧電流を流したようにビクッビクッとけいれんする。

「あひぃっ。ひぃぃぃ……」

麻衣子は大きく開いた唇の端からよだれをたらしていた。目の奥が真っ白に染まるほど激しい快感が、彼女の若く瑞々(みずみず)しいボディを震わせている。

「いいっ。ひぁ～っ」

麻衣子は豊満な乳房を突きあげてのけぞった。律子の指は麻衣子のGスポットを執拗にこすりたてる。

「ひぃぃーっ!」

と叫んだ瞬間、麻衣子は絶頂に達していた。

「あらあら。麻衣子ちゃんったら、お指しか食べさせてあげてないのに、もうイッちゃったの?」

麻衣子は激しいエクスタシーに意識を失いかけていたが、硬くしこった乳首を軽くつねられると両目を開いて律子を見た。

「律子さま、ごめんなさい。麻衣子、こんなにすごいの、初めてだったの。もう、気持ちよすぎて死にそうだったのぉ」

「あらそう。麻衣子ちゃんさえよければ、もっともっと気持ちよくしてあげるわよ」
するると、麻衣子は真っ赤に火照った頬を両手でおおってしまう。
「いやあん。もっとだなんて、堪忍してぇ」
律子は妖しげな微笑みを浮かべると、黙って服を脱いでいった。スポーティなポロシャツとスカートの下には、ボディスーツとガーターベルトが合体したような黒いランジェリー、そしてTバックパンティと太腿までのガーター用ストッキングをつけていた。
「こんなのはいかがかしら?」
肘の上まである黒の手袋をはめて、先が割れた本革のムチの両端を握って軽くしならせる。女王様のように傲慢な表情を浮かべて麻衣子を見降ろした。
「あたしの言う通りにしないと、涙が出るほど痛い目にあうことになるわよ。さあ、床の上へ四つん這いになりなさい」
「まさか、その鞭で麻衣子をぶつの?」
「そうよ。早く言われた通りになさい」
麻衣子は怯えながら床に手足をついた。律子は胸の谷間に隠しておいた細身のバイブを抜き取って、それを麻衣子の割れ目の中央へ突き立てる。
「ああっ! な、なにをお入れになったの?」



「バイブよ。こういうの、好きでしょ？　スイッチを強に入れてあげるから、このままで歩きなさい」
律子は高圧的な口調で命令を下すと同時に、麻衣子の背中へまたがってバイブレーターのスイッチを最強に入れた。
「ひーっ！」
「ほらほら、ちゃんと歩かないとおしおきよ」
律子はなかなか歩きだそうとしない麻衣子の丸いヒップをムチで軽く叩いた。
「ひいっ！　お、おやめください」
「ムチを食らいたくなかったら、さぼってないで歩きなさい」
全裸に剝かれた麻衣子は中学生のような童顔を朱に染めて床の上を這いまわった。狭間に挿入されたバイブの小刻みな振動は、先刻のレズプレイで燃えあがった官能の炎をますますあおりたてて、身体中を快感の波で満たしていく。鞭を受けるのがいやなばかりに、ガクガク震えて力の入らない手足で必死にハイハイをつづける。
「あらあら、麻衣子ちゃんったら、おもらしでもしたのかしら？　床のあちこちが濡れてしまったわよ」
「お、おもらしなんかしてません」

「それじゃあ床が濡れてるのはオマ×コから溢れだした愛液のせいなのね。バイブを突き立てられて、メロメロに感じちゃってるんでしょう？」
「ち、ちがうのっ。はあンっ。も、もうこれ以上は歩けなっ……ふぁぁン」
麻衣子が力つきて床に這いつくばった時だった。
ドアがパッと開いて進が室内へ飛びこんできた。進と律子は真正面から互いの顔を見つめ合った。
「進くん、どうしてここへ⁉」
「条二兄ちゃんを助けにきたんだ！」
力強く叫ぶ進の股間で17センチの巨砲がヘソを打たんばかりにそそり勃っている。進は暴発しそうなほど硬く張りつめた極太棒を揺らしながら律子の腕をつかんだ。
「こっちへこい！」
律子がベッドへあおむけに倒れこむと、今度は麻衣子の肩をつかんで律子の上へ突き飛ばす。麻衣子は律子の裸身へおおい被さるような格好になり、ふたりの乳房は柔らかくぶつかり合った。
「なにをするつもりなの⁉」
進は麻衣子が高く掲げているヒップを片手で押さえこみ、悲鳴じみた声をあげる律子に

向かって答えた。
「まずは律子姉ちゃんが一人前にしてくれたボクのチ×ポでたっぷり満足させてあげる。質問はそれからだ！」
きっぱり宣言すると律子のＴバックを横にずらして陰唇を割りひろげる。胸の鼓動と連動してどくっどくっと脈打っている太幹を、クレヴァスの中央へズブリと突き立てた。
「あーっ！」
律子は巨根でいきなり貫かれ、あまりの痛さに悲鳴をあげた。身体の上には麻衣子がおおい被さっているので、逃げることはおろか進の極太棒をつかんで押し戻すこともできない。
「律子さまぁっ！」
進は律子の中に剛棒を入れたまま、麻衣子の秘め貝から突きでているバイブの末端をつかんでぐりぐりとえぐりはじめた。
「ああっ、ひぃーっ！」
麻衣子はか細い声で叫んで、身をくねらせた。すると尖った乳首が律子の乳首とこすれ合って疼くような快感が乳房全体にひろがっていく。秘裂を貫くバイブの振動は目の奥がチカチカするほどの快感をもたらし、蜜壺全体がうねるように収縮を繰りかえす。



「くはあん。だ、ダメぇん。そんな……ああっ、す、進く……ひうぅん」
律子もまた、狭間を襲う鋭い痛みが快感に変わっていくのを感じていた。進の若くたくましいペニスが陰穴を出入りするたびに膣は愛液をにじませて、ヌルヌルした淫汁は秘花から溢れてお尻の割れ目のほうへと伝い落ちていった。
「律子姉ちゃん、女同士でイチャつくのもいいけど、ボクのだっておいしいだろ？」
「おいしいわ。すごくおいしい……あひん！　奥まで刺さるぅ。刺さっちゃうぅー！」
「ンはっ……はあぁっ。律子さまぁ、そんなに動いちゃダメぇ。乳首がこすれてジンジンしちゃうぅ。イッちゃいそうなのぉっ」
進は麻衣子のそんなよがり声を聞くと、バイブをつかんだ手と律子の秘裂を犯す剛棒を、まったく動かさなくなった。
「どうしたの？　ねえ、進くん、中途半端はイヤよ。お願いだから最後までイカせてぇ」
律子は進の巨根をむさぼるように下からヒップを突きあげる。
進は興奮して赤く染まった顔に怒りの表情を浮かべて、律子を見降ろした。
「兄ちゃんの居場所を今すぐ言うんだ。そうすれば最後まで犯ってやる」
「進くんったら、なにを言ってるの？　お姉ちゃん、よく意味がわからないわ。質問はあとにするんだったたんでしょ、早くイカせてぇ」

「ダメだ。兄ちゃんの居場所を言わないと、ボクのチ×ポもこのバイブも今すぐ抜いて、ふたりとも裸のままで外にいるマスコミの前へ放りだすぞ」
「そんな⁉」
律子のかわりに麻衣子が息を弾ませながら答えた。
「条二さんは今日の夕方、別棟にある実験室のドアを破ってどこかへ逃げていったわ。みんなで行方をさがしているところなの」
「行方不明って、その話、本当なのか?」
「本当よ。ジョージは素っ裸だったから、あたしも心配してるの」
進は呆然となったが、すぐに気を取り直してふたりに質問する。
「じゃあ、誰が兄ちゃんをヌクヌル原人の子孫に仕立てあげたんだ? 誰があんな大ウソぶっこいたんだよ?」
けれど、ふたりは答えようとしない。進は怒りもあらわに、
「マンガで読んだんだけど、女のマ×コは男の手首がすっぽりハマっちゃうくらい柔軟性があるんだってね。正直に言わないと、麻衣子にフィストファックとかいうやつをしてやるぞ! それでもいいの?」
「いやーっ! お願い、それだけは堪忍して」

麻衣子は悲鳴をあげて泣きだした。律子の脇に両手をついて身体を起こしながら、進に説明する。

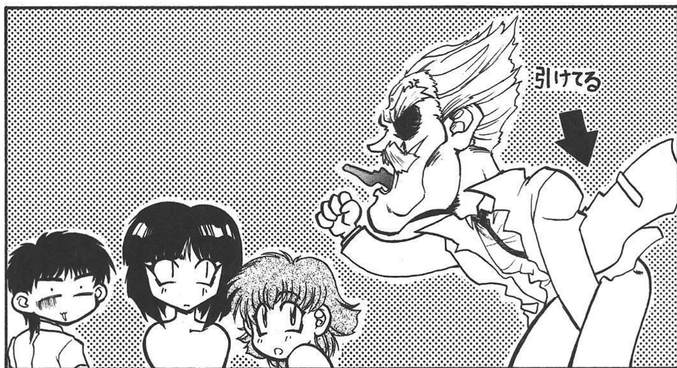
「わたし、大学院で、ひとりの人間が特別な環境に置かれて自由を奪われるとどうなるのか、っていう研究をすることになったの。本当ならアルバイトを雇って1日か2日だけ個室に監禁して実験データを見るだけのつもりだったんだけど、テニス友達の律子さまがもっといいアイディアを思いつかれて……」

「姉ちゃん、いいアイディアってなんだよ？」

「麻衣子ちゃんのお父さん、つまり三平太教授が何年か前にヌクヌル原人の骨をひそかに発掘されて、そのうち学会で発表するつもりでいる、っていう話を利用することにしたのよ。ジョージはあの通り人並み以上に立派な巨根の持ち主だし、顔や体つきは荒々しくて原人に仕立ててあげるにはうってつけだったわ。そこで教授に『ヌクヌル原人の子孫らしい男がいる』ってジョージのことを吹きこんで……」

「な、な、なんだとーっ⁉」

くぐもった声とともに部屋の隅に置かれていた洋服ダンスの扉が開いて、中からひとりの男が血相を変えて飛びだしてきた。それはたったいま話題になっていた三平太教授その人だった。どうやら娘たちのレズプレイを楽しんでいたらしく、片手で股間を押さえ、へ


引けてる

っぴり腰になっている。

「麻衣子、今の話は本当なのか⁉　わたしはおまえたちの冗談にまんまとだまされて、あの男をヌクヌル原人の子孫だと思いこんだというのか⁉」

「お、お父さま……」

「どうして嘘をついたりしたんだ。わたしは屋敷を改造し、そのうえ大切な研究結果にでたらめのデータを盛りこんで、学会と世界中のメディアに公表してしまったことになる。それもおまえがついた嘘のおかげでだぞ！」

進が体をどけると、麻衣子は後ろめたそうな表情でノロノロ立ちあがった。ベッドの端に座り、三平太の顔は見ないようにしてボソボソとつぶやく。

「ごめんなさい。わたし、お父さまをだますつもりはなかったの。ただ、大学院に提出する論文をいいものに仕上げたかっただけなの」

「わたしの顔は泥まみれだ。おまえが泥を塗りたくったんだぞ！」

「ごめんなさい。本当に悪気はなかったの。ただ、条二さんって、お父さまが頭蓋骨を発掘して復元したヌクヌル原人の顔に、本当によく似てたから……」

「原始人に似た顔で悪かったな」

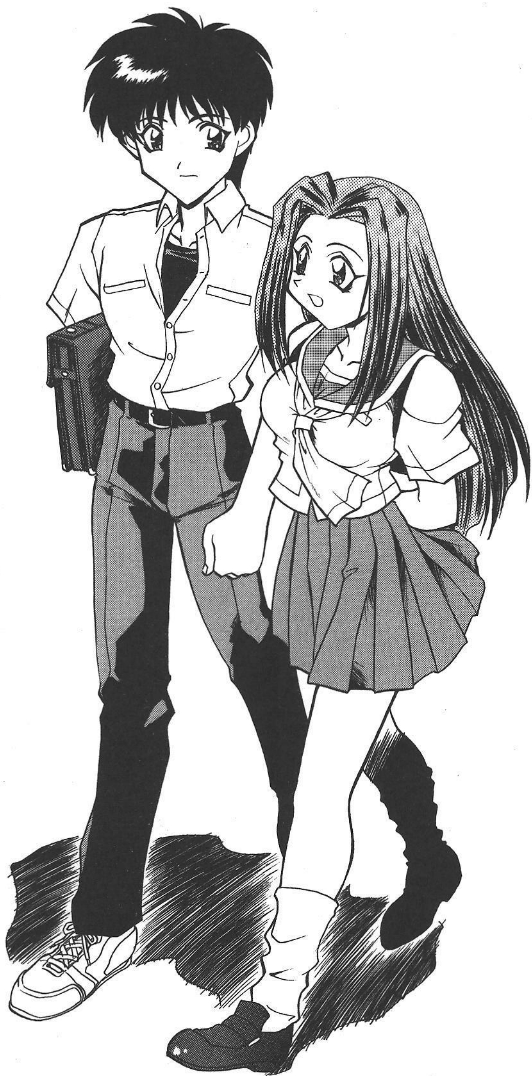
新たな声が聞こえて全員が振りかえると、ドアのところに条二が立っていた。どこかで

くり

調達したらしき古着を身につけ、ゲンナリした表情で進や麻衣子の顔を見くらべる。
「どうせそんなことだろうと思ってたぜ」
「ごめんなさい」
麻衣子は震えだす唇を両手でおおって条二を見つめた。
「三平太の顔はともかく、ヌクヌル原人のレッテルをベッタリ貼られちまったこのオレはどうなる？　麻衣子が嘘をついたおかげでメチャクチャになったオレの人生は、どこの誰がどう責任を取ってくれるってんだよ？」
条二の悲痛な声を聞くと、誰もが言葉を失ってしまった。
「ごめんなさい。こんなことになるとは想像もしていなかったの。本当にごめんなさい」
麻衣子のすすり泣く声だけが部屋の中に反響し、条二は両肩を落として大きなため息をついた。

第10章　選んだ未来はバラ色ハッピー！

翌日、進はいつもと同じようにネボスケの桃代を叩き起こして学校へ出かけた。
登校する途中、進の話を聞いた桃代は目を丸くして聞きかえした。
「じゃあ、条二さんと進は、実は血がつながっていない赤の他人で、条二さんだけがヌクヌル原人の子孫なのね？」
「うん。兄ちゃんは、赤ん坊の頃、うちの玄関先に捨てられてたんだって。父さんと母さんはちょうど子供ができなくて悩んでたから、神様のご慈悲だろうって自分たちの子供にしたんだってさ」
そういうことにしておこう、と言いだしたのは条二だった。
「オレがヌクヌル原人の子孫でないことがわかれば、いろんなやつらに迷惑がかかる。そ



れならいっそのこと、本物のヌクヌル原人になっちまえばいいんじゃないか？」
ひとつ嘘をつけば、その嘘を信じこませるためにまた嘘をつかなければならなくなる。でも、条二がヌクヌル原人になったところで、死にそうなほど困るような人間はひとりもいない。ただ、日本の歴史、日本人の発祥地がちょっぴり変わるだけだ。
「桃代、この話は絶対誰にも内緒だぞ。誰かに言ったりしたら絶交だからな」
「うん、わかった。あたし、絶対誰にも言わないようにするね」
桃代は真剣な表情でうなずいたが、たぶん一時間もしないうちにこの話は学校中にひろまってしまうだろう、と進は思った。
「それでいいんだ。兄ちゃんは自分で自分の人生を選んだんだから」
進が寂しげな表情で廊下を歩いていると、後ろから肩をポンと叩かれた。
振り向くとそこに恵里香が立っている。恵里香は心配そうに問いかけた。
「おはよう。どうしたの？　元気ないみたい」
「元気だよ。元気だけど、少し落ちこんでるだけさ」
「授業がはじまる前に聞いて欲しいことがあるんだけど、ちょっといい？」
恵里香は進を誰もいない水飲み場のほうへ連れていった。
「あのね、実は、佐久間くんとエッチをするバイトをくれた人の正体がわかったの」

「それって、山本三平太教授だったんだろ？」
「どうしてわかったの？」
「教授に聞いたからさ。三平太教授はボクが本物のヌクヌル原人かどうかを確かめようとして、きみにあんなバイトを頼んだんだってね」
「そうなの。あとから聞いてびっくりしちゃった。教授がね、わたしがバイトをきちんとやったお礼に父さんの手術を友達のお医者さんに頼んでくれて、タダでしてもらえることになったの。それを聞いたら、わたし、もうすごくうれしくって！　このこと、佐久間くんに一番最初に報告したかったのよ」
「そうか。よかったね。……実はボクも恵里香さんに話したかったことがあるんだ」
　進は桃代に説明したことをもう一度恵里香にも話して聞かせた。思った通り、恵里香も驚いているようだ。
「佐久間くんもいろいろと大変だったのね」
「ああ。でも、ボクは平気だよ。たとえ兄ちゃんがヌクヌル原人の子孫でも、条二兄ちゃんはいつまでもボクの兄ちゃんんだ。小さい頃からボクの面倒を見てくれて、いろんな相談に乗ったり、遊んでくれた大事な兄ちゃんなんだ」
　恵里香は子猫のような可愛い笑みを浮かべた。

「佐久間くんってすごく兄弟思いでやさしい人なのね。わたし、佐久間くんのことがますます好きになっちゃいそう」

進は恵里香の顔を見ているだけで、キスをしたくてたまらなくなってくる。その細い肩をつかんで唇を奪おうとした瞬間、頭上で予鈴が鳴りはじめた。

「チェッ。神様はイジワルだな」

「イジワルだけど、時々すごく親切だと思うわ。だって、佐久間くんとわたしの仲を取り持ってくれたんだもの」

「そうか、それもそうだね」

進と恵里香はどちらからともなく微笑み合って水飲み場から出ていった。

☆

『ヌクヌル原人発見！』のニュースが世界中にひろまってから、2週間がすぎた。

条二は、実験室の中央で床の上に座る麻衣子を見降ろしている。

「その衣装は気に入ったか？」

麻衣子は黙ってイヤイヤと頭を横に振った。

麻衣子は全裸に剝かれて荒縄を打たれていた。縄は白い巨乳を8の字に緊縛し、胸の谷間でクロスした両端がそれぞれ首と狭間へとのびている。まるで十字架のような縄目は、



いた。

女体の完璧な美しさを強調している。両腕は背中のほうで手首をひとまとめにくくられて

「お願いだから、こんな変なことをするのはやめて」

「なんでだよ？　おまえ、オレの……いや、ヌクヌル原人の言うことならなんでも聞く、命令には必ず従うって言ったじゃないか」

条二の言葉を聞くと、麻衣子は涙ぐんでうつむいた。自分のついた嘘が原因で、ひとりの男、すなわち佐久間条二の人生を変えることになってしまったのだ。

「こんなことなら、あんな嘘はつかなきゃよかった」

「そいつは『あとの祭り』ってやつだろ」

ヌクヌル原人のレッテルを貼られた条二は三平太教授や進と相談した結果、元の生活には戻らずにこれからも自分の部屋そっくりに改造された実験室で生活する道を選んだ。

麻衣子は食事をつくって運んだり、条二の身のまわりの世話をしている。彼女の悪知恵に荷担した律子も同罪ということで、条二に命令されれば仕事を休んででも実験室へくるという約束になっている。

条二は麻衣子の顎に手をかけ、顔をあおむかせて瞳を覗きこんだ。

「物事はなんでも考えようだ。どんなことでも、その気になれば楽しめるはずだぞ。他の

女が経験できないことをしてもらってると思って、楽しめばいいじゃないか」
　麻衣子は泣きそうになって反論する。
「そうは言うけど、わたし、こんなことをされても楽しめないわ。条二さんをヌクヌル原人にしちゃったおかげで、こんな恥ずかしいことを毎晩のようにされると思ったら、人生がメチャクチャになっちゃうって感じよ。まるでどん底まで落ちてしまったみたい」
　条二は唇の端に微笑をたたえて言った。
「なぁ、麻衣子ちゃん。今の自分の生活を苦しいとかいやだと思うなら、どんな人生が自分にとって幸福なのかを考えて、そうなれるように努力してみろよ。人生はいつもつらいことや苦しいことばかりじゃない。今がどん底なら這いあがるのさ。まだどん底の一歩手前にいると思うなら、それ以上は落ちないように気をつけて、少しずつ登っていけばいいんだ」
「哲学者みたいなことを言うのね。でも、条二さんがヌクヌル原人でいるかぎり、わたしはきっと幸せにはなれないわ。ねえ、条二さんは、こんなことをして本当に楽しいの？」
「もちろん楽しいさ。これから少しずつおまえを調教して、マゾとしての素質を開花させてやるんだ。そうすればどんな痛みでも快感になるぞ。乳首を洗濯ばさみで挟まれたり、尻を叩かれただけでもエクスタシーを感じるようになる。信じられないくらい深い快楽、

つまり悦楽地獄ってやつを味わえるようになるんだぜ。楽しみだと思わないか？」
麻衣子はとまどいの表情を浮かべて自分の身体を見降ろした。今は肌に食いこむ縄が痛いだけだが、条二の調教を受ければ快感を感じるようになるのだろうか？　そんなことをぼんやり考えていると、自然と身体が疼いてくるような気がする。
「ごめんなさい。アソコに縄が食いこんでて、すごく痛いの。お願いですから、そろそろ縄をほどいてくださいません？」
「だめだ。オレの調教を心から喜んで楽しむようになるまでは、勝手なことはさせないぞ。なぁ、麻衣子、今に、おまえがいくら縄や鞭をいやがっていても、身体のほうはオレの言うことをよく聞くようになるはずだ。そうなった時が楽しみだな」
条二は麻衣子の両膝をつかんで強制的に開脚させた。恥丘を割って秘裂に食いこむ2本の縄をかきわけ、膣口をあらわにする。すでにしっとりと潤っていた蜜壷の入り口は、条二が指で揉みしだくとヒクヒクと反応する。
「中がだいぶ濡れてきたようだな。そろそろこいつをハメてやるか」
条二は麻衣子の秘孔へ男根そっくりのバイブをゆっくり挿入していった。バイブは条二の剛棒と同じくらいの太さがあり、その表面は大小様々な大きさの凸凹がついている。
「ああ、いや……」

「いや、とかなんとか言いながら、ずいぶんすんなり咥えこむじゃないか。スイッチは3段階のどこへ入れて欲しい？」

麻衣子は裸身を震わせるだけで、答えようとはしない。条二は縄の間からプクッとはみだした乳房をねじるように揉みあげて返事を催促する。

「ひいっ！　じ、弱です。弱がいいの」

「いつまでたっても嘘つきなお嬢さんだな。強がお気に入りだろ？　きのうもおとついも強でイッたじゃないか。忘れたのか？」

「わ、忘れてません。でも、強だと感じすぎてつらいんです」

「つらいんじゃなくて、気持ちよすぎて最高なんです、だろ？」

条二がスイッチを強へ合わせたと同時にバイブがぐにぐに動きだし、麻衣子の裸身がビクッと跳ねる。

「あンっ。や、やぁン。だ、ダメぇ」

「そいでは、お次は……」

「待って。これからなにをなさるの？……ま、まさか⁉」

麻衣子は突然怯えた表情になって条二を見あげた。

「安心しろ、アヌスは犯さないよ。そのかわり、たっぷりフェラチオしてもらおうか」

条二は部屋の隅にある小型冷蔵庫からビタミン飲料を1缶取ってきた。ひとくち飲んで喉を潤してから、麻衣子の唇の輪郭を指先でたどる。
「こいつを上のお口にたっぷり含んだままでフェラチオするんだ。いいな？」
麻衣子は花奥でうごめくバイブの動きに息を弾ませながら、おずおずと美唇を開いた。内心では、条二の言う通り、今の境遇をつらいと思わずに、楽しんでみようという気になっている。炭酸の入った液体を口いっぱいに注ぎこまれて、そこへ条二の怒張が挿入される。
「うわ！　冷たいな。炭酸がぷちぷち弾けてゾクゾクするぜ。麻衣子ちゃんはチ×ポをしゃぶるのが大好きだったよな。ちゃんと先っぽまで硬くなるように舐めなめするんだぞ」
潤んだ瞳でうなずくと、麻衣子は喉奥深く押しこまれた極太棒を舐めはじめる。バイブの動きに合わせてヒップをくねらせながら大きな亀頭をしゃぶり、舌の先で裏スジをたどっていく。
「うぅ〜ん。さすがは麻衣子ちゃん。舌使いが絶妙だなぁ」
さすがに液体を口に含んだままのフェラチオは息をするのが難しい。麻衣子はとうとう極太チ×ポを咥えたままでドリンクを飲みくだしてしまった。小さな鼻をふくらませて、泣きそうな目で条二を見あげる。

条二は八分勃ちになった太幹を麻衣子の朱唇から抜き取った。だ液でぬるぬるになっている亀頭を童顔のほっぺたへ押しつける。
「さーてと、麻衣子ちゃん。こいつをどうして欲しい？」
「あの……オマ×コにはバイブを入れていただいているので、どうかお尻の穴に条二さんの太くてたくましいおチ×ポを入れてくださいませ」
麻衣子は真っ赤になって恥ずかしいおねだりをする。
「バカだな。アヌスファックは今夜はしないって言っただろ。バイブとチ×ポ、どっちをオマ×コに入れて欲しいか言ってみろ」
「チ×ポです。条二さんのおチ×ポを麻衣子のオマ×コに入れてぇ」
床に座った麻衣子は両膝を立てて白い内腿をひろげ、バイブを突き立てられたアソコを条二の視線にさらした。縄が食いこんだ乳房はピンク色に染まり、乳首がツンと尖っている。
条二は入れたくてたまらないくせに、わざと欲望を抑えて平静を装う。亀頭の先割れから吹きだしているカウパー液を指ですくって女の唇へ塗りつけると、麻衣子は舌をのばしてその指にむしゃぶりついてきた。
「まったく、しゃぶるのが好きな女だな」

「お願い、入れてっ！　早くしないと、バイブでイッちゃいそうなの。麻衣子、条二さんのおチ×ポでイキたい。生のおチ×ポでなきゃイヤなのよぅ！」
「おやおや。そんなに恥ずかしい言葉を平気で言うとは、麻衣子ちゃんもずいぶんとスケベな女の子になってきたもんだ」
「だってだって、ああン。もうだめぇ」
麻衣子はヒップを床から浮かせてクイクイ振りたてる。秘孔から溢れたみだらな液は床をべとべとに濡らしていた。それを見て、条二の怒張もカッと熱くなってくる。
「それじゃ、入れてやるとするか」
と言ったところで、実験室のドアがノックされた。
「ただいまーっ」
部屋に入ってきたのは晴海だった。床の上のふたりを見ると意外そうな顔になる。
「あらやだ、もうしてたの？」
「お帰り。どうだ、一発やるか？」
条二はスーツ姿の晴海へ近寄り、キスをしながらスカートの中へ片手を入れていく。
「あっ！　やだぁ、条二さん、晴海さんなんか放っておいて、早く麻衣子のマ×コにおチ×ポ入れてぇ」

けれども条二は麻衣子を無視して晴海をベッドへ押し倒した。
晴海もまた条二と一緒に会社を退職して、今や世界的な有名人となったヌクヌル原人のマネージャーになって彼のスケジュールを管理している。
条二は晴海が取ってくる仕事をこなし、オフの時は時々サングラスをかけて外食に出かけたり、スポーツクラブを1日中借りきって運動したりしていた。外出には進が一緒の時もあるし、麻衣子や晴海がデートの相手をする時もある。
「待ってよ、条二。仕事の話を先にしたいの」
「話くらい、やりながらでもできるだろ」
条二は抵抗する晴海の服をはだけて小麦色の乳房を舐めはじめる。タイトミニはすっかりウエストまでめくれあがって、総レースの黒いパンティが見えている。
「じゃあ言うわ。明日の午前中は好男社の雑誌インタビュー。午後はグラビアの撮影で、それが終わったら8時までオフ。そのあと10時から『スーパーニュースNOW』へ生出演ということになっているわ」
「『スーパーニュースNOW』は全国ネットのニュース番組だろ。そんな仕事を取ってくるとは、晴海の腕は一流だな」
条二は晴海の乳首を吸いあげながら秘唇をかきわけ、敏感な肉芽へ指腹を押しつけてコ

ロコロ転がしていく。

「ああん、あたしの一流なトコは腕だけじゃないでしょ。くはあっ。そんなにいじられたら濡れてきちゃうぅん」

晴海は条二の夜の生活も管理していた。麻衣子と晴海そして律子ら3人の美女が、交代で、あるいは3人同時に条二の好みに合わせてセックスの相手をした。3人はいつも新妻のように初々しく身体を開き、素晴らしく甘美で刺激的なプレイを条二とともに味わった。晴海は時々、ヌクヌル原人の体を味わいたいという金持ちの女たちをこの部屋へ連れてきて、大金と引きかえに条二の極太ペニスを楽しませてやったりもしている。

「今夜はそんな気じゃなかったのに。ふはっ。はっ。じ、条二ぃ」

晴海のクリ×リスは指技に反応し、硬くしこってくる。条二は晴海の準備ができたと悟ると、ガマン汁を秘孔へ塗りつけ、膣の中に巨根を少しずつ埋めていった。

床に放置されたままの麻衣子は、せっかく勃たせた条二のペニスを晴海に奪われた屈辱で唇をわななかせた。

「いゃあ! 条二さぁん、わたしを先に犯してぇ。ま、麻衣子イッちゃうの。バイブが……ああン。ダメぇ。イッちゃうーっ!」

双眼を涙で潤ませ、ベッドの上のふたりをにらみつけながら、緊縛された裸身を震わせ



て絶頂に達した。それでもバイブは休むことなく動きつづける。
「条二ぃ、あっ。ひはあっ、やぁん。お、奥に当たっちゃうぅん。ひぐぅーっ！」
晴海もまた、半裸に剝かれた姿でベッドに横たわり、V字に開いた両脚を宙高くへ突きあげたままでエクスタシーを迎えた。
ところが、晴海の日に灼けた身体に愉悦の震えがひろがっても、条二はまだまだイキそうにない。形のいいヒップを両手で抱えあげ、20センチの巨砲を激しく抽送しながらゆっくり昇りつめていく。毎晩のように女たちと交わっているおかげで自然と持続力がついて、そう簡単にはイケない体質になったのだ。
「ひああん。まっ、またイッちゃうぅん」
晴海が二度目の絶頂に達すると同時に、ようやく条二もスペルマを放出した。
「ひどいわ、条二さんったら、わたしを放っておいて晴海さんをイカせちゃうなんて」
条二はまだひくつきを残す晴海の秘孔から太竿を抜いて、床の上にいる麻衣子のほうへ歩み寄る。陰口からわずかに突きでているバイブをつかんで一気に抜き取った。
「せっかく勃たせてくれたのに、順番を破って悪かったな。今度はおまえのオマ×コに入れて、中でじっくり勃たせてやるからたっぷり味わえよ」
「まぁ！　たったいま果てたばかりなのに、またできちゃうの？　すごいわ。条二さんっ

てすごすぎよ。ヌクヌル原人って絶倫ね！」
麻衣子の言葉を聞くと、条二は苦笑を浮かべてピンク色の秘花へ自慢の息子を挿入していった。

☆

その日の真夜中すぎ。
眠っていた条二は、真っ暗な部屋へ何者かが侵入してくる気配に気づいて目を覚ました。
「熟睡しているみたい？」
「シイッ。大きな声を出さないで。目を覚ましちゃうじゃないの」
条二はしょぼつく両目をしばたきながら起きあがり、枕もとのライトをつけた。するとベッドの周囲を数人の女たちが取り囲んでいる。
女の数は全部で5人。年令はだいたい30〜40歳くらいで、みんなお上品なスーツやワンピースを身に着けている。髪や化粧の手入れが行き届いていて、お金持ちの奥様たちといった雰囲気を持っていた。
条二は大きなあくびをすると、手足をのばしながら言った。
「あんたら、誰だよ。このオレが誰だかわかってるんだろうな？」
奥様たちのリーダー的存在らしい中年の女が仲間を代表して答える。

「わたしたちは全日本優良主婦連合、すなわち『全優連』のメンバーです。わたしは連合長を務める小川佐知子。あなたはヌクヌル原人の子孫でしょう？」
「全優連なんて聞いたことないな。それで、おまえら、いったいオレになんの用だよ？」
「あちこちで報道されているように、ヌクヌル原人のあなたが世界中の女性に有害かどうかを調べにきたの」
「オレが有害だって？」
「そうよ。この雑誌に書いてある通り『ヌクヌル原人は絶倫で、感度のいい女を見分けるのが上手である。狙った獲物は必ずモノにし、絶頂を味わわせられる』のだとしたら、あなたは全世界の女性の敵よ。放ってはおけないわ」
「感度のいい女を見つけてイカしてやって、どこが悪いんだよ？　男なら誰だってやってることじゃないか。ナンパした女とセックスしてるのは、オレだけじゃねぇぞ」
佐知子は息を呑んで女たちにちらっと視線を向けた。それが合図だったらしく、女たちが全員ワッとばかりに条二に群がっていく。
あっと言う間に、条二の体は女たちの手でベッドの上に張りつけられてしまった。４人の女がそれぞれ四肢の先を押さえこんで、両脚の間に佐知子がひざまずく。その手には刃をくりだしたカッターが握られていた。

、「なにする気だ⁉」

佐知子は無言で条二のパジャマに手をかけた。ズボンとトランクスをまとめてつかんで、それをカッターの刃で切り裂いていく。すぐにぐったりとした極太棒が出現した。

「まあっ！　すごいわ」

「なんて太いの。ううん、太いだけじゃなくて、すごく長い！」

「ああ！　これからこんなに立派なものをアソコに入れるんだと思うと、わたし、わたし……見てるだけで感じちゃうわぁ」

女たちは口々に条二の怒張を褒めそやし、その目を潤ませていく。興奮でドキドキ高鳴ってくる胸を両手で押さえる奥様もいた。

「どなたが最初に召しあがる？」

「もちろん佐知子さんよ。佐知子さんはわたしたちのリーダーですもの」

「そうよそうよ。佐知子さんからお試しになって」

条二は女たちの会話を聞きながら、深々とため息をついた。きっと、この女たちも敏腕マネージャーの晴海に「ヌクヌル原人の巨根と絶倫セックス」を高額で売りつけられたのだろう。そうでなければ、セキュリティシステムつきの実験室へこうも簡単に入れるはずがない。

「おまえら、オレとエッチがしたいならしたいって、最初から言えよな」
佐知子がすぐに問いかえす。
「前もって言ったとしたら、どうしたかしら?」
「もちろん拒否する。オレは誰とでも寝るようなバカな男じゃないからな」
「嘘おっしゃい。山本教授はテレビで『いつでもどこでも誰とでもセックスをするような原始人は珍しい、ヌクヌル原人だけに見られる特徴だろう』と言っていたわ」
「そうよそうよ。佐知子さんのために、わたしが舐めて勃たせてあげるわ」
条二の太腿を押さえていた奥様が股間の息子にむしゃぶりついてくる。亀頭を片手でつまみ、先割れを指先でくりゅくりゅいじりながら、ハーモニカを吹くように太竿に舌を巻きつけてねっとり舐めあげる。
「やめろ。おまえら、そんなことしていいと思ってるのか?」
「んまぁ!　抵抗するふりをするなんて、ヌクヌル原人も可愛いところがあるのね」
「ヌクヌル原人の舌技ってどんなかしら?　ねえ、わたしのアソコを舐めてごらんなさい。うまくできたらご褒美をあげるわよ」
一番年上の女がスカートの裾をたくしあげて条二の顔にまたがっていく。最初からセックスをするつもりでいたらしく、パンティをつけていない剝きだしの秘部を口もとへ突き

つけてクンニリングスを強要する。
「むっ。ぶぶっ」
条二は顔面に押しつけられた割れ目をいやいや舌で舐めあげた。女の秘花を舐めるのはきらいではないが、見知らぬ女に強制的にクンニリングスをさせられるのは不愉快だ。ゲロが出そうなくらいイヤイヤクンニをしているというのに、亀頭を指でくじられて太幹をハーモニカのようにフェラチオされると男の欲望はいやでも高まり、腰がムズムズ疼いて気持ちよくなってくる。
「んまぁ！　ヌクヌル原人のこれ、舐めてるうちに根元から硬くなってきたわ」
「本当にすごいわねぇ。先週の女性週刊誌には『ヌクヌル原人は百発百中・毎晩勃つ絶倫男』と書いてあったけど、本当だったんだわぁ」
奥様たちは感心しきった顔つきで股間からビンとそそり勃った極太ペニスを四方八方からじっくり観察する。
条二はなおもクンニリングスをつづけながら胸の中で「勝手なことを言いやがって」と毒づいた。
「ほら、ペニスの先端からカウパー液が溢れてきたわ。佐知子さん、そろそろ挿入なさってはいかが？」

「そうですわね。それでは、思いきってお毒味させていただきますわ」
条二はクレヴァスから顔を離して女たちを怒鳴りつける。
「このクソ女、勝手なことをするとタダじゃおかねぇぞ！」
「んまぁ！　ヌクヌル原人め、とうとう本性を現わしたわね。みなさん、このケダモノはとても凶暴なようですわ。きちんと手足を押さえておいてくださいましね」
佐知子はゴクッとつばを飲み、条二の股間からそびえ勃っている絶倫棒をつかんだ。先割れから吹きだしている透明な液を指ですくって、その手をスカートの奥へ持っていく。
「あら、佐知子さんはまだ準備が整ってらっしゃらないの？」
「いいえ。わたし、実はもうすっかり濡れているのですけれど、これだけ太くて長いものを受け入れるには、もっと濡らしておかないと……」
佐知子はそう説明して自分の谷間へ条二のガマン汁を塗りつけていく。くすんだピンク色のスリットをいじっているうちに、ハァンと色っぽい吐息をついた。つづけてスカートを脱いで下半身だけ裸になる。
「それではみなさん、いただきますわ」
「待て、入れるな！」
「ヌクヌル原人め、おとなしくなさい」

条二はまたもや陰部で口をふさがれてしまい、苦しそうに鼻で息を繰りかえした。
「入れますわよ」
佐知子は四肢を拘束された条二の腰に馬乗りになり、秘唇を指で割りひろげた。クレヴァスのやや下部に位置する秘孔へ濡れた亀頭をうずめていく。
「はんっ！　すごく太いわ。それに、とても硬いの。ずっと奥まで……。はぅんっ、ど、どこまで入るのかしら？　裂けてしまいそうだわ」
うわずった声をあげて豊かな腰を沈めていく佐知子を、女たちはうらやましそうな顔で見守った。
「大事なところが裂けてしまっては大変よ。佐知子さん、無理はなさらないでね」
「ええ。途中で少し動かしてみるわ。……はひいっ！　だ、ダメぇ。このペニス、たくましすぎて、わたし、あっと言う間に昇りつめてしまいそうよぉ。はぁっ、あん」
佐知子は条二の極太ペニスを半分ほど秘唇に呑みこんだところで、腰を左右に揺すりはじめる。
「むっ……。うぅん」
条二は低いうめき声をもらした。女の牝壺はところどころブツブツしていて、肉壁をうねらせながら太竿に絡みついてくる。女たちの指で乳首と玉袋をまさぐられ、体中を舐め

あげられると、目の奥で白い閃光がいくつも光って全身の血肉が小刻みにスパークする。
「うおぉっ！　ヌクヌル原人の岩みたいに硬くなったペニスが、わたしのアソコの奥でメチャクチャに暴れまわっているわ。……わたし、もう、ああーっ、いくぅ、いくーっ！」
佐知子は条二の剛棒を思うぞんぶんむさぼりつくすと、あられもない声をあげて絶頂に達した。エクスタシーの余韻でヒクヒクしている膣から、まだ元気にそそり勃っているペニスをぬろんと抜き取る。
「まだ勃起しているなんて、すごいスタミナだわ。絶倫そのものじゃないの」
「佐知子さんの次はわたしよ」
「ああん、ずるいわ、尚子ったら。あなた、じゃんけんで負けたくせに！」
女たちの嬌声を聞くともなく聞きながら、条二は甘美な拷問パーティの主役をつとめることに、いつしか喜びを感じるようになっていった。

【おわり】

あとがき　誘惑してね♡

「いや〜ん。なにこれ⁉」
　気がついたら、わたし、全裸でベッドの上に縛りつけられていたの。オマケに身体中が熱く火照っていて乳首は両方とも硬く尖っている。アソコなんかもうすっかり濡れぬれみたいなの。
「もしかして寝てる間に誰かに誘拐されて、エッチなことをされちゃったのかしら？」
「目が覚めたようだな。わたしは山本三平太。世界的に有名なヌクヌル原人の研究家だ」
「あら、はじめまして。ナポレオン文庫その他でエッチな小説を書いてる紅くりすです」
「これはどうもごていねいに。名刺はどこだったかな……じゃないぞ。今夜はおまえを被験者として扱う。まず強力な媚薬を飲ませて身体中が敏感になるクリームをたっぷり肌に

塗りこんでやる。オマ×コとアヌスへ特太バイブを挿入して、助手の中島と3Pだ」
「いや〜ん。くりす、本当はエッチなことは苦手なんだもん。誰か助けて！ ウルトラスーパーイカしたオマ×コーっ！……うわ〜ん、ダメだぁ。誰も助けにきてくれないよぉ」
するると突然、研究室の窓が外から破られて、粉と砕けたガラスとともに、おそろしく背の高いマッチョな男、条二が飛びこんできたの。
「わーっはっはっはっは。オレの巨根が風を呼ぶ。ヌクヌル原人参上！ おい三平太、濡れぬれお姉ちゃんのナイスバディはこのオレがいただくぜ！」
と豪快に叫んだと思うと、わたしの手首の縄をひきちぎり、両腕で軽々と抱きあげて窓から飛びだした。厚い胸に全裸のくりすを抱いたままで、夜道を素早く走りだす。
「ベイビー、今夜はオレ様ご自慢の太チ×ポでさんざん責めて嬲ってイカせてやるからな。泣いてよがって身悶えて、何度も達して気絶するまで犯してやるぞ。もしかすると腰が抜けて立てなくなるかもな。覚悟しとくがいいぜ。わーっはっはっはっは……」
あのね、くりすって、条二みたいにマッチョで猿顔系のハンサムにめちゃめちゃ弱いの。だからわたしを誘惑する時はこんなふうにしてね。うふふ。その時を想像しただけでエッチな気分になってきちゃう。あ〜ん、もう待ちきれない。早くあなたに会えるといいな♡

紅　くりす

FRANCE SHOIN NAPOLEON BUNKO
フランス書院
ナポレオン文庫

——世界で一番危険な男——
ただいまイケナイ実験中！

著　者　紅（くれない）くりす
挿　画　梨加夫（りかお）
発行所　株式会社フランス書院
　　　　東京都文京区後楽2-23-7　〒112
電話　03-3818-2681（代表）
　　　03-3818-3118（編集）
振替　00160-5-93873
印刷　誠宏印刷　　製本　宮田製本

ISBN4-8296-2092-7 C0193


9784829620922

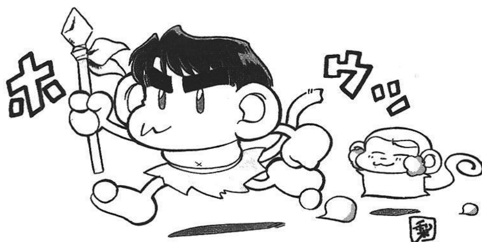

1920193005240

ISBN4-8296-2092-7

C0193 ¥524E

★定価 本体524円 +税

フィスでメイクラブ中に、突然、男たちにさらわれた条二&イケイケOL晴海。
たりはマッドサイエンティスト・三平太の研究室に監禁されて、
ッチな実験のモルモットにされちゃうの!?……



FRANCE SHOIN NAPOLEON BUNKO

フランス書院
ナポレオン文庫